



日蓮大士真実伝 全

閻花堂藏版

020076-000-7

特10-856

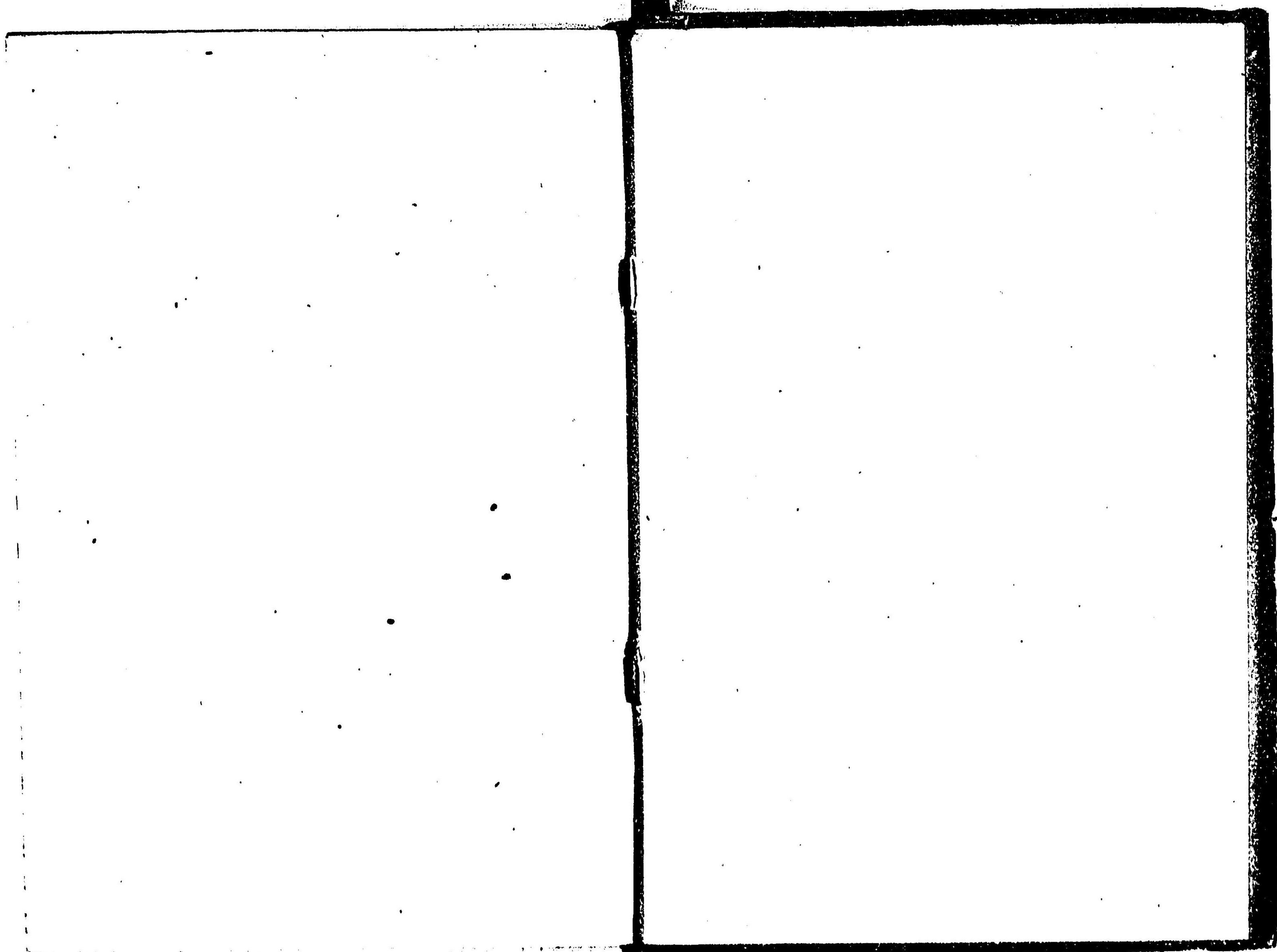
日蓮大士真実伝

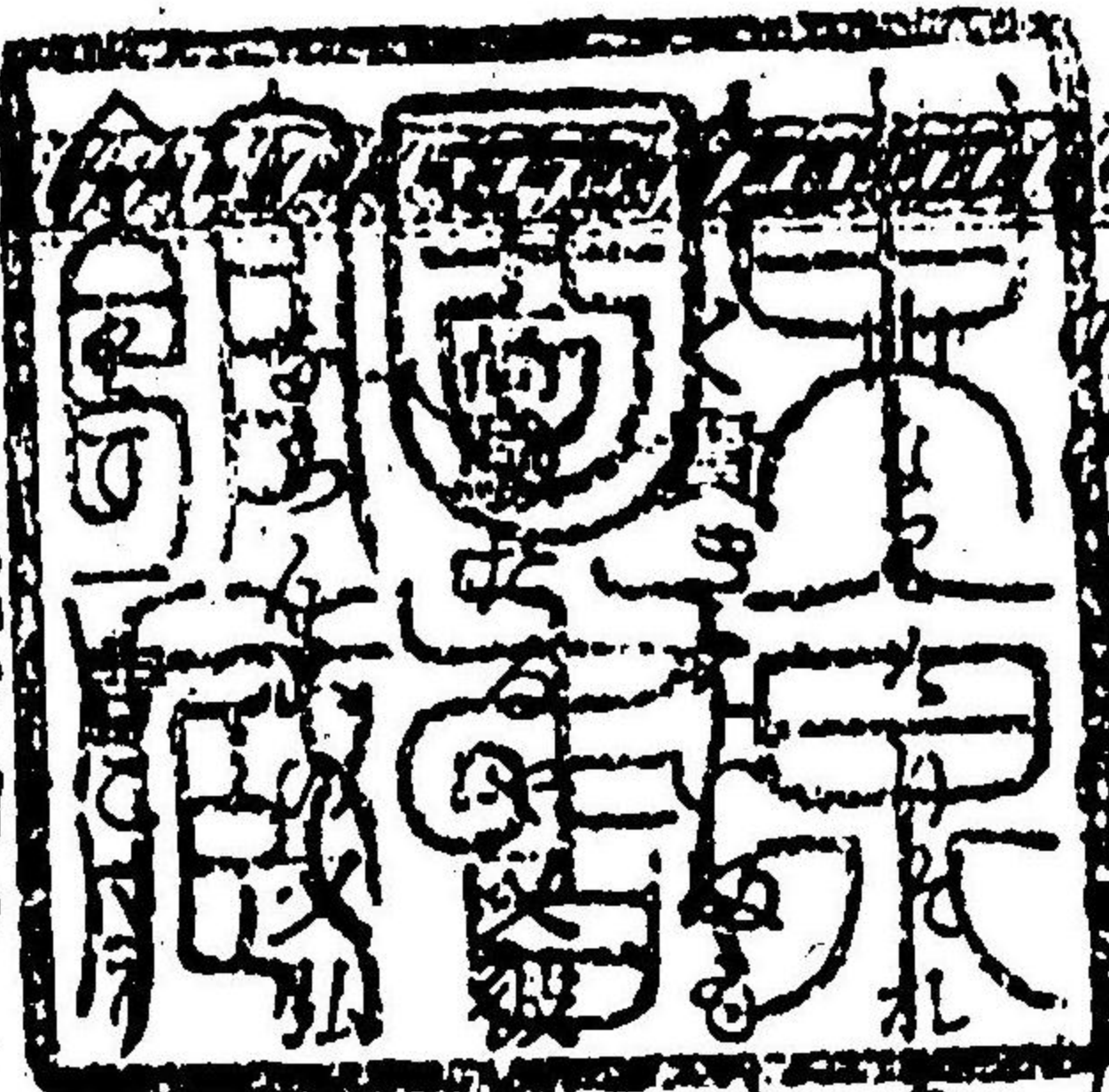
小川 泰堂/編

M20. 3

ABH-0278







明治二十年三月十八日内務省文部
 小湊お開き初しよと身延の山お薫る満る布しは高糸の高く貴き事
 の蹟を糸もころよのけ出て世の童蒙よもあふるをや次く千萬代
 よも眞さありある御法の華の妙よくはしく不詣身命の深意をんか
 のたちやあしめんの志高と東も高く貴しとも貴きハぬとれ御
 う頂きたるや八葉の蓮華なたり其蓮乃御比李比高
 ころなり豊さう昇る日蓮大士のうゝやきこたきる
 山おいとしらん爰は相摸の國人金蓮華能とさ
 蓮の一端といふをくそはあくるさしのもたしあた
 いふことしおれり

元治始乃とし春の末

従五位上行刑部少丞兼肥後守中原定靜謹書

吾高祖大士之弘法也。出於洪大慈悲心矣。當是時也。媚嫉之輩。紛然競起。謗毀譏乎天下。於是。刀杖謫竄。痛楚百端。其厄災非一也。房之於小松原。豆之於伊東。和之於龍口。佐之於塚原。此其最大者。詭為欲示甘露淨味。使濁世衆生。離苦得樂。而所受之諸難也。天台氏所謂。法不自顯。弘之在人。大雄世尊曰。諸天晝夜。常為法放。而衛護之。今也其流布於海內。而四衆普蒙遺澤者。豈是大士之鴻恩哉。小川氏有此編記。以國字。加以圖畫。要在欲令衆生。篤信而入于法華之靈奧爾。昔人有嘗曰。誘引鈍根小智者。先以卑近之法。良有以也。由此觀之。小川氏斯舉。亦是出於慈悲教導之誠意者乎。吾隨喜讚歎。而叙之。

慶應 戊辰 春 三月

池 上 日 運



高祖大士

春日清朗人來示余曰遊師一代之德行雖有先師之所撰其文為難以漢章解于女眾也今改作國字以加圖繪焉余觀之而撫額云得能著遊師一代之旨耶夫師者末法之教主而極未曾有不可思議之理然化凡下眾生心既到安國論乎即為保國全泰未曾有之妙論矣 世尊亦說唯佛與佛乃能究盡矣是止止不須說之妙經於世界而莫此師斷經主之真實天台之秘訣而塞廣宣流布之路乎一披此書解師無量無邊之辛苦然後得入一乘經師亦滿歡喜稱耶

安政庚申春日

小山陰士述

萬物各有王月天之於眾星蒼海之於江冲梅檀之於林木蓮華之於草葩皆類也出於其類拔乎其萃所以王之為王蓋羊尼聖經八萬四千亦唯有經王法華摠持群典森々萬類十界之依正無不因此經力然則法華經者國家之柱石群生之命脈不待言也其大法所現之道場膳部洲中有三初金仙從在竺土靈鷲峯而開咒之支那之智顛將護于天台山扶桑之蓮師祖逮于身延嶺此三國三山者誠大千界之神秀而其俊極之狀旁礴之態玲瓏之美瑰奇之勝皆是金輪漏山寶金之所成三聖者眾生之棟梁而三嶽者千界之靈域也三聖在三嶽扶揚此經王猶三光照三才尊之又尊高之又高可仰而信俯而尊運念於波疑心於此祥福多々遂合十指爪掌曰南謨三山三身如來本結大緣寂光為土諦觀法王法法王法如斯

維時萬延元年龍舍庚申仲夏日

小川泰堂撰書

凡例

日蓮大士一代の事蹟は行學院日朝聖人の化導記。圓妙設師の註釋等。また日省師の高祖傳。六牙湖師の別頭統紀。建立支待二公の高祖年譜。これら又至て善盡一美をつくすといへども。其文高き其旨遠くして。在家の不眠又その善美讀解がたし。又御傳記。御一代記。紀年録等の假名書あり。其は讀易けれども。事實又委しからず。今此書は古行今來その御一代よか。はるべき書類を博く考へ集めて。木化垂迹のはじめより。宗門弘通の真相。五百年前を今日こ。に見るが如く綴りなし。婦女童幼までも。この書を見て此文を讀つて。隨喜の心を發し。信心増進の補をあたんとす。其見處文旨淺く。極薄に似たれども。條理と義意とは。統て透々よ。祖意ならびよ。諸先哲の確説は根づき。漢文和語の諸傳記に。合せたれば。隨者應忽の念を爲べからず。

一 宗教宗致の法門は。一宗門の大事として茲に盡すべきよ。五百年來我が宗。英傑の諸師。かはるく世よ出て。棟をさ。牛よ汗する書類。法理宛然として四海は輝く。元來御傳記は。大士御一生の起居動靜を。記すべき書あれば。宗法の理論を立べきよ。然はあれど人法も一致なるが故よ。柳橙の餘蘊。處よ解てこれと迷る用あり。隨者その處を厭ふ事あかれ。又數か所問答法論は。これを弘經。骨體微細をつくすべき事なれど。

も。二の宗論よ滯て。御傳の意の疎薄よならん事をおもひ。唯その餘條を録して。委曲あると。其問答の記録よゆづる。又御一代の中よ小室よ法力を説く。普門の伊豆よ助。日輪の中よ不動を拜み給ふなど。正法もとより不思議ありといへども。其奇怪變態に過て。宗門の法則よ合ざる事は。置て論せず。漏たるよあらす職ざるあり。又卷中假名つかひは。古へ振に違ふべからずといへども。古言若し別す。兒女に便よとざる也。俗通よ從ふ處あり。書も亦しかり。古代の風姿。眞格の書法のみにては。觀者眼よ飽ん事を察し。趣きを當世よ寫すあり。隨者領會すべし。

一 大師の徒弟。六老僧又中老十八師等の。その餘の末師。歸依の男女又ハ一時結縁の輩など。此等を單に本文よ書さざば。翻譯がたきをもつて其本傳より。一段低くこれを別記して。其名跡雖も。まて本文よ混ぜざるやうに別す。一かはあれど木化の聖者。垂迹の顯末。大法流布の基元あれば。一紙半葉の上よあらかじめこれを盡すこと難し。願くは我が愚見のいたらざる所は。佛乘に宿志あらん士。誠信の臂力を添へ。その危殆たるを指補し。その正長を勵て。卒よ全備とあし。勸信の堤。齋す崩れず。法水を萬々年に地へもて。末法劫惡の旱魃よあれたる。衆生の心田を潤さば。これまた祖恩報酬此一分あらんかし。

木化の肉身宗祖薩埵の聖跡としるしたる世にいと多かれとその
 ふかきはつるへ繩の短して汲によしなく又山の井の汲きは結ふよ
 あかぬ心地そしはへる今此いつまきの書は意は深くもあれ詞やす
 らに尋常の人の見やすき程よつゝり成りたればその怨々をひらけ
 は大士の本地垂跡てふ事より初めその弘通のありさま途も照られ
 礫よりたれ氷りなす丹に身を列かれつゝその慈悲終に四海にあふ
 れしすかたま傳いよ一へを見るかごとくありけるとかしこみすみ
 やかにさくら木よよりはめ世におほやけよすこは語りつき言つく
 よもまして事は敷ならねともその功德はかきりあらぬにやと五百
 とせのむかしの春のいと柳くりかへしかもふものから鬼の毛の筆
 にいさ、かろのこと、ろさーを述ることしかり

安政をいつのとしかのまざるまざる中の六日

藤掛亥市
 根本明市

日蓮大士眞實傳

目錄

- 貫名家系伊谷明神奇瑞の事
- 貫名次郎重忠房州小湊配流の事
- 梅菊女盤巻を感じて懐胎の事
- 善日磨誕生祥瑞不測の事
- 善日磨村里頑童に無益の殺生を誡る事
- 六月雪霜を降らせ又礫石と雨す事
- 善日磨清澄入登山して藥王と改名の事
- 梅菊女藥王丸を清澄入訪給ふ事
- 藥王磨剃髮名を運長と改むる事
- 智慧を虚空藏より祈りて一切經を讀み給ふ事
- 鎌倉入出て大阿然阿入淨土宗と賜給ふ事
- 尊海入伴れて比叡山に登り給ふ事
- 慈覺大師の義を不審の事
- 泉涌寺入入りて大覺禪師入參する事
- 三井學室に智證の跡と尋ね給ふ事
- 善證入値て鎌倉の凶變聽給ふ事
- 三浦泰村鎌倉入謀反法華堂入て自害の事
- 運長師南都の六宗遊學の事
- 江川吉久入值遇の事
- 高野山入登りて眞言の秘法を學び給ふ事
- 聖徳太子の御遺山入詣給ふ事
- 運長師比企能本と儒佛の離合と論駁入給ふ事
- 冷泉家を訪て數嶋の道を開給ふ事
- 眞廣法印入交て東寺御室の學入入給ふ事
- 法華守護の番神叡山入示現の事
- 淨木夫妻の厚情に依て京都越年の事

- 伊勢の神廟に靈瑞の事
- 郷里に歸て両親を慰め給ふ事
- 道善御坊喜て道長師を饗應の事
- 旭日よ向て初て妙法を唱へ宗旨建立の事
- 東條景信の怒を避て華房を隠れ給ふ事
- 日蓮と改名して兩親を大戒を授給ふ事
- 故國を去て鎌倉へ趣き給ふ事
- 相州三浦米が濱着船の事
- 名越松葉が谷へ菴室經營の事
- 成辨坂山より來りて徒弟とあり日昭と改名の事
- 四條頼基運祖の教道を受る事
- 進士善春途中に同傘して運祖に歸伏の事
- 印東有國の一子を法弟として名を日朗と召

- 運祖別墅以來富木殿資財を以繼たる事
- 鎌倉十字の辻に立て折伏弘通の事
- 荏原池上南部等歸依隨從の事
- 鎌倉大地雲大雷の事
- 高祖薩州岩本實相寺の經藏に入給ふ事
- 天下大飢饉疫病流行人多く死亡の事
- 立正安國論を作て鎌倉殿を疎る事
- 最明寺時頼公高祖を對顔の事
- 松葉が谷御菴燒討亂妨の事
- 高祖中山に在て百座說法教化の事
- 吉田兼益より神道傳授の事
- 高祖伊豆國伊東に御流罪の事
- 漁者彌三郎孫見が浦へ高祖の危難を救ふ事
- 高祖伊東朝高の重病を所治す事

- 閻浮提第一の釋尊高祖感得の事
- 北條重時逝去子息長時屢惡夢を覺る、事
- 高祖赦免を得て鎌倉へ歸り給ふ事
- 神妙の經力高祖の母堂蘇生延壽の事
- 道善御坊は華房を會して教化の事
- 小松原横難法子檀越討死の事
- 市が坂の鹽中老婆縮胃子を供養の事
- 野州宇都宮遊化の事
- 長さ七十餘度の大慧星一天に亘る事
- 高祖富木の館へ越年して鎌倉へ歸る事
- 大元蒙古の賊軍日本へ逼る瀾艦の事
- 高祖十一通の書を方々に附て法論を促給ふ事
- 甲駿へ遊化して富士山へ登給ふ事
- 大早魁長親上人雨請不覺の事

- 高祖田邊が淵へ雨を祈り給ふ事
- 諸宗より高祖を讃奏して其罪死罪を極る事
- 松葉が谷へ高祖を召捕て町々を引渡事
- 鶴が岡八幡を神曉して正法の威力を示し給ふ事
- 老婆胡摩の餅を捧げて今生の面別を歎事
- 龍の口へ法華經の利胎を願給ふ事
- 明星依智を降て高祖を擁護する事
- 高祖依智を獲て佐渡國へ趣給ふ事
- 難風角田の岸に着船して不圖毒蛇と度し給ふ事
- 海上の激浪は題目と書て龍神感應の事
- 佐渡國の配所御艱難の事
- 六箇國の僧塚原に來て問答の事

- 本間六郎重述歸依の心を發す事
- 北條家一門京鎌倉合戦の事
- 高祖一之谷より移りて化導愈々盛なる事
- 歳嶋辨財天示現して本尊を請給ふ事
- 高祖十界勸請の大曼陀羅を願して本地を示す事
- 執權時宗靈夢を感じて大士を救免の事
- 日朗救免状を持って佐渡へ渡海の事
- 大士佐渡を發て鎌倉へ歸り給ふ事
- 鎌倉殿大士を館へ召て懇懇に應接の事
- 法華宗門弘通の免状を賜はる事
- 大士甲斐國波木井實長の方へ赴き給ふ事
- 八代山梨兩郡より信州葛木まで遊化の事
- 石和川より鶴岡の幽靈濟度の事
- 身延山より關西開府の事

- 日朗平賀忠晴の一子を將て登山り大士名を經一と賜ふ事
- 小室の善智大士を毒殺せんと謀る事
- 大士上野殿より大橋太郎の因縁を語り給ふ事
- 日進鎌倉桑が谷に龍象坊と問答の事
- 四條賴基主家の勸氣を蒙る事
- 七面大明神示現影向の事
- 蒙古退治旅發茶羅現證利驗の事
- 大士發病預じめ死期を知召て池上へ赴き給ふ事
- 經一磨より京都弘通を御遺言の事
- 高祖大士池上よりおいて御入滅の事
- 御遺状より任て御廟を身延山へ築く事
- 御願満足妙法一天より光輝の事

日蓮大士眞實傳目錄

4510
856

日蓮大士眞實傳

東海相模州 小川泰堂編述

(傳實眞士大蓮日)

一天雲盡て日月淨く、四海風収つて萬邦寧からぬ例はあらじ、こゝまかしくも、本地四八の妙相を續し、日本國東海に應生し、末法萬年の闇を照し給ふ、日蓮大士、俗姓の先蹟を遠く考がふれば、天津兒屋根の神裔より、皇極帝の御時、入鹿父子の惡逆を伐て、天下の靜謐を奏したる、正二位内大臣鎌足より十二代の正嫡、備中守共資、正暦の元年夏の頃京都を去て遠江國村楠といへる里に住居せしよ其郷男子なき事を歎き神よその傳統の冥助を祈ること久し、寛弘七年庚戌の正月九日、同國引佐郡井谷明神に參詣し神前より祈禱を疑ける時、祠の前瑞垣のほとりより稚兒の啼聲す共資あやみみて立出見るよ庭橘の樹のもと、筒井ほとりよ綾の衣につゝみたる、いと美しき嬰兒あり抱き揚てこれを観るよ氣高き男子よて、眼の光初空の旭日にかゝやき、尋常ならぬ稚兒ありければ共資はこれぞ神の賜あらんと、懐き歸て我が子とて、此をいつくしみ養はるが生長よしたがひ、雄力猛く智慧亦萬人よ優れたり共資我が女を配合て簡中大夫共保と喚、初て姓を井伊と名乗、彼神前の奇瑞を以て井桁より照橋を家の紋所と定めけり、かくて共保の子備中次郎共家其子九郎共直、その子新大夫惟直、惟直の子を赤佐太郎盛直といふ、盛直よ三人の子あり、嫡子は次郎良直次は三

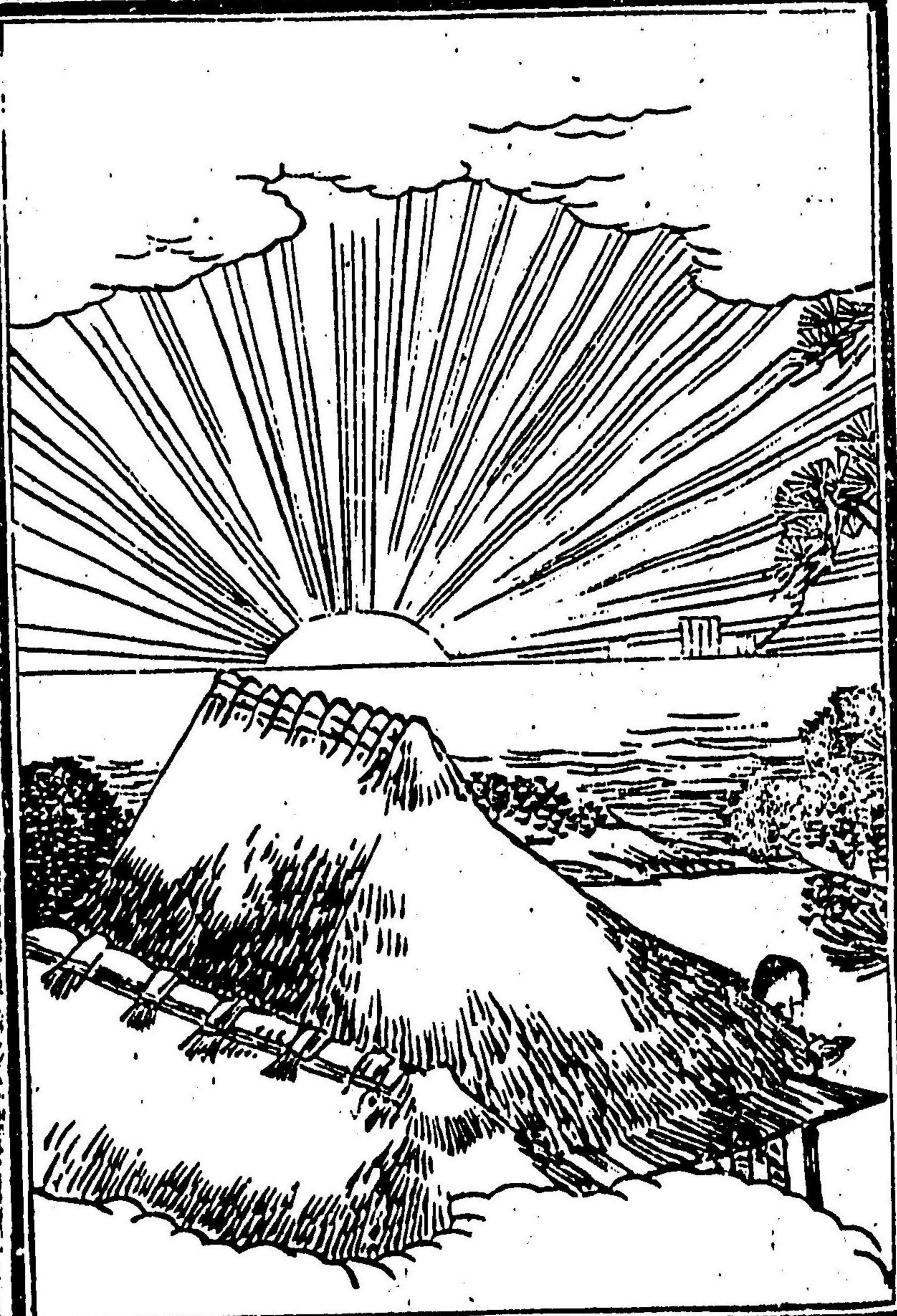
郎俊直、次は貫名四郎政直同國山名郡貫名に領居するゆえ、貫名ともつて知とす、これ日進大士の祖先なりこの四郎政直は二人の子あり、長男は四郎行直、次は六郎直友あり、行直の子重實、重實の子又二人ありて、一男は早世し、次男は次郎重忠といふ重忠に五人の子あり、嫡子は藤太重政次は早世す、次は仲三重仲、次は日進大士、末子を藤平重友と號し、此子孫藤平を姓として、今猶上總國大野の郷に存在せり、一切の江河海に入て、皆一味の敵とあるが如く、在家の四姓沙門と成て後、姓なしこゝをもつて其委悉をつくさず但るの來歴をしるすになんありける、此時に當て、右兵衛佐源頼朝卿は平家を西海に追落し、相州鎌倉入都を立、四夷八蠻を伐鎮め、武威を天下にかゝり、かす折から貫名次郎重忠も、政直以來、遠州山名郡に在て、鎌倉に參勤し我が領地の民を憐み、文を講じ武を磨き、舊き家名を落さじと切替勵む時しもあれ、當時源家の執權職、北條四郎時政、ひそかに諸國へ人を馳、二心ある武家を探りこれを誅して天下の愁ひを除くこと、恰も勢を扱て五穀を養ふが如し、貫名重忠は性實忠直にして、諂ふ色なく、武備を逞しうして其職を勤む大孝は孝に似ず、大忠は不忠に混じ、平家の殘黨志を伸するやのよしあやしき預り、鎌倉に召寄、礼明をも遠く罪なくして所領を沒收し安房國長狹郡に流罪となりしは、建仁三年五月七日の事ありき、其柄べき方どては、東條市河の郷小湊といへる海濱にて、浦山近く、松の嵐の吹あれて、寐覺の床は夢も結はず、昨日まで眠ひ暮したる、男女の形もとゞめず所領なければ粟飯だも炊ぐべきたつきもあらず、斯て果べき世の住家ならぬば、舊きゆかりを求め、下總國路野邊なる大野吉清が女梅菊女を迎へ

て妻とあしぬ、此は清原氏として、舍人親王十世の孫實世に腹しからぬ身もあれき、夫婿の罪なくして、配所の月も憔悴たまひし面影をいたはり、磯が根は甘海苔を搦て日の暮るをいとはず、夜は麻を績、綱をつりて、宵の更るを知らず、夫婿の次郎も沖の小舟も命をまかせ、釣する海士の將に入りて漁獵を事とし、妻も夫も細く馴ぬ、腹が仕業も恒とあり其いとまには郷の衆等に筆搦術など教ふるよ、在しむかゝの思はれて、物辨へぬ磯村の伏屋のうちよも敬れ、富としもなけれども、物不足なく暮しける、梅菊女はいとけなきより、神も佛も能念じ事へけるが、此小湊の浦は日本の東海よして、朝敵に遮る嶋山もなし、梅菊女は朝な夕な、窓の戸しらむ曉天よは明る間道と起出つ、身を淨かにし香を焚、夫の行末兩親の延壽、いのちらぬ日とてはなかりける斯て承久三年夏の初梅菊女は夫婿の次郎に語るやう、今宵不測の夢こそ見つれ、常にかはらず、日天子を拜みつ、見れば、日輪の光明いやまさり、八葉の金蓮華も乗給ひ海上はるかよ飛來、妻が懐に入を見て驚きさめてはべるかし、婦女の恐る心より、正なき夢をみつるよと、叱りたまふなとありければ、次郎重忠も愕然としておきろき、我も日永の疲にて、まごろむ中に、いとも尊き白髮の老翁が玉の如き稚兒を掌の上よ居これは汝に授るぞ能養て出家よせよと、再應再三ねんころよ、さし示し給ひぬ此の不測ある夢想かなと、互ひ語り合給ひける、夫より梅菊女は懷妊身となり給ひ、標の柏は秋告て、海原くらし時雨雲夜半の霰も鐘とて、いつしか氷る寛水の音もまたへし冬の空、今年も夢と暮にけり明れば貞應元年壬午の春、時よ八皇八十五代後堀河帝萬機の政事を揃て、四海を撫育成給ふ、又録

倉よは四代の將軍藤原賴經公あり、此は右大將賴朝卿の血縁なるをもつて、後室二位尼政子の方
 のはからひよよりて、二歳の時鎌倉に請迎へ、當年五歳に渡らせ給ふを、將軍と仰奉り二位政子
 の方は、玉璽の中よ、將軍を護り、武門の仕置、天下の成敗、公家の進退まで、皆これ政子の方す
 殊に舎弟北條義時へ當時の執權たり、保元平治の國亂も、きのふの附と消はて、今へ首の葉よか
 けて、いひ出る人もなく鎌倉山の星月夜日本の大小名、弓箭をる身も取ぬ身も、心を鎌倉よ寄ざる
 はなく、諸侯の邸宅雲をさへ、神社佛閣、霞と棚曳、街をひらき橋を分け、朝市夕店の繁昌は、谷七
 郷に賑ひて、新玉の春いく萬代か立かへり、盡せぬ聖代の、意きは其頃中納言基綱卿の歌よ
 吾妻路のあまた郡のうの中よいかで鎌倉さかへ初けん、と縁給ひしよも、
 其繁昌は知られけり、かくて房州小湊の浦に、奇異の事こそあれ、此里近き磯利よ、誰か抽おきし種
 もあき、蓮の若葉の牛出て、立葉卷葉の茂り合ひやがて白蓮華の咲出たるよ華池大いよしてその色
 白銀の如く、旭日は輝き、いと美麗く見えければ、此遠近の心なき浦人も、あな不審、夏あらでは咲
 ぬとき、し此華の、未風さゆる雪霜よ、かく珍らしく咲たるは、此浦よめでたき事のありもやする
 と、いと驚く見物す、この祥瑞のあと、めて蓮華淵とて今も猶北名所の残りけり、さても去つと一、
 こ、に配流たる貫名次郎重忠その妻梅菊は、この二月の十六日、曉天より、産の氣つき給ひ、此日き
 さらざの空いと長閑風も風、紅旭潮よきらめきわたるさしいる庭の柴垣よ、今を盛の梅の宿けふ
 も來馴し賀島の、法々華經のこまいささよく、次郎重忠は身を清め日天子を拜し、妻の安産を願り

ける産舎の内よは、得あらぬ妙香のかをり高く、午の刻ばかりよ、玉の如き男子出生なりたまひけ
 り、此浦人の我もくと昔信て、悦いふ者ひきもきらず、中にも船高おとなびて、陀木綿の布子さ
 へ、折目の見ゆる村長が、門口より次郎のまよこれ見たまへ、かゝる不測の事ありと、呼立られ、次
 郎立いで見てあれ、花さく前裁に、忽ち泉の涌出て、高く浮満滔々と珠を飛して濤よく流るよ
 不伴ひ、この清泉を汲で産湯となせり、彼といひ此と言夢の奇瑞も夢ならず此兒の生前いかあらん
 と、人よは言ね二親の心のうち予願もしき梅菊もやすらよ肥立この稚兒の面貌を見るよ顔額く
 眉高く鼻正しくして色いと白かり口の氣息香はしく其容儀凡ならねば日天子の祥瑞も因て昨日
 とこれの名付日にそひ月と重つ、蝶と追花を摘でいと壯健よ生立給ひける實よ末法五濁の塵根を
 しのぎ經王法華の利益を三千界よ被らしめ給ひし日蓮大士は此稚兒よ在しけりされば此年をもて
 ひかして逆算れば大聖釋迦牟尼世尊月氏國雙林において入滅まゝける其年より正法千年像法
 千年すき終て末法に入て百七十一年如來の滅後すてよ二千百七十一年よ相當る彼の月氏の釋迦如
 來は西天の國王と生れて本果妙の功德を三界よ施し今この日本の日蓮は東洲の下賤よ生れて本因
 妙の利益と閻浮提よかやか一給ふ彼は西天の月氏此は東海の日本あり彼の入滅は二月十五日此
 誕生は二月十六日天竺の法華經は西より東よ傳へ弘まりて正像二千の雲を拂ひ今日本の題目は東
 よ發り反て西よ進み弘つて末法萬年の冥を照す先聖後聖誠よ符節を合たるが如し佛法傳行せん眾
 はかゝる大因縁を辨へ知て茲よ悟入せずば無量億劫よも得脱の道あるべからずとぞ思はれける實

真應元年
 壬子二月
 十六日高
 祖大士御
 談生善日
 磨と名
 つけ
 奉る



まや梅檀の二葉頻伽の卵殺善日磨は日よまし智慧づきて父を慕ひ母を遺棄る頃より人々愛憐ふか
 く唯假初又懐抱まわらせし人も長くこれをいとおしみ磨も亦ひとたび掌打愛したるをば日を厭て
 よく還れたまはず慈母の懷を汚さず乳を不吐三四歳の頃より世の七八歳の小兒の動靜ありていと
 むとなく常々家ま在て母のためは塵を拂ひ席を淨むるの手を扶け父の側に事へては振を搦成ひ
 は茶をまめらせ萬態も心を配ることいとも不測に思はれけり今宵も浦の夕月又坐の頑童の三四人
 友達がほに音信て燈火の影も居倚きのふは彼所の磯に榮蝶拾ひぬ今朝も背戸の楊も納さして雀
 をあまた捕たるへと鄙風たる片育もて己が襟々語るをきく善日磨は頭掉していやとよ磨はさいつ
 頃慈父の寝物語にきくはべりぬ程近き事なるが京都も山陰中納言さかいへる人ありて或日桂川と
 いふ河原も往かへり給ひ一燈も鶴飼を葉とするいやの老翁ありて大きな泥鰌をとらへて殺さ
 んとせしを山陰の卿いと憐み身も添給し衣服もつを其料も取らせ龜を放ちて遺たまひぬ其後山
 陰殿は太宰の少貳といへる官も成て家の男女を引具して船より舟紫をさして下給ふ此卿に
 若君ありき母は繼親にて有ければ深く心も懸み居て折こそよけれと過ちのやうも此兒を船より投
 落したりしが不思議や此兒波の上にありて沈給はず能々見ありければ數百の龜の甲海ようかび此
 兒を捧載て衣服さへ濡ざりしを其儘取揚妻をば路より京都も道途給ひ一その若君後も出家して如
 無僧都とて道德たかき聖僧となり給ひぬ此事内裏へきこえければ後白河の帝より三年の間諸國に
 殺生を禁たまひしときく生あるもの、誰か命の悲しからざるべき其身尊も今も人とし生立は浦の

朝網夕網も數限りなき命を取世の稼業のあさましく取る、命も取人も俱も逃れぬ恐業なればせめ
 て幼き其うちも無益の遊びに殺生せずば同じ報ひも薄かるべしとまはらぬ舌よかたりたまへば
 理も非も諱ぬ賤の兒があくび仰して眼を擦り板金剛に誠願もかい探しつゝ、歸りけりかくて次郎火
 婦も善日磨が心づくしの孝行も年月の愛と忘れてくらしけるが嘉祿二年戊の秋鎌倉までは二位の
 尼政子の方世を去給ひ將軍御給わづか九歳もあはし一して世の人浮雲の思ひとあす折柄六月九
 日辰の刻美濃國靜田の莊には大蛇降りてつめること一尺餘夏の日影も窓を開き酒を飲つて潮
 く寒さを凌ぐよし同十六日鎌倉も註進す又武藏金子の郷には雪交の雨降出後には大蛇となり食
 獸を多く打殺したりとぞ其上鎌倉にも大蛇小路も霜のふること野の如く六月中雨のみ降つゞき
 晴る空も風いと寒くして手足も冷凍けり同く七月の初奥州も小礫を降すこと雨よりもしげく
 崩と碎き扉を破り人の傷つけるもいさど多かりとぞこれ又依て今年十二月十一日改元ありて明れば
 安貞二年舊日磨七歳この年京鎌倉洪水として人馬の死滅大かたならず此よりうちつゞき五穀盡ら
 す諸國に疫癘多く又辛の卯四月廿八日鎌倉の御所も怪鳥數千飛群り其形鳩の如くよして色黒く
 啼て不吉の聲をつたへしはしめて何地共なく飛去けり鎌倉の俗俗その鳥を見知たるものたまあら
 ねば況て其名を識たる人もなし何なる凶變の惡瑞もやと思うち八月大風洪水田畑山林を荒し翌年
 にいたり天下大飢饉時の執權北條泰時五十條の憲法を立て國政を勵めども四海の困窮も、又充り
 衣食なき民も仁義は教へがたしか、る京鎌倉のありさまを風の便よきにつけ次郎重忠は妻の梅

菊も物語やう善日磨もはや十歳を越ぬれど里の友達と物言ひせしこともなく走狂はず利生せず魚
 鳥の肉を喰ことを好まず誰をしへぬと神に誦み佛を敬ひ親の機嫌を伺ひつ山に登せ學問さして給
 はれや出家さして給ひぬと聞事とて胸潰れ彼といひ此といひ思ひ合すは十世のむかし御身磨を
 懐妊せし折出家よせよと靈夢の告我も五十路を越ながら頼む方なき片海の此小湊の浦遠く罪なき
 罪よ身を沈め浮ぶ時なき宿世の因縁せめて磨を出家とせば先祖の追福身の得脱御身も我も後の世
 の深き功德のあからずやと大層が語れば妻も悦び善日磨よしかゝの緒いひ諭し善師もがなと思
 うち其年も暮天福元年癸巳四條天皇御諱は秀仁後堀河帝の皇子にして去年の冬八十六代の玉位
 を踐給ひ今歳しづけき四方の春人の心も世の沙汰もや、憐れ成りにけりこゝに小湊より北に當り
 程遠からず清澄といふ山寺あり真言密宗の靈山として寶龜二年の開基なり此頃の住持道善密師と
 いへるは道徳も高きよし聞傳へ次郎重忠は磨をひらき吉日を撰び善日磨を携て清澄に登り諸佛坊
 よ在りまず道善師よまみえあげ此磨を徒弟よなして給はれと懇懇に頼みけるよ道善師もいと快よ
 く受肯つ善日磨が容貌の優美よして遠しきを見て且感じ且歡び頂髪をかい撫つ賢き兒ぞけうより
 は藥王磨と改名せよとて其儘此山よとめたるは天福元年五月十二日磨が齡十二歳の時ありけり
 此より道善の御坊ふかくいたはり手習ふ事を教給ふよ二字三字ならずして筆法書林を書あすこと
 年來修練の人の如し常山より南一里餘よ二間寺といふあり此坊の道善とて道善の俗縁の兄なりけ
 るがけふ茲よ在して聖王磨が凡人ならぬを見て斯兒の往々我が宗風をも輝やかすべき能いつく

一みて教たまへと舌を巻いて語りけるそれより小學を始め論語なごいふ書よりすべて忠孝仁義を喻
 したる儒道の書類を教へ讀しむるよ一を聞て萬を知り二遍三遍を満すして暗誦するをきくよ鼓篋
 の水の逆飛が如し昔漢土の天台大師をさなかりし時父に伴れて山寺よ遊ぶその寺の住僧さし招ぎ
 兒に珍き御經を教て取せんよと普門品三行ばかり口づから教たるよ若もなく誦給ふゆゑ和尙も不
 測よ思ひ一品を殘らず教へたるに唯一度にしてこれを誦じ覺えたるは天台御年七歳の時なりしと
 きく今藥王が手習ふ事といひ物詣振の川あらず東夷東條かたうみの藻を對海士の眼が家よかゝる
 愛度兒の出生したるはいかなる事と道善も心のうちに驚きつ又此山に修學する所化兒達も非あら
 ぬ立振舞の藥王やといはぬ者こそなかりけれ茲よ母梅菊は去つ頃そのいと兒と山よ登せ其後た
 えて信もせず道法ちかき清澄も海山隔つ心地して彼方の天をうち眺め人里離し山寺に手習ふ業と
 讀書の數々多き僧達にあらけなくもてあされ我父戀し母床しと泣もやすると思わび彼山深く尋ん
 と幾度も胸よあまりて言出ると夫次郎よ寤められ訪ことかたき清澄の山のはたてを我が子と認
 ん霞にかこちつ、愛年月を送られけるが空き婦女の心には思立矢もとゞめ兼大層よ言てけふの
 日を優曇華のさく心地して磨が好る岩梨又種々の物取そへつ師摩の羽の袷衣赤染の肌衣まで僕
 の男よ持つ、清澄よおもむきて山よ登れどいかにせん女人禁制の寺なれば五障の雲よ遮られて入
 事かたき密嚴淨土心の月もいや尋り側の石に腰うち掛しばと憶ひに伏沈たまひよ枯木を高く背
 負たる寺の奴僕の山路より歸ると見かけ啼々と呼とゞめ此山の諸佛坊よ學問せる藥王に母が参り

ぬ疾出て無事なる顔と見させよと坊の血裏まで言傳て給ひねと詞せはしく頼みたまへば寺の男はうなづきて杉の木間森の下芽もて葺るは裏門もや彼方をさして喘ぎつゝ、いとも重鉢に入よける藥王はかくとき、賢母は似氣もなし出家をさしにおこしたる齋が安否と訪給ふは投し藥を尋る迷ひ値まじものと幾度か思ひかへせよしかすかと思愛ふかき慈母を逢て此ま、歸しなば不孝の罪の深かるべし昔唐土に曾參といふ孝子あり他にありける日其母曾參が歸りの遅きを待わびて指を噛給ひければ其心胸は應へいそぎて家も歸りしとぞ曾子が母の喘指の其子の胸も通じたるは親子はひとつ血肉もて冥合所感の不測なりと思ひかへして師の坊よかくと告寺門を出て慈母に信給ひしに梅菊はそれを見より走倚藥王が手を取て此年月戀し煩ひはべるはと涙の涙せきあへず道理よこそ思はれける藥王感は禮を正し摩もさいつ年慈父も伴はれまいらして此山よ入心煩はさすかよ里の戀しくて時鳥なく梅雨月心の雲も晴やらす潮ぬ舟端に袖のみぬれていとゞ悲しくありければ師の御坊の情深く年月ながき教の窓も雨を踏唐土の日本の古事をさへ此彼と思合て此程は心長閑き彌生空撒いと高き松杉の黒きよ交る山隈さくかと思れば入相の鐘の音も散花ふよき花より脆き渺の世よゆめを重て猶さめぬ惡業の因縁も繁れて或時は地獄も泣くある時は天界も樂み又畜生も身と苦しめ偶々人間も生れては生老病死の四苦八苦百年久しき胡蝶の夢さめずばかゝる凡身のいつか出離の期あらん誠も百年の榮耀は風前の灯火一念の敬心は命後の礎とかきくはへる磨も即て出家してかゝれとてしも垂乳根の熱給けん斯黒髪を剃落し佛の法弟の數に入三寶國土の恩を報ひ

一切衆生を助る身とも成はべらば先父母を救まいらせん御經も四恩のうち父母の恩第一とこそ佛も定させ給ふあれ今生一世の恩愛は水のあわれの跡もなし未來永み父母の御訓さらぬ大縁を結ぶ誓ひの剃髮染衣それをも思し釋られず慈母の御慈き猶ふかくば誓が菩提の障りすかし此上は安否を問せ給はぬを慈母の厚情と喜ぶべしとすがよ長き春の日も稍傾たり木立の茂る洞陰は里よりはやく暮るよなん山路の程も心もとまはるはといと悲し急がせば慈母も頻りて歎息ししバし見ぬ間に藥王が長者たる菩提の月に心の闇も明けく陰すへき子も陰されて嬉涙も胸ふさがり誰呼子鳥路わけて泣々家路に歸り給ふ此梅菊が涙を漉たまひたるを涕涙石とて今も猶清澄の山路に残りて、又誦する人々の其むかしを思ひ出てもに涙をうぐよなん有ける光陰は並を離る、箭よりもはやく春と明秋と暮て今年嘉祿三年丁酉の冬藥王磨り十六歳もありければ道善密師道場を淨め一山の大家を集め十月八日剃髮の規式嚴重に師經梵唄みづから導師となり藥王磨は御懸いさきよく梁恩入無爲眞實報恩者の文を三遍まで唱揚祭の黒髪を剃落し紅白の袂も墨染の袖とあらためたまひたる此ぞむかし天竺國淨飯大王の御子悉達太子御齡十九歳よして王宮を忍び出玉の冠錦の御衣を御記念よとゞめ麻の衣を玉鉢も纏ひ檀特山よ分給給ひけん昔の則の忍ばれて哀も尋くす思はれける此より御名を足生坊遊長と呼改め諸事を擲棄事一佛理に心をゆたね眞實瑜伽の奥藏を學ひ給ひ教相よは眞言三部及び諸論等事相には求聞持等の印契を相承し法兄淨願義淨の二人は所化僧多きその中よも遊長師をふかく憐み學問の志ざしをたすくるゆゑをこれと力を得て此

程は一代藏經よりかゝり晝夜肺肝を碎き関給ひ一が一口心と思すやう佛法といへば釋迦一代の法あるを令八宗十宗より立別れ己が隨意弘る法を我こそ佛の本意を得たれとおもひ彼をそしりこれを跋さらしに一軸なきも似たり抑我が本師釋尊はいづれの宗旨を真宗か華嚴宗かまた教外別傳の禪宗なるか今御經を案するに決して諸宗兼學にあらず大海の潮に二の味なく如來の教法さだめて二の道はあらじ其會釋を知らんよは智者とあらでは協ふべからず伴ひ當山の木尊虚空藏菩薩は東方莊嚴世界の菩薩として一切衆生に智慧を授けんとすの誓ひありしこと大集經に見えたり其上法堂に安置の尊像は寶龜の開闢以來稍五百有餘年利益多かる靈像ときけば茲に祈願を籠げやと湯水を絶食を断じ御堂に籠て持念する事三七日願くは佛智を得て如來の本懷をさとるまねく諸宗の是非を明め佛燈と一時に掲て末世五濁の闇を照べし願くは衆生利益の大願をあらはれみ日本第一の智者と成て給はれと丹心骨を削りて祈ける此御堂の側は清水を堪へし池あり此池水に蓋も積明星の星影赫々として浮びたるはいと嬉しき奇瑞かなといよ丹誠祈念ありしよその願滿する曉天に夢現の境もあはえず朦朧たる其中は白髮の如くにて御眼の光冷凄き異人影向ありて右の御手は光明まばゆき大寶珠ともいひつべき玉を持汝が祈る智慧を興んすとて斯と渡し給ふ蓮長師右の手よこれを受けて左りの袂に入収給ふ嶺の嵐の音そひて身は降かゝる路にぐれ佛前高く見仰れば本尊の寶龜よかけし關鎖のふれを脱て金扉は八字に開けてありければ大願すてに満足しぬと心中の喜悅たとへを取ら物なく此曉來の神蹟よふかく佛恩を報じ本坊へかへらんと御堂の階砌三

四級下立給ふ其折柄俄に胎胎氣運り影しき血を吐てその儘氣絶一倒れ臥給ひけり同寮の所化これを見出し坊は驚ひ歸り介保せしに忽悲の醒たる如く聊御身は勞を覺えず利へこれより境智格外にひらけ雲霧と拂て火の三光を見るが如く萬法方寸に浮ばすといふ事なく辯舌また明了にして電光の如く一言のもとに衆理を決すこれ全く凡牒不潔の血を吐つくと暗に六根淨を證得あし給ひたる利驗の程こそ尊とけれ

清澄寺は千光山と號す寶龜二年不思議律師の開基として慈覺大師これが中興たりいま寺祿八十石東寺流の真言に属す本尊虚空藏菩薩は開山律師の靈作ありとぞ此山は宗祖大士初發心の靈地よして此寺に修學ありし事七年よ及ぶ慈母梅菊が愛別の涙をぞとぎし涕淚石普光天子の影を宿したる明星が池あり凡牒の血を灑たる處よはその地に生ずる蓮の葉に血の染たる斑あり今よ凡血の能といひ傳ふまことよ當山は大法基元の靈地を思はれける

かくて曆仁三年戊戌の春にいたり蓮長師はいよ一勸學いとまなく木を建の如く丸く削あして枕と一御身つかれを覺ゆる時は此枕に肘を倚てしばし氣を休給ふもし眠氣付ぬれば轉傾くゆゑ快く睡よつきがたしこれに居士よて圓枕とて學問に心寄なる人の造り初めたる物とぞきく願ふ繩をかけ股に籠を刺て睡を防ぎしも同じ心の學びの隔それは經學一世の教これは内典八萬四千釋迦如來の説給ひし一切經とぞえしは七千三百九十九卷也されば大聖釋迦如來十九歳にして出家まじし御齡三十成道あつて檀特の峯を出寂滅道場において十玄六相の理を説給ふこと三七日

これを華嚴經といふこれ釋尊說法の最初ありこれより阿含十二年方等十六年般若十四年以上四十二年佛壽七十二歳の御時釋尊の靈山の窟に法座を移させ給ひ法華本迹二門を説て如來出世の本懷を述べ給ふ事こゝも八年これを法華經といふ華嚴阿含方等般若法華この五時を説了らせ給ひ御と一滿八十にして跋提河純陀が家に入て一晝夜涅槃經これを遺誡と歿して二月十五日涅槃の雲にかくれ給ひし此一代の訛相を一切經とは名づけたり遊長師は此頃漸く一切經を閲つくと今宵更闍かたはれ月さし人窓に涅槃經を讀給ひし此御經の中に依法不依人といふ金言あり文の意は世の季にいたれば我が道を學ぶ者詞を巧み我意をのべ種々の宗旨出來すべしこれに依て我が入滅の後はいかん智慧かこく其位賢くとも人師の詞は用ふべからず我が説置經文に依て佛法は判すべしと未代の規を定め給ひし最期の御遺言なり遊長師は此御經を拜し夜學の燈臺も濕ばかりも御涙も咽び給ひ自餘の宗旨は未だこれを知ず我因縁ありて真言密宗の山に出家を遂當宗の流義を學ぶよ大日如來より密法結々として今も傳へたれども金剛智不空等の説を本とし日本にては弘法慈覺阿大師の了簡を加へたる事のみ多く真言一宗既も佛の法にあらざして凡夫の法あり亦同じ御經も釋尊ひとつの譬喩を揚給ふこゝも正なる象一頭を繋ぐ盲人多く聚りて探り見る後に一處も會合一一人の盲目がいふ様象は漆も塗たる桶の如し一人はいやとよ我が見たる象は掃帚の如しと又一人は太鼓の胴の如しと又一人は箕の如しと衆の盲人謂て止すされば其耳を扱へ一者は箕の如くおもひ形を撫し者は太鼓の如くといひ尾を撫りし者は掃帚のごとしといひ脚を抱へしものは桶に似たりといはん皆これおのれが探り見たる處を知のみよて全き象の形を辨へざるなりと説たまへり我身不肖なれども八宗十宗の人師塗桶よ掃帚よと己が得意立たる諸宗門を十方無礙の眸子をひらき彼の全き大象を一睨み見定べし父母養育の恩を棄此無為の教も身を任するもの何ぞ凡僧傳來の教を守て如來の金言を慕はざらんや今は此山の書箱もよみつく一ぬ問へき師なく語るべき友な一い

かんして我志願をはたさん此磯村山の片邊土よむなしく心と焦すこといかにも惜き月日なりいでや鎌倉に趣て其宗々の明師も問ひあらゆる和漢の書を讀ば智解をたすくる遍徑ならんと今年秋の初つた師の御坊にしばしの暇と乞清澄をうち立て上總より下總まかり武藏ある隅田河原より着給ひけりこれぞ名よみ武藏野や郡のひろく十郡もわたり西は雨降山秩父が嶽南は多摩川北は荒川この隅田川は東の境にして郊原四方何百里も人のゆく方々に踏分て脚手も迷ふ途多くむかし樂平の朝臣水禽を見て都こひしと詠れたる其名所もあはつるかきと渡守の男に問へば彼方の山は待乳山おもかけまたつ嬌の森鶴の群たる千代が岡春よあらねど霞が關かゝる果なき野原も名所は多くはべるかかしと穂末波よる枯蘆を分つ、片舟さしよする水棹の下に驚きて立鳥よりも旅人をおどろかしたる秋の風野寺の鐘と吹さそひ日はくるれども虫の音も心なくさむ花野路入山の端の遠くして月さへ影を宿したる千草の露に濡うち濡り夜も初更も垂々たるころ海近けれども船よする浦なきゆゑも名づけたる帷子の里またどりつき宿りを求めばやと思せども賤が棲居の舎のみなれば人宿すべき方もなく困じ果給ひたる折しげる木樨の生垣を一圍る門口より旅の御僧よやぞ一

まぬらせんとありければ遊長師はいと喜び茲は一夜のめぐみを受け給ひ圓燧の端にさしよりて折
 焚柴よ袖と乾かしおはせしに家の主は持佛に向ひ念佛してありけるが稱名はて、茲に居倚種々の
 物語よりち滯て遊長師の尋給ふやう今宵こ、よ止宿をめぐまれてやどりて見ればいかんぞや幼稚
 者の弄器獅子の頭は狗張紙土もて造る偶人の數の雜器よりち交て佛像こそあれやしみて手を取
 見ばこはいかよ本師釋尊の可憐よて押たる金も村割て御手よよよ調指じいと勿味なくおぞまし
 くと思ふよも似ぬ念佛三昧我さへて、に宿したる佛法歸依の此家よ似氣なき事と意も解すはべる
 はと難じ給へば主はうち笑竹の火筋は灰播なでつ扱とよ不審は道理至極我も初は佛と云は同じ佛
 經と云は同じ經神も佛も別あしと思て有しよ近頃所用の事有て久しく鎌倉に在しよ當時念佛の生
 如來大阿彌陀佛とて尊き聖者のおはすとき、て其處よ受戒しまぬらせて念佛安心の要路をきくよ
 一代聖經八萬四千其數多くはべれきも末代の我等が修行よは念佛三昧に如はなし統て釋迦よも藥
 師にも心うつして拜をば禮拜雜行とてその修行の穢ゆえたとへ念佛稱名するとも千中無一とて千
 よひとつも往生は遠がたし唯諸佛諸神を振擲て一向に念佛せばよしや五逆のあればとて弘き廻に
 漏やはする斯は彌陀尊の本願よてその御經よ明白なりと法然上人の選擇集とかいふ書を簡釋して
 いとありがたく説たまふかゝる事の實あればよも當時鎌倉はいふもさらなり上船も下船も物職
 たるも知らざるも念佛する人は波の砂の數多し天竺真言諸宗の名僧智識さへ今はとまへぬ人もあ
 しかゝる尊き教をきゝ家にかへりてこれまでの持佛の釋迦と捨るも情と雜具の中にうち入て納戸
 の取にさし置たるといつづ程よか小童等が持出て笛に太鼓ようち交て獅子と釋迦とを躍らせて遊
 ぶものから打割て風爐を焚よは増らぬと其儘よさしおきつと語るをきゝて遊長師は且あされ且悲
 み法衣の袖よ涙をおさへ代は房州小湊とて浦崎ちかき山寺の僧なるが齡今二十に越ぬきもつら
 く佛經を見るよ今此三界は釋迦一佛の有難なり彌陀稱名をすゝむるとて本佛釋迦を禮拜するを
 雜行とて誠めたるはいかよぞや臂の黄色き我口よ言はいはぬよ川れども一夜の宿よ路一のく恵み
 よ報ひはべるよ昔天竺伽毘羅南城よ五百の猿猴ありけしも秋の月中ころ月いと涙る涙河にうつ
 りし影と臨見てわれこそ採らぬと争ともさすかに深き洞河に猿の智慧の殘ましくひとつ猿が松
 の下枝に取つければ又ひとつ猿の下の手よ釣さかりかくしつゝ、五百の猿は五百種の綱をさげた
 る如くして漸く水に手をさし人鏡と光る月影と馬と膝よと壁もて懸ひからげて採ともはてず斯夜
 ももがらなすうちよ松の木垂の枝折て五百の猿は残りなく水よ溺れて死けるとぞ本佛釋迦の月を
 觀ず迹佛彌陀の月影と一向專修の葛藤よつなぎ取らんと思ふうち命の松の枝折て奈落の底よ沈み
 やせんといと悲し説諭したまひけるよ若きには似ぬ發明の御僧かあ夜もいたく更たれば納戸よ入
 て寝まり給へ翌日またきかんと欠伸よ念佛囁ませて主も其處よ臥にけり遊長師は川の朝と、をう
 ち立先鎌倉よ入なば昨夜主の物語よきゝつる大阿かもとよ尋ゆき當時諸宗よ秀たる念佛よ心を寄
 淨土の安心を開ばやと心いそげと道はかゆかず漸く其日の未の牌その地にたどりつき車小路とい
 ふ所にいさゝか緣故を尋ねてゝ、暫時と枕かる鎌倉の樂昌は聞しに増る眼ひと往來せはしき市人

まぬらせんとありければ遊長師はいと喜び茲は一夜のめぐみを受け給ひ圓燧の端にさしよりて折
 焚柴よ袖と乾かしおはせしに家の主は持佛に向ひ念佛してありけるが稱名はて、茲に居倚種々の
 物語よりち滯て遊長師の尋給ふやう今宵こ、よ止宿をめぐまれてやどりて見ればいかんぞや幼稚
 者の弄器獅子の頭は狗張紙土もて造る偶人の數の雜器よりち交て佛像こそあれやしみて手を取
 見ばこはいかよ本師釋尊の可憐よて押たる金も村割て御手よよよ調指じいと勿味なくおぞまし
 くと思ふよも似ぬ念佛三昧我さへて、に宿したる佛法歸依の此家よ似氣なき事と意も解すはべる
 はと難じ給へば主はうち笑竹の火筋は灰播なでつ扱とよ不審は道理至極我も初は佛と云は同じ佛
 經と云は同じ經神も佛も別あしと思て有しよ近頃所用の事有て久しく鎌倉に在しよ當時念佛の生
 如來大阿彌陀佛とて尊き聖者のおはすとき、て其處よ受戒しまぬらせて念佛安心の要路をきくよ
 一代聖經八萬四千其數多くはべれきも末代の我等が修行よは念佛三昧に如はなし統て釋迦よも藥
 師にも心うつして拜をば禮拜雜行とてその修行の穢ゆえたとへ念佛稱名するとも千中無一とて千
 よひとつも往生は遠がたし唯諸佛諸神を振擲て一向に念佛せばよしや五逆のあればとて弘き廻に
 漏やはする斯は彌陀尊の本願よてその御經よ明白なりと法然上人の選擇集とかいふ書を簡釋して
 いとありがたく説たまふかゝる事の實あればよも當時鎌倉はいふもさらなり上船も下船も物職
 たるも知らざるも念佛する人は波の砂の數多し天竺真言諸宗の名僧智識さへ今はとまへぬ人もあ
 しかゝる尊き教をきゝ家にかへりてこれまでの持佛の釋迦と捨るも情と雜具の中にうち入て納戸
 の取にさし置たるといつづ程よか小童等が持出て笛に太鼓ようち交て獅子と釋迦とを躍らせて遊
 ぶものから打割て風爐を焚よは増らぬと其儘よさしおきつと語るをきゝて遊長師は且あされ且悲
 み法衣の袖よ涙をおさへ代は房州小湊とて浦崎ちかき山寺の僧なるが齡今二十に越ぬきもつら
 く佛經を見るよ今此三界は釋迦一佛の有難なり彌陀稱名をすゝむるとて本佛釋迦を禮拜するを
 雜行とて誠めたるはいかよぞや臂の黄色き我口よ言はいはぬよ川れども一夜の宿よ路一のく恵み
 よ報ひはべるよ昔天竺伽毘羅南城よ五百の猿猴ありけしも秋の月中ころ月いと涙る涙河にうつ
 りし影と臨見てわれこそ採らぬと争ともさすかに深き洞河に猿の智慧の殘ましくひとつ猿が松
 の下枝に取つければ又ひとつ猿の下の手よ釣さかりかくしつゝ、五百の猿は五百種の綱をさげた
 る如くして漸く水に手をさし人鏡と光る月影と馬と膝よと壁もて懸ひからげて採ともはてず斯夜
 ももがらなすうちよ松の木垂の枝折て五百の猿は残りなく水よ溺れて死けるとぞ本佛釋迦の月を
 觀ず迹佛彌陀の月影と一向專修の葛藤よつなぎ取らんと思ふうち命の松の枝折て奈落の底よ沈み
 やせんといと悲し説諭したまひけるよ若きには似ぬ發明の御僧かあ夜もいたく更たれば納戸よ入
 て寝まり給へ翌日またきかんと欠伸よ念佛囁ませて主も其處よ臥にけり遊長師は川の朝と、をう
 ち立先鎌倉よ入なば昨夜主の物語よきゝつる大阿かもとよ尋ゆき當時諸宗よ秀たる念佛よ心を寄
 淨土の安心を開ばやと心いそげと道はかゆかず漸く其日の未の牌その地にたどりつき車小路とい
 ぶ所にいさゝか緣故を尋ねてゝ、暫時と枕かる鎌倉の樂昌は聞しに増る眼ひと往來せはしき市人

に旅の心を慰めつーばらく勞れを休め給ひけり當時鎌倉の執權職北條武藏守平の泰時は去る元仁元年六月十四日父義時は逝去あり嫡子なれば其跡を繼て執政たり泰時は賢良温順にして仁君の舉たかく廉讓節義を心に存し専天下の政道は預り記録所の門は鐘を掛置不時の隙を聞給毎月十日廿日晦日を決断の日と定め頭人評定衆を聚め訟の理非を決す其政務最重にしてしかも慈愛ふかく常は側の人を教て宣やう人として足ことを知らざるは人間一生の禍あり足ことを知らずは百萬の財資を積でも安き心なく無理も非道もこれより起るなどいふよじを語りて人の爲世の爲直なる道を諭給ふ故君の御側は伺候する人々は麻も交る違の如く曲ころはあらざりけり時にも彌生十六日評定所より退出の處庭の一本の櫻花をよふく風よきのふけふ相淋しく散れば泰時しばしうち詠め天下の政務よいとまきく誠は花人を待す今年の春の色香も他で別る、かなしきよと筆を染て

事しげき世のあらひこそ物愛けれ花のちりふん春もしられずと和歌を詠じたまひきかゝる優美よして明察なる泰時夜心を政事と盡し給ふゆえ諸國穩よして鎌倉も年々賑ひ増り鶴が岡赤橋の前には常は駒馬の供待多く長谷觀音の大略には嬌艶代參の女刺興ひきもきらす大藏の藥師供養終れば窟小路の不動は開帳の標を建綴慈恵街の遊女佐々目が谷の歌舞妓放下物真似辻商人おのが様々の稼業も知らで被る聖代の恩その街衢の繁昌は今を盛りと見えよけるさても蓮長師は兼てきつる大阿が住所をたづね給ふ御所より東十八町ばかり霧が深好見といふところよ花を結び標樂

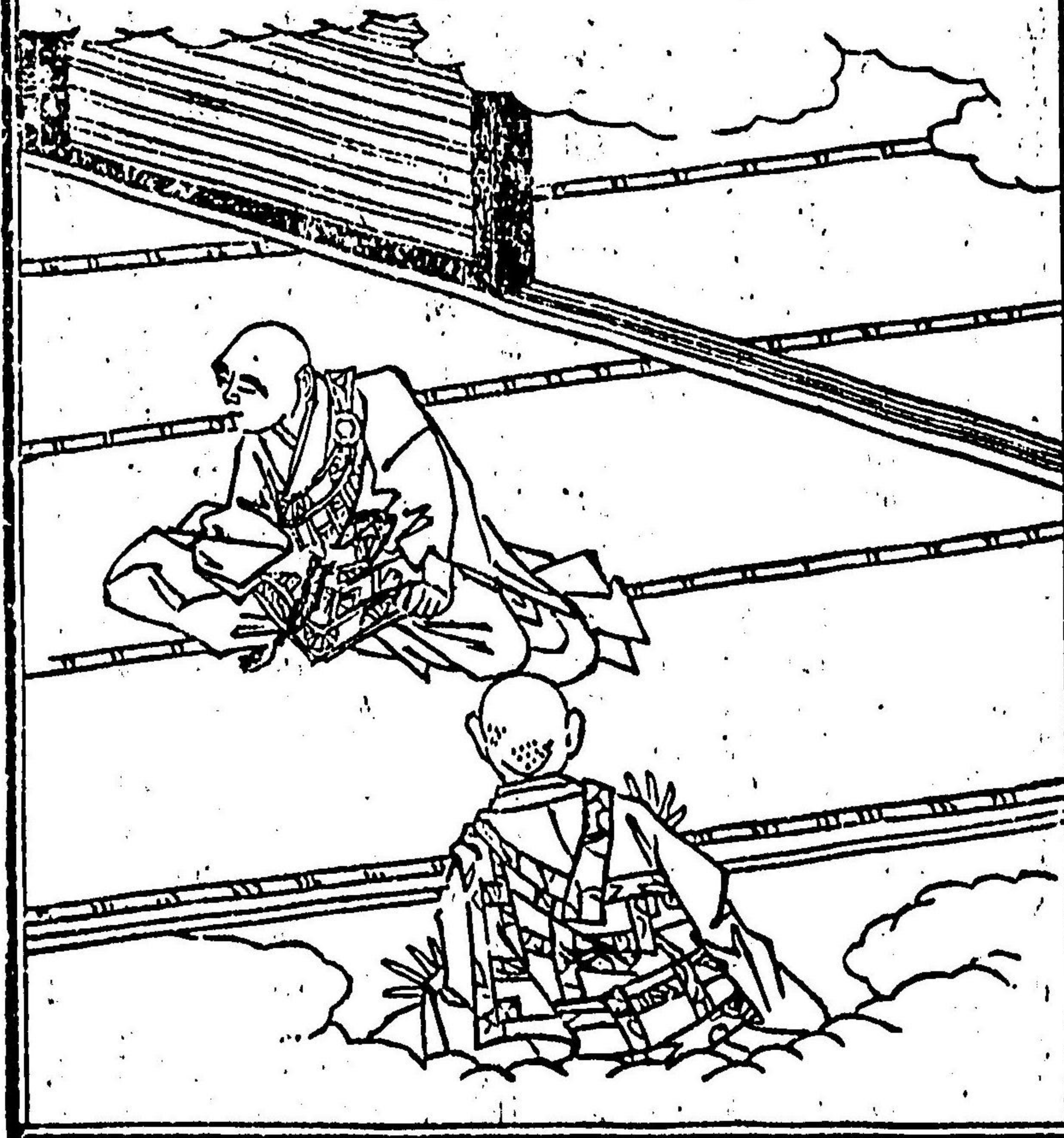
往生の二門をひらき鎌倉中の男女をあつめ法談す師も亦その席は交り浄土の宗旨を賜給ふ浄土宗といふ觀經變觀經阿彌陀經に天親菩薩の往生淨土論をそへてこれを三經一論と稱しめて宗旨を建我朝にて法然上人といふは美作國稻岡の人父は時國母は奈姓ある夜靈夢に剃刀を香と見て慍妊し長承二年四月七日誕生在まし生れながらよして教悟發明なりしが悪心僧都の往生要集を讀で初て一切の經論を捨て念佛一宗を建立し給ふさればいかかる五逆十惡の凡夫なりとも自力の根性を捨て無阿彌陀佛とさへ唱ふれば此惡世界の邊を離れ九品蓮華の彼岸へたやすく往生なすことばゆめく疑ひあらぬぞか一法華真言等の聖道門の難行難行をば擲捨て罪業のかゝる凡夫を救ひます大慈大悲をわすれざと建久五年甲寅選擇集をあらはして無常をさとし鉦撞木あはれ給ひ給ひ染の法衣の袖をかき合せ黒谷吉水のわたり遊場をひらき一向は專修念佛をす、め給ひける給ひ永元曆の合戦よりいまだ十年よさらざれば親を討れ子を殺され兄弟を失ひ妻子も別れ世の憂目を見たるもの幾千萬ぞや幾億萬ぞや血腥き風いまだ街頭を去す時箭射びの脩羅のこゑ猶耳に残りぬかゝる恐ろしき憂世も唯一睡の夢なりけり哀れはかき飛花落葉の夢の世は何を樂み何ぞか待んと恐るる身もかしてきも無常の風の心に染じ人の菩提の爲我が後の世の頼よと念佛の聲四海よかまびすく何なる無道心の者ありとも心弱くも皆法然上人の唱名念佛まなびかぬ草木はあかりけり今法然上人建曆二年の遷化より今年曆仁元年まで星霜わすか廿七年教達はぬ十即十生蓮長師も此念佛に心を委ね安心の法門よ心耳を澄し給ひける又この頃念佛者の語るを聞給ふ佐輔が谷も然

阿良忠上人とて法然上人の孫弟子よりて學解ひろく念佛の得悟たしかあるよしとき、蓮長師又こゝも往通ひ三心四修の宗脈を受給ひけるをれより延應の秋くれて仁治もはや二年を送り給ふうち彼の好見の大阿上人病の床より臥て古今の惡病を煩ひ苦痛にたへかねば夜花の中を轉び泣叫びつゝ虚空を擗て息絶たり遷化の後死骸を見るに身縮りて小兒の如く其色黒くして墨を塗たるが如しとぞ其隨身の弟子等の物語よき、さても淺間敷こさかな守護國界經又は死人の十五相を説て地獄は落ると明し天鼓摩訶止觀にも死人の形相を委しく教へ給ふ此經釋を鏡とするは、大阿上人の地獄は疑なき在俗の身あらば過去の宿業もこゝに現るともやあらん道德圓滿の上人數年の修行の詮なく臨終の正念を失ひ最後は地獄の相を顯したるはいかゞぞやこれ正しく佛意は協はぬ處ありて其現則はあらぬやと我と問我と答へて燃頭たまひけり又此鎌倉の終昌は禪宗の學者十宗の碩徳春の野に立芽花の如くいとさくらしくみゆるものゆゑかれに問これに釋學解を凝さんと思せどもいかにせん鎌倉も泰平久しき訓代の習ひ文道武道美榮多く成般すて花車風流もありもてゆき琵琶を彈じあるいは爪琴小鼓は難す調への糸竹も都下の白拍子袂かざして媚を唄ひまよめきわたる風俗のいつか出家に押移り錦の袈裟は七寶の珠をつらねし百八の煩惱つちごとく飽轉佛事供養も布施からと濁心の貪慾無懺まことしからぬ事のみ多く我も亦た、假初の草枕五年とよありければ一先安房に立かへり其上より兔も角にも思立ばやと歸國の要途彼ふれと明へ給ふうち二月四日夜より人成の刻頃西の天に赤白の氣三筋たちて二筋は程なく消て赤き一筋火の柱を建たるが如く中天に衝立たり町中の男女驚て見物す御所よりかいては院陽剛安貞を召て御前ありけるにこれは群形の氣と名づけ俗は火柱ととあへ昔村上天皇康保年中あらはれたるよし釋紀を引て百上せばいかある事の前表よやと上下安心もなかりける蓮長師は此取沙汰を後よき、あゝ房州さして歸りたまひける幾程なく同七日の朝一天曇て雨よやあらん風よやあらんと見内よ巳の刻頃大地震に震動し山鳴谷應鎌倉府内の大小名堂塔伽藍を揺撒し土煙天を覆ひて暗夜の如く其中より處々よ火然出男女の泣わめく聲いと哀れよ震動の間よきこへ物凄も懼へんとといふばかりなし此一朝の地震よ人畜牛馬等死滅相傷その邊際を知す御所よりは四日の火柱七日の地震あはせ罷して京都よ注進すかゝる鎌倉の騷動を旅よきつゝ、蓮長師は東條小淡よ歸り若兩親のかはらぬ面壁を拜し鎌倉の物語よ春の一夜も明やすく次の朝は清澄よ登師の御坊の恙なきを喜び此年月心をひそめ修行あしたる淨土の正宗その外諸宗の論義古今名僧の物がたり彼此同座の僧達へも談じ聞せ給へば師の道善をはじめ二問寺の道義もこの席よ在り淨顯義淨その餘清蓮明心等同寮の所化まで耳新じき物語に感入その遠縁といひ才學といひ一山の衆徒膝をうつて驚歎し師の御坊は喜びの涙席を沾し給ひける清澄よしはしに在りうち小乗權大乘法華真言の四門の形行の次第を詳らかよしるし戒鉢即身成佛義と名づけ山内の僧達よ示し給ふこれ法門筆作の初なりかくて、侍世の有様を思ふよ鎌倉は當時日本の大都會あれども法を弘むるにはよろしく道を學ぶよは益な一又かゝる山寺は閑寂をれども書籍よ乏しく其上道を談ずる友もなし干將莫耶の名劍も屢磨すはいかゞせん傳へきく比

るが如く中天に衝立たり町中の男女驚て見物す御所よりかいては院陽剛安貞を召て御前ありけるにこれは群形の氣と名づけ俗は火柱ととあへ昔村上天皇康保年中あらはれたるよし釋紀を引て百上せばいかある事の前表よやと上下安心もなかりける蓮長師は此取沙汰を後よき、あゝ房州さして歸りたまひける幾程なく同七日の朝一天曇て雨よやあらん風よやあらんと見内よ巳の刻頃大地震に震動し山鳴谷應鎌倉府内の大小名堂塔伽藍を揺撒し土煙天を覆ひて暗夜の如く其中より處々よ火然出男女の泣わめく聲いと哀れよ震動の間よきこへ物凄も懼へんとといふばかりなし此一朝の地震よ人畜牛馬等死滅相傷その邊際を知す御所よりは四日の火柱七日の地震あはせ罷して京都よ注進すかゝる鎌倉の騷動を旅よきつゝ、蓮長師は東條小淡よ歸り若兩親のかはらぬ面壁を拜し鎌倉の物語よ春の一夜も明やすく次の朝は清澄よ登師の御坊の恙なきを喜び此年月心をひそめ修行あしたる淨土の正宗その外諸宗の論義古今名僧の物がたり彼此同座の僧達へも談じ聞せ給へば師の道善をはじめ二問寺の道義もこの席よ在り淨顯義淨その餘清蓮明心等同寮の所化まで耳新じき物語に感入その遠縁といひ才學といひ一山の衆徒膝をうつて驚歎し師の御坊は喜びの涙席を沾し給ひける清澄よしはしに在りうち小乗權大乘法華真言の四門の形行の次第を詳らかよしるし戒鉢即身成佛義と名づけ山内の僧達よ示し給ふこれ法門筆作の初なりかくて、侍世の有様を思ふよ鎌倉は當時日本の大都會あれども法を弘むるにはよろしく道を學ぶよは益な一又かゝる山寺は閑寂をれども書籍よ乏しく其上道を談ずる友もなし干將莫耶の名劍も屢磨すはいかゞせん傳へきく比



散山の講
 堂に高祖
 三塔の學
 者を相手
 とし
 慈覺大師の
 義を難す



叡山は傳教大師圓乘戒壇の山といひまた三井寺東寺南都の七丈寺は今の僧のうごくもあれ其宗々の開山は入唐渡天に艱難を凌ぎ苦修練行の跡なれば經論書類も定て多からんいでや彼の山々を遊學し先師の道をうかばばやと其心構しつ旅の用意も俗の身は立ことやすき水鳥の跡よとさじと道善御坊又同寮へもいと生を告今年も暮る秋の日の日影に笠をかざしつゝ京都さして被足おしたまひけるが鎌倉に立寄年頃親しき人々に音信給ふも世も國家の棟梁と頼つる北條泰時も此六月十五日春秋六十二歳にて草頭一時の路と消たまひ暗は燈灯を失ひたるが如く政道の古實烈も乱なんとす泰時の嫡孫四郎經時武藏守も補せられ鎌倉の數權となる萬端のこと昔も似ず人のこゝろも改りそのうへ去年丑の秋より五穀登らず二年の凶作四海こゝに困窮一世のあさましき事いふばかりあし蓮長師は鎌倉の旅のやせりに思はずも北嶽山の學僧尊海といふ人よ因を結び種々佛理を談じ年ころの友の心地して底意なくものかたらひ我も叡山も學門の志願あるよし語り給へば尊海も大きに喜び已は座主信尊の法弟もて徑庭なれども叡山の四俊とか人も算る者なるが今般法川の事ありて鎌倉の御所仕候しそが川もはや果たり御身は才學の壯士とあはゆるを疾嶽山に登り給へ我ともなひまいらせんとありけるよぞ闇は燈火渡りよ舟願ふてもなき同伴と蓮長師のふかく喜び秋の日あしの短くて其夜は懷鳥に一宿し其猶くらき竹の下けふ越わぶる足柄の關路ほそなく駿河をる百度見ても雲風は姿さためぬ富士の嶺のけふも見へけり明日はまた宇都の山邊の馬場わくるも夢か武士の矢矧の橋の一向に皇都をさしていそぐ身は問達の渡し風寒く旅の扱扱はうつさじとけ

ふはた曇る嶺山志賀の湖水底清き蓮長師は彼の尊海も伴はれ坂本より沼山も登給ひつらゝ四境の風景をながめ給ふに西北は山城國愛宕郡もわたり東南は近江國滋賀郡も屬し嶺は四明が嶽とて人蹟絶たる高嶺よとしてこゝに登れば諸天の御聲もきこへつべし鴨川大井の二流愛宕雄の山々より淀川の流れ遠く難波津の浦より青海波々として帆を掛たる船は昆蟲の蟲くも似たり東南の山下は唐崎の松栗津の濱湖水の縹波悠々として沖の小島竹生岬は水鳥の波も遊ぶかどあやしまる山水の美景四境を遊らし萬古の風色足すといふ事なし其棲べき學室のわたり樹木森々を生茂り庭も生蒸苔滑かよ山の巖として佛の禪定を示し水は語て如來の演說もかたざる億萬の經論は一山の草木より多し三千の學僧は智解を擬してかしましからず實や傳教大師はじめて此山を開き給ひし時阿耨多羅三藐三菩提の佛津我が立軸も加あら給へと給ひしもいと尊く天竺の龍山居士の天臺山もかくやありけん我此山も久しく修學せば一世の大願も茲も成就すべしと深く喜び始めて法華經をもつて我が本分とさため三塔の學衆も親の天臺章安妙樂の釋疏を熟覽し天臺一宗の學を講ずると其一日の學問餘の僧三年の修行もあは及びかたして、よおめて常山の役寮も評議して東塔の圓覺坊といふ一院を住職せしめ此ころ靜明經海又心贊なさいへる何れも三千大衆の上頭もして博學の擧たかし蓮長師は常も此等の人も立交り經を講じ釋を論ずるの外他事なく月日を送り給ひけり今朝しもまた常もかはらず香を拈り日課の御經に心をうつし梵音曉々と靜澄一深く佛意をかんがみ給ふに上行無邊行等の本化の大菩薩末法第五の今に出現し法華經

をもつて廣く御惡の衆生を救ひ給ふべきよし御經より明かなり我佛縁かひなく進ては天臺傳教より見へず退ては彼の上行菩薩出現の時もいまだ逢來らず何をたのみ誰を師として今經の利驗を仰がんやと御泪を、ろよ膝をうるほしける折はや講堂より大衆を聚る鐘の聲深閑の雲の隙もりて唯々ときこゆるにぞ御經を卷かきめつ、三禮し徐々を履を曳て講席より出勤なし給ひけり此日學徒多く聚りて講主より法華經と大日經との差別いかんといふ問を大衆より出ず蓮長師席より進み法華經は醍醐の極説大日經は生蘇味の權教力士と小兒の腕腕べ此二經は何の論かあらん常山は慈覺大師より至て開基傳教大師の法水忽ち彼の眞言の泥より濁りたりと粗その條々を擧て席を打て談じ給ひけり我朝法華の元祖傳教大師といふは神護慶雲元年をもつて生れ名を最澄とよぶ初め山科寺の行表僧正を師として六宗を學ぶ後淡土に渡り天臺の教法を傳て日本よかへり大ひに華嚴三論等の六宗を破南都七大寺の高僧蜂の如く起り傳教大師を佛敎と罵る時延暦廿一年正月十九日桓武帝高雄寺より行幸ありて彼の南都の六宗善議勝猷等十四人を傳教より召合給ふ日出ぬれば星かくれ法華の大典ひとたび出現して一切の諸經何の光輝かある唐の天臺は釋迦より信順して法華と四百餘州より揚今此傳教は天臺に相承して今經を日本よ弘通す獅子一聲吼て百獸驚るが如く南都の六宗對を削り六十餘州傳教大師より歸伏せりしかるよ法弟義眞圓澄はその法を守護り給ひけれども慈覺大師弘法の眞言となづみ又別より理事勝といふ義を立て玉瓦をそへ酒を酢を加へたるやうよ眞言と法華と習ひ合せて版山の宗此、よ濁りたるよし此席よりぬて言出し給ひけるよぞ一座興さめて見

へにけり兼ての學友尊海この座よおはしけるが蓮長師の袖をひかへ講論果て我が坊にともなひかへり筑紫背掛山の茶を煎じ鹽うち豆よ蕪膏の渣物をと取いて、櫻尾がてらうち解ての物がたりよ蓮長師のたまふ様この年月天臺傳教兩大師の遺教を深く考ふれば慈覺大師こそ心得ぬ身はこの山にありて其宗流を繼ながら心は雪と墨染の袖もも取ぬ師敵對今は一山のこりなく何時か慈覺の宗風に落果たり其緯緯を知ずして在す君かは君はまたいかか思はずと計り給へば尊海もさうつむきて應もせずひそかよ其天機秀發の才智を感じける蓮長師は一山の老栗みな其實學よ懐き今年寛元四年午の春横川華芳谷淨光院より住職せしめ圓頓坊を兼帯して名を三塔よとらかし給ふ三井寺南都高野山の游學も皆これ版山修學の餘力よして春秋わへせ十二年此山よ心をとめられ一期の修行全く常山よ成熟すとぞ思はれける此程は一代經の要文の處を抄書し三藏要文といふ書を作て學衆に示し給ふ猶常山の宗風の乱れたるよを時々參會の序をもつて此事を歎き談じ給ふも承和このかた三百有餘年慈學の學風此山よ染中々ひるがへるべきにもあらず同友の智識博學の推もこれを聽て世ばす還て若々敷おもひけるもこれ全く傳教大師の化縁よ、よ斷絶の時節よやあらんと深くまげき思しけるこれより折々京都よ出て内日さす大裏山の春のながめよ九重の空いと長閑よ百官百司の袖を列ねて參内するありさままた赤裳曳官女上臈遠の花身がてらに神詣を促がし都並の嵯峨野よ若菜を摘み筆を折さすがに京の春氣色と惜りし世ありしも現む、ろの移りもて柳櫻をこぎまぜし都を春の唐錦をがめもあかね風景を遠近見めぐりつ、その夜は五條油の

小路天王寺屋といへる舊新を商ふ家又宿り給ひ一主翁淨本性教實又して才あるものゆゑはや
くも師の尋常あらぬを察し一向こゝまひきとゞめ妻もろともは疎略ならずもてなしけるこれより
京都よ出てはいつも此天王寺屋にやどり定め主夫婦も他事なく尊敬せしも不測の大因縁よて幾
年よ及び主翁淨本その妻妙蓮ともは法子とあり淨本は弘安三年九月十一日をもつて卒一其孫通妙
宅を轉じて寺と名し本蓮寺と號す永祿二年中興及び本國寺日柄上人寺號を改む今の妙蓮寺これ
なりさては運長師は淨本が厚き情を喜びこゝに滞留せし給ふ此頃圓爾和尚とて普門寺に住し臨
濟を弘むる禪僧あり運長師折々この方よ遊び給ひたるは圓爾和尚もその博學智辯を感じ其法弟等
よ向ひ師を指さしかゝる器量あらでは衆生の導師には成がたしと語られけるゆゑ其頃人いひ傳へ
て師を輕からずもてはやしけるとぞ圓爾は後一國師とて世よ名高く寶元年中九條關白道家公
の本願として一寺を建立す運長師平日の交り深かりければ結縁の爲よ大なる良材を一本寄附あり
しよ程よく諸堂結構してこれを京都五山の第四よ准じ惠日山東福寺といふ今よその斯りし材木は
柱となりてこれを日蓮柱と稱し世よ奇特の利益ありとて取者多かりける又同師聖眞寺よ道源
といふ僧ありて曹洞一派の禪を基よ弘通す運長師又此僧よも親しみ給へり今京都には道源禪師
圓爾和尚といひ又其上に唐の禪僧道隆蘭溪和尚後よ鎌倉建長寺の開山となりし大覺禪師とて世上
に聞へたる唐僧の來朝して泉涌寺の來迎院に住居し世の渴仰大方ならず運長師みれを開給ひ泉涌
寺は禪律真育淨土四宗兼學の大山よして開基已來宗朝より渡りし經論その外佛具等もあまたあり

ときく能懐ひと來迎院よ入道隆禪師の會下よみそみ禪宗の見性成佛の工夫を凝し多玄弟子の座よ
交り給ひけり此禪宗といふは楞伽經楞嚴經金剛經等を宗旨として其宗風他の諸宗に似もつかず大
聖世尊一切經を説終り機縁の遊藝跋提河の邊よ入滅の時人天四衆五十二類悲歎の泪雨と降す迦葉
尊者難陀山の洞より渾身雙林のもとに來り給ふ如來寶棺の中よ在して華を拈て見せ給へば人天大
會その意を悟る者なし迦葉尊者ひと微笑たまふこれ心を以て心に傳へ正法眼藏涅槃の妙心と名
付たり迦葉この佛宗と得て此を如來禪と稱すのちよ南天竺の達磨和尚震旦よ來り其心印を傳へて
教外別傳と名乗り此宗門は不立文字と立て一切佛經に依らず一代聖經は月を指ゆびの如く月を見
て後指何の用かある經論は瘡を拭ひし紙屑佛像は屎塗を掃さぐる椀木あり釋尊の頭を踏で初て佛
果を證すとの、しり腕を切て明悟し猫を殺して悟道一旗の動くよさとり瓦を投て得悟すこれを直
指人心見性成佛といふ讀經修學を疎んじ座禪工風を専に凡俗の耳を驚かす愚昧の聽を奪法外不
測の宗旨なり此宗の日本よ渡りしは仁安三年釋の榮西天臺山の敝禪師より心印を傳へ歸朝有て建
仁寺を草創しこれより禪流海内よ彌布運長師は此宗風よよりしはし禪機を凝し給ひけるが又思立
て江州滋賀郡三井寺よ趣き給ふこの寺は比叡山よ先立こと一百餘年天智帝第五の皇子大友の殿宇
を寺とし園城寺と名づけたり本尊彌勒菩薩よして五十六億七千萬城龍華の成道を期する尊ぶかく
其三會の曉を契らん初ぞと入相の鏡よ無常の響をつたへ志賀の花園よ無我の風を觀するもいと尊
一當山の中興智嚴大師は關州の人なり十四歳の時叡山に登り義真和尚の法子とあり後慈覺大師よ

與同し口も天臺を唱へ心も眞言密部を存ししかも大徳として三代の帝王の御戒師となり世上の尊
 敬大かたならずかく盛なり一蹟あれば學匠も亦多かりひとたび其境に入て不測の法理をも尋ばや
 と其學寮に入て智證大師傳來の密記書録を讀給ふも皆これ慈覺の同論として寺門山寺ともに法華
 經の蹟と絶し天臺傳教そのもかけもとめず日本一宗正法も背き釋尊の本懐を滅却す哀れこの
 暗のうつゝも迷ふなる一切衆生は何を頼みとして後の世を助からんと両眼に御泪をうかめ忙然た
 る折しもあれ襖をしめけ本院の所化見あれぬ僧を伴ひつ連長御坊よ此はるの初め此山も淵變した
 る者あるが久しく鎌倉ありて今又ふたゝび踊り登りし善證といふ沙門なり此寮も同居させよと
 學頭の下知なるはいとさし示せば連長師は唯々と應へ式禮終て宣やうさても床しき友を得つるか
 ち我さいつと一五歳までも鎌倉に住で親しきかたもいと多し關東の勳評をきかん管信さへ絶て六
 年をへして、よ沙路も遠き鎌倉の安否を問んうれしさよと在ければ善證坊は歎息吐我れ前年齡い
 と弱くて師に誘れて鎌倉より下り大藏ある大慈寺に住思ふも増る府内の繁華かゝるめでたき地に
 棲こそ世よあるかひの果報あれと送る月日の箭とけやみ幾歳ふり一白壁の積る病ひに師の坊の消
 て跡なき我が薄命寺内の親しき友達はいと想ふもよめもしたれ近年つゞく鎌倉の凶變に抽うち
 拂ひかへり來ぬと舌を卷ての物語連長師は耳を聳てその鎌倉の凶變とはいかなる事と根葉分て問
 る、善證膝つくろいさればとよ鎌倉將軍頼經公ときこへしは二才の御時關東も下向あり九才もし
 て征夷大將軍に任せられ今年三十も得あり給はずとかく世と憂事も思召給ふその根は北條一家
 權威にはこり將軍家はあれども無が如く其上諸國も非分の沙汰のみ問へ彼是御意をいため給ひし
 しき間なき御病憫ことよ去る寛元元年極月廿九日の事ありき白き虹唯一筋日輪をつらぬいて一火
 よ跨りたりとは不測と御所のかしはしきよ將軍家御庭も下立これを仰見給ひしは俄も御目眩凍毛
 たちければいと其儘御殿につかせ給ふこれより雨風度々吹荒て時候順當あらを是も依て其翌の
 辰の三月將軍家御心願とあつて鎌倉中の神社佛圖残りなく御願あり四月廿一日御嫡子頼朝公
 御元服ましまし京都へ奏聞のうへ征夷大將軍も任じ給ふ御節わづか六歳なり同七月五日先將軍頼
 經公は御齡廿六歳久遠壽量院に入て御飾りをおろし入道なり御名を行知と稱し年來の御本懐あり
 と悦び給ひしこと心無き下賤の者まで問も勿体なくかなしき限りと人皆いひ合世の中何となく物
 哀れも頼すくなく覺ゆるも打つゞき去年三月の暮れこれまで日本もありとも聞ぬ怪しき形なりと
 思ふ處も今年寶治元年未の三月十二日の夜戌時よ大ひある流星いで、丑寅の方より未申の方へ飛
 渡る其長五丈ばかり虚空をわたるの光り星の如く鳴響く響大地も震動して雷電より凄しく人皆
 魂を消ぬ同十七日天氣うら、かある長天も黄色なる蝶の數限りもなく飛聚り幅一丈餘長十丈は
 かり模様乱れず恰かも黄色なる旗綯をひるがへすが如く颯々として虚空よひらめきあるひは高
 雲間にかすみ又は近く軒端に舞けるにぞ鎌倉の町中こ、よかしこと見物せしがはては破落くと
 飛散さしにも廣き鎌倉中の人家も飛入て死しぬ昔朱雀院の御宇承平の初常陸下野の阿闍梨黄山を
 る胡蝶多く聚りしが程なく相馬將門反逆して東國暫く乱れたる事ありきと昔語りをき、傳へ安き

權威にはこり將軍家はあれども無が如く其上諸國も非分の沙汰のみ問へ彼是御意をいため給ひし
 しき間なき御病憫ことよ去る寛元元年極月廿九日の事ありき白き虹唯一筋日輪をつらぬいて一火
 よ跨りたりとは不測と御所のかしはしきよ將軍家御庭も下立これを仰見給ひしは俄も御目眩凍毛
 たちければいと其儘御殿につかせ給ふこれより雨風度々吹荒て時候順當あらを是も依て其翌の
 辰の三月將軍家御心願とあつて鎌倉中の神社佛圖残りなく御願あり四月廿一日御嫡子頼朝公
 御元服ましまし京都へ奏聞のうへ征夷大將軍も任じ給ふ御節わづか六歳なり同七月五日先將軍頼
 經公は御齡廿六歳久遠壽量院に入て御飾りをおろし入道なり御名を行知と稱し年來の御本懐あり
 と悦び給ひしこと心無き下賤の者まで問も勿体なくかなしき限りと人皆いひ合世の中何となく物
 哀れも頼すくなく覺ゆるも打つゞき去年三月の暮れこれまで日本もありとも聞ぬ怪しき形なりと
 思ふ處も今年寶治元年未の三月十二日の夜戌時よ大ひある流星いで、丑寅の方より未申の方へ飛
 渡る其長五丈ばかり虚空をわたるの光り星の如く鳴響く響大地も震動して雷電より凄しく人皆
 魂を消ぬ同十七日天氣うら、かある長天も黄色なる蝶の數限りもなく飛聚り幅一丈餘長十丈は
 かり模様乱れず恰かも黄色なる旗綯をひるがへすが如く颯々として虚空よひらめきあるひは高
 雲間にかすみ又は近く軒端に舞けるにぞ鎌倉の町中こ、よかしこと見物せしがはては破落くと
 飛散さしにも廣き鎌倉中の人家も飛入て死しぬ昔朱雀院の御宇承平の初常陸下野の阿闍梨黄山を
 る胡蝶多く聚りしが程なく相馬將門反逆して東國暫く乱れたる事ありきと昔語りをき、傳へ安き

心もあらざりしに同廿一日の事なりき由井が濱の沖俄に紅ひよ變じてその色朱と流したるが如く
 大海皆血潮とあり紅ひよの波岸を洗ひ熾よ生じ磯草も砂よ交る種々の貝も礫も皆その色よ染成て珍
 らしくも又恐ろしと市中の者見物をさへ爲ざりけり御所よりは執權を始大小名までそれく由井
 が濱に出馬ありてその不測を見届給ひけり此月十一日奥州津輕の浦々海の潮水血に變じあやう
 魚數多く死して流れよりぬ其長一丈餘手足は人間の如く鱗細よして頭と尾鱗は魚なりしよし彼
 の國司より注進すこれよ依て博士を召て御考ありけるに先例こゝろよからや昔文治五年の夏此魚
 あつて泰衡滅じ又建保元年四月この魚鎌倉の海よ見へて和田義盛亂を興しその一門滅じせり此
 魚の怪異は世の中の不祥なること論なし但し海水の血に變じたるは和漢兩朝前代いまだ其事をき
 かすといへども大方天下の御大事あらんと言上せりとさきく彼といひ是といひ斯春の不吉の凶惡耳
 目と驚かす鎌倉の上下萬民みち面色土のごとく聲おのゝき恐ろしなんと言ん方あくはべるすと其を
 見る如く語りければ蓮長師はあまた、び歎息し日月二天いまだ地も墮す水は流れ火は燃る此世の
 滅する地劫よはよもあらじ其上天下の政道正しく民を撫下萬民は五常を守りて五倫亂れずかく正
 しかる世の中よ天地の怒り烈しきは鎮護國家の佛法に僻めるとの有もやすると思ひあまりて口
 龍に獨言一給へば善證は開谷こは不審仰かな京鎌倉はいふもさらなり陸奥筑紫のさかひまで明
 僧知識の開きたるその宗門の數多く佛法の繁昌は津々浦々ののはてまでも神に佛よ敬はぬ人とても
 なき此國よ何を罰して辛目を見給ふべき事かはと詰詞にさはあらじ神も佛も妙法の法味なけれ

ば此國に形もとめぬ空蟬のもぬけの殻よ入替る惡鬼魔王のなす事より國も衰へ世も亂る嗚呼あ
 さまよと言は得にいはで止にし御意を知るよしもなき善證がたがひよ前を見合せてともも愁然た
 るばかりなりける斯て寶治元年も半を過七夕津女の空ちかく變る紫さのたへがたきよ時知りかは
 よほのめかす桐の一葉よ思立南都の大寺高野をも遊學せばやとおぼしめ一三井の學寮よ別を告大
 津より京都に出給ふよ鎌倉よ兵亂ありきとて下賤者の癖として路よ語り門に傳へいと喋々しく聞
 ゆるよ蓮長師は天王寺屋淨水がもとに立よりて南都よ尋問せんと思立しその志を物がたり且
 また鎌倉の騷亂とひいかたる事よはべるやと給給ふよ淨水は眉根よ皺よせいとよ昨日陸奥の書
 籍をもたらして六波羅殿の記録所の底よで参りたるに侍所の詰事達その始め終りまで詳らかよ
 聞一給ひたる鎌倉の爲林その混雜よ我が川は得達すして歸り來ぬ法師よ川をき事ながら耳の法樂
 なし給へと矢背の姥が手作とて貰ひたる初穂の黍の搦餅折敷に盛てす、ゆつ、さてとよ鎌倉に在
 て三浦若狭前司泰村ときこへは鶴が岡八幡の東の山際に邸を構へしかも先執權北條泰時のおま
 れば天下の政事とも談合し世に輕からぬ家筋よぞ在しけるこ、よ又秋田城之助義景といふは
 藤九郎盛長の孫にして代々長谷の甘細よ住居し當時の執權北條時頼と無二の交りよてこれまた世
 よ威勢を振舞ける此兩家はともも累代の諸侯よして右府頼朝卿このかた鎌倉の城邸天下の礎石を
 りけりしかるよ此兩家たがひよ權威を離ひ年頃快よからずありけるより事起り前司泰村とかく我
 意を行きひ我がま、の所行多く將軍家の下知を蔑り非法の働き多かりければ北條時頼深く心を痛

め泰村が野心を宥め泰平の謀ごとをなさんと横々を扱ひ給ひければいよく心高振増長して無禮の事のみ多く其兄弟一族みな其氣に乗じて見へければ時頼も今はその謀叛の下心を察し川心いよはまかりける此事を聞傳へたる近國の諸士我もくそ人数を懸ひ鎌倉として参着し御所をはじめ北條家の邸を守護し事仰山見へければ秋田城之助は折こそよけれと表忠義の色をあらはし内心よは日頃の意趣を明さんと俄に下知と傳へ大曾根左衛門尉長泰武藏左衛門尉頼朝十郎公義等ははじめとして一族同意の軍三百餘騎若宮大路より神護寺の門外へ屯して旗を作り五石疊の紋摺たる旗をさし揚筋違橋の北へ陣取たり諸國の御家人すはや軍が始りたるごとて追々此手も馳加はる三浦前司泰村は不意を討れて驚きつゝ家臣郎等も手配を傳へ嚴しく防ぎ取ふ處執權北條時頼も今ははや事破れ及びたれば是非もあしと北條陸奥守實時をもつて將軍家の御所を告め北條六郎時定をば討手の大將とさだめ五百餘騎をさしひけられれば塔の辻より馳加はる軍勢雲霞のごとく既又鎌倉大乱よ及び老たる執を泣泣叫ぶ兒を引携妻よ兄よと逃忍ふ家財を荷ひ雜具を運ぶの狼狽病人を踏殺し幼兒を倒し抱懷き西へ東へ辻よ又泣喚るる物凄く修羅開扉の惡道を目前こゝよ感じけるさてしも敵味方の此のころは天地よひびき軍馬の物音地よ震動し既防兵衛入道信濃四郎左衛門軍勢をばげまゝ北の手を攻破る處佐原十郎左衛門泰連同十郎頼連能登左衛門尉これを拒んで血戦ししはしその斐見へざりけるが伊豆國の住人頼又八と名乗て泰村が市の小屋よ攻登り向ふ敵三騎まで伐て落し小屋に火を懸たりしかば折ふし風烈しく火焰四方に散乱せり三浦の一族はや

防ぐべき手立もなくとも逃れぬ運命なれば徒らに焼死んより法華堂に引退き故右大將頼朝卿の御影の前まで自害し前代の御恩を報奉らんと各々北の塀をうち破り法華堂として引て行泰村が舍弟能登守光村は永福寺の惣門の内よて郎等八十騎を隨へて眼よ餘る大軍を引受挑み戦てありけるが兄泰村が引退くを見て死生を一所よせばやと一方の敵をうち破り法華堂をさして落行を毀萬の敵軍きびしく後を搦て追討まう三浦泰村が兄弟毛利入道西阿大隅前司重隆英作前司綱等返し合ては引討拂ては退きつ漸く法華堂に引入けるに續て込入る敵軍をば白川七郎兄弟岡本次郎垣生小太郎佐野三郎よ防せて頼朝卿の尊像の前よ居並んで高聲よ念佛し三浦若狭前司泰村を始として一族二百七十六人家臣二百廿餘人同時よ腹を挿切て同枕よ死てければ申の刻には全く腹は果よけり嗚呼此日いかなる日や寶治元年六月五日累代武威を開東よかややかしたる三浦の一黨夏草よ結び一夢の跡もなく皆滅亡に及びける又泰村妹婿上總權之輔秀胤は下總國一の宮大柳の要害よ精籠り近邊を押領し合戦の要害取々ありと注進す依て大須賀左衛門尉胤氏大將として二千餘騎鎌倉を進發すこの注進櫛の齒を挽が如く京都六波羅へ聞へ海山隔つ九重の空さへ曇る心地なれば關東よすむ民百姓の心のうち思やられてはへるはと息つきあへず物語るを遊長師は心の底に斯あらん佛法乱れば王法乱る左もあるべき道理すと明ていはれぬ本地の内難さても恐ろしき御世よは成果ける物かきと深き心を岩が根よ下漏水のいと流くいらへなし給ひつゝ其夜は淨木夫妻がわりなくとよむるゆへ一夜をあかしそれより南都よ觀き給ひけり南丹吉奈良の郷といふは帝王六代の

都よして昔は匂ふ八重櫻けふ九重よ移しはしたれ古き寺々の多く残りて佛法盛の地なればや世よ
 奈良學といひ傳へ古書經論を高くつみて佛學の達者いよ多し遊長師は叡山にて知己の付こゝにあ
 るを紹介として元興寺に入給ひ彼の高麗國の慧遠和尚の傳來せし唯心無境と立たる三論宗を學び
 又傍よ我が朝天平七年玄昉法師の弘め初め俱舍宗の論三十卷を讀んで其宗意を究め給ふて、に
 又興福寺の僧釋の道昭律師唐よおめて玄淨三藏より傳へたる法相宗といふあり此等の諸宗をそれ
 これと習ひ併合近きところは東大寺よりつり住いく月日を送り給へども奈良の古跡を見物せんいと
 まもあらず在りけるが此程うちつまく彌生の空のうらゝかあるよ學室を立山給ひ振さけ見ればは
 のがすむ春日の山を真中よて南は高間北は若州この三の山を羽翼の山と歌によみまた三笠の山と
 も世に傳ふ萬葉集に
 はし鷹の羽買の山を今朝ゆけば飛火野の原に雉子なくなりと見へたるもふもしろくいま幾日あ
 りて若葉摘なんどある對守の池霧消の澤に萌いで、ねよげに見ゆる若草と己が臥處と小雄鹿のお
 きふし遊ぶのぞけさよ心いさみて千早振神垣の森御手洗川消流る、水源の春日の社に祈給ふ當社
 は大宮四社一の御殿と聞へしは武甕槌命よして神體慶雲二年この春日野よ形向ありて天が下の
 草民を護ますよといと尋く思はれ猶そこよ、と尋ねまほしくおぼせども尋べき諸宗の經論最多く
 て心のまゝに遊ぶよよしなく狹澤の池の玉露のたまさかよ昔を忍び給ふのみ今この東大寺よ在し
 て華嚴宗を修學をし給ふよこれは孝謙天皇勝寶六年良辨大僧正勅を受けて入唐し盧山の惠遠法

師より習傳へ華嚴經よて三界唯一心と立十玄六相の法門を備へたりまた成實宗ときこへたるは味
 空無生の法理とて獅子鎧三藏が造りたる成實論を根とする宗門ありかれこれ學びの道よ今年 戊
 申の秋も深くありけるころ遊長師は泉州左界の浦よ待人ありて東大寺をうちたち郡山小泉より龍
 田よかゝり山路はさゆる霜風に散て流るゝ紅葉はいざといはねを洲川の水よこゝろを湧れて見
 送る瀬々の唐錦九曲坂なる石高路を數珠爪探てたからかよ齋厨品を唱へつゝ、徒行給ふ處よ僕よ些
 の袱を持しぬ椎石細の胴服よ黒皮の行脚し山刀を佩たる人此方と見つゝ、聲をかけ殊勝の御經いと
 有がたく聞はべりぬ御身はいづれの御出家にて何處よおもむき給ふやと問はれて後を見かへりつ
 我は遊長とて天臺の僧をれと今の天臺は天臺ならずまして諸宗は多けれと凡僧野師の了簡のみ多
 く佛の教よ似もつかず出家となり一身の任よは其を能く學び正さんと南都よ高野よ學問なす者よ
 はべると應給へば其容貌といひ道心といひ世に稀なる御出家かな我は和泉の國府よ棲る江川太郎
 左衛門吉久といへる者あり明日は先祖の忌日なり杜て一夜の供養をうけ我が方に宿り給へと懇よ
 ありければ袖振合す多生の縁断止がたしとそがまゝに吉久に伴れ上土門よ袖をへし松の緑も不
 老不死揚り楯に法衣の塵をうち振ひ威儀揚々と入給へば吉久も家々族々意を得させ一間を淨くは
 らはせつ敷てすゝむる花冠色も香もある櫻燈はやがて一乘の寶と結ぶ大因縁とぞ知られける遊長
 師は供養追善の經終り種々の話よ取交て自他ともに泡沫夢幻の身を忘れ後世の營み疎略也と云こ
 とよりて御經に見へたる月の鼠日の鼠といふ事をさへ語りいで給ふ茲よ一人ありて廣き野原よ

出て虎に追れて逃惑ひ數十丈の断崖に落入たり断は協はじと一株の草も取つき漸く其身は取どめ
 たれど下を見れば物凄き淵に長十丈ばかりの罅隙落なば呑んと待つけたり上を窺ぐれば彼の虎
 はもし登らば咬んと睨まへたる有様なればいかゞはせんと現も身もそはす恐ろしく有けるよいつ
 くよりか二頭の鼠いでかばるゝに彼の命を取組りたる草の根を咬切よぞ其人の心のうちいか
 に悲しかるらんと思ひやらせ給へ我等衆生の身の上全くかくのごとくよて人の上よはあらぬかし
 前の世に造りし悪業は虎を成て追來りこれに終れて六道の廣き原中よさまよひ唯今三惡道の深き
 淵に落入らん處をいかなる過去よ善根やありけん一株の草の手も觸りしをそれを命を取つきて漸
 く人間と生れたり前の世を願れば惡業の虎は嗚喚反して睨まへ居り後の世を見渡せば無量罪惡
 の罅隙を怒らして待懸たるを哀れあるか我々がいちのちとすがる草の根を月の鼠日の鼠といふ
 ふたつの鼠かはるゝに出來り昨日よ正月今は二月けふは朔日あすは二日を頓て限りある草の葉
 を咬つくされなば後の世いかよ成ゆくらんされば佛法を知ずして此あたし世よむあしく月日を送
 る人を智者といはんか賢人と譽んかよく思ひはかり給へと語り給ふよぞ主吉久をはじめ一家
 の男女これをき、一座しめりて共々菩提の心を發しけるこれより年曆十五年弘長壬戌の夏伊豆
 の伊東よ流罪の頃江川吉久は同豆州龜山といふ地よ移り住て在ければ不圖そこよ再會し本化の化
 導に預りて法弟となるべき良縁を結ひ給ひも宿世奇特の相遇とぞ思はれけるそれより遊長
 師は堺の津にいたり古郷の人よ値て御兩親の御使をもき、道邊御坊まで慈なくいませ山をき、喜

びの眉を開き給ひ其方へ睇るべき書なき認め彼此古郷の物語に思へづ日敷を重ね給ひけるが暮な
 んとする年華よ驚きふた、乃余良へ立歸り東大寺より紹介を求め招提寺の梅檀林よ入給ひける當
 寺は天下勝寶六年聖武天皇の眞和尙を我が朝に請待し御師依從からつ紫宸殿の御よ大僧壇
 を建て帝をはじめ大臣公卿下民よ至るまで受戒の數四萬餘人この招提寺は戒行律宗の本寺なり
 統て三論俱舍法相成實華嚴律これを南都の六宗といふ遊長師は此諸宗の論釋を學びそれより樂師
 寺の經藏に入て一切經をひらき彼の宗々の流義を逐一御經照一合せて一ばし心を潜め給ふこれ
 建長元年の頃よ一て年廿八才の時ありける茲よ又同國平郡郡法隆寺と云は坂城の宮の蹟よし
 て聖德太子勝曼經御講讀の蹟跡をれば遊長師も好み其跡の一たはしく此寺に入て三論成實を講論
 し程なく高野山よ登らんと紀の路をさして旅立給ひけり高野山とてこへしは紀州伊都郡よ属する
 靈山にして昔弘法大師唐土より日本よ歸り給ふ時かの唐の滌よて船に乗り三鈷を手も捧て日本
 の方よ向ひ此三鈷大日如來有難の地よとまされと空中に投給ひければ其三鈷翅をけれども高く雲
 に入日本の方へ飛去りけり船中の者これを見て驚歎せざるはなし大同元年丙戌十月廿二日歸朝し
 嵯峨天皇の御戒師となり給ひければ彼の唐よて投たる三鈷いつくも落止りしやと日本一州に勅命
 有てその在處を尋ねしむるよ紀州伊都郡高野山よありけると奏聞す天子御感悅在まして弘仁七年
 弘法大師を以つて彼の山を開かしめ金堂を建て丈六の阿闍佛八尺五寸の四菩薩をたつ今の高野山
 金剛峯寺是より遊長師は紀の路より花坂よか、り矢立といへる處まで登り給ふしはし休息つ、こ

、より侍ひ此山の僧一人加田より歸るゝ連立嶺しき坂を登り給ふ路の右りに磐石として手をもて
 扱たる如き岩角あり又押揚岩とて大盤石を押あげ下面に左りの手の跡凹かゝ見ゆる彼是いかある
 故ありやと尋給ふに路連の僧うち嘆嗽さてとよひかゝ弘法大師此山を開給ひ一は大師の慈母うれ
 しく思し登山と給ふを弘法大師おしとめまわらせ女人結界の山なれば協まじきよ一諭給へば
 母公の宜やう我が子の開きたる山は其母の登られぬ道理やあると強て登山し給ひければ一山假
 り助して火を降せければ母公の御身たちまぢよ鱈魚れんとす大師愕てかたへの巖を押揚その
 陰は母公を隠し給へり母公御怒の牙を咬あたりの岩をいたゝかゝ扱給へばその御手の跡岩角につ
 きぬ今の扱石押揚石これなり遺恨やるかたなく猶登り給ふと鏡石とて石面瑠々として能物の影を
 うつす石あり母公我が姿の此石は移るを見たまふに髪うち乱れ眼血はしり忍見の形も似たり我
 が身ながらもろそろしき事に思し召乗角女人の身は生身の佛に値奉らずば得脱かなひ難しと明め
 これより天野より下り巖窟に籠り慈母出世の 喚を待て人定給ひし天野慈母院彌勒堂これあり
 と喘ぎいといと誇りがよ物語るを遊長師は唯應々といらへつゝ心の内は思すやう後我弘法大師
 唐より渡り天竺より越難難修行の功積で御身ひとり佛果を得たれ母を救ひまわらすと協はず現在こ
 の山は地獄の炎を降せ牙を咬石を扱て怨を末世傳へ恥を後昆と晒させ奉りし大罪無量億劫無間
 の底にその身を焦すとも此罪猶消難かるべし佛教は父母の恩第一と定め儒典は五刑三千罪不
 孝より大なるはなしと見へたりたどひ其身天子の御戒師となり下萬民は生如來と仰がるゝとも豈

本意なき事に非ずやもし此事實あらば眞言の宗門は三界の女人たすかるべき道なく一切衆生
 父母は孝行の道絶ぬべしと心に秘て山吹のいはぬ色ある花坂より實をも結ばぬ無益語のむかへ
 りに路はかゆき五十八曲總門もや、程近くありにけるこれより密殿の淨域は入頭をめぐらして其
 山嶽をうち詠め給ふは花坂不動坂いづれも五十有餘町の險路を陟り上峯又廣き平地として四嶽八
 山屹立として内に大日覺王の淨土を開き東西は龍の臥が如くよして流をそゝ南北は虎の踞まる
 る似て坊舎その間立連ねたり玉川の水源よりは五逆三毒の水を流し御廟の橋は五障遺怨の濁穢
 を渡さず扁柏黒松いや及び夏荷寒き伽藍の清淨又 喚の枕は佛法付の聲すみて無明の夢をふど
 ろかす此鳥はその形容鶴鳩も似てその色碧緑あり其啼聲佛法僧と喚が如し歌に
 我が國は御法の道の弘ければ鳥も唱ふる佛法僧かな、後鳥羽院の御製も思ひ出られ誠は佛門の
 柱石鎮護國家の山を思はれける當山の起源たる眞言宗といふは同一佛法のうちにも釋尊の教法
 と大ひよ事かはり毘盧舍那法身大日如來虚空の阿伽陀天法界宮よいまして金剛薩埵の爲よ口よ
 眞言手は印契を結び慈は觀門を開くべき此三密の秘法を傳へこれを大日經と名づけ給ひ又密教と
 定む釋迦如來は同じ佛あれども應身下劣の凡牀にしてその説たる御經も又いやしくこれを顯教
 と名づく其相違をいは、釋尊は無明の凡夫にして大日如來の履採にも及ばず又大日經は圓滿具足
 の密法として法華經の如きは其の牛飼よもたらすといへり此宗旨は中天竺の善無畏三藏と云者將
 來して唐土より渡り玄宗皇帝の御師となりて眞言大日經を弘通す金剛智三藏不空三藏つゝひて天竺

より来て其宗門をたつる此時又當て淡土四百餘州真育大ひは流布せり本朝は空海和尚實龜五年を以て讃岐國多度郡に生れ延暦廿三年五月十二日三十二歳にして勅命を蒙り唐に渡り齊龍寺の慧果和尚より真言密法を傳來して日本に歸り彼の傳教の弘めたる法華經の位を考ふれば顯密合その中より大日經第一華嚴經第二法華經は第三として大日實經は就れば法華の類は顯論として幼稚もの、戲言に似たりと罵り高野山を開て真言の正宗を弘む一天の君尊敬遠からず萬民誰か信ざらん弘仁九年の春天下の疫厲を攘除かんと祈り給ひしかば夜中より日輪出たり又朝廷にて即身成佛と云事を疑ひしかば手より智拳の印を結んで南方に向て現身は佛とあり光明を放ければ天子は玉の冠を傾け大臣百官地上にひれふ給ひけりかくて承和二年三月廿一日金剛峯寺にして手より毘盧の印契を結びて入定な給ひけりそれより後八十七年と經て延喜廿一年十月弘法大師と隱名を受給ふかゝる尊き五智の瓶水三密の法印かるくしく他家に授けべきまわらざるを蓮長師のこりなく其奥藏を研究せんと庵ふり埋む野の中より一歳と送り明れば建長二年の春とむかへ雪間の草の初みどり都の花より珍らしく心も春といさみつゝ高野を下山なし給ひこれより道を河内に求め當國石川郡太子村なる磯長の秘福寺に聖德太子の御廟と拜給ふ中央は太子の御母間人皇后を欲め東に聖德皇太子西には太子の御妃膳臣の大妃を安じこれを二尊一廟と稱し今も御廟の丘は忍木雜草を生ぜず雨風は熱す崩れず樹木は諸鳥翅を休めず此を御墓山三の奇事といひ傳ふ太子御入城の后推古天皇より後宇多帝にいたる迄四十代の帝王代々こゝに車馬をす、められ御廟參絶ざりけるかゝる尊

き靈跡あれば蓮長師も茲に參詣し御廟の前に座具を展敷恭敬禮拜し法運興隆の恩徳を謝し給ふ日も夕暮て山の端より三日月かすむ黄昏時ゆくてをいそぐ事かはと此廟堂の中へ入て連夜ありけるに其曉天がた崩崩の燈明ほのかに聖德太子衣冠正しき御服のうへに錦襦袢九條の御袈裟をかけ給ひありくゝと其處より立給ふに蓮長師の禮さし給ひし經卷を徐かに巻おさめうやくしく御手を支當今末法の群類のため此法華經を弘めんと宿願を遂げよと述給へば皇太子は黙頭つゝ、泥鰌をして滿面は歡喜のいろをあらはし給ふよと思へば夜はほのくしく明渡り妙香のかをり四邊に散りて御頭も擡得ずた、まゝかき唐衣日もさしのぼる御山猶御名殘のしたはしく禮拜經も時をうつしその御廟堂を退出なし給ひこれより山城國深谷郡男山嶋が峯に跡と垂給ひし石清水八幡宮に參詣し宇治より京都も出て天王寺淨土本がもと歸り南都に高野の物語りつもの修行の難を淨本夫妻はかつ感じかついたはりばらく茲に御身の勞を休め給へといと懇もてあすより我が故郷の心地してあもはづ日數をかさね給ひけり人を酔するものは醲醲あり、雞を酔するものは蝶蝶あり、雞蜈蚣を啖へば酔て曉天を告す蕎麥の花を嘗たる蜂は酔て人を刺す薄荷を咬み猫は鼠を捉す鳩に桑椹蛇は菜茹いづれもこれを嗜べ酔といふ其道は違ひ良能を失ふは異類もまた人間よかはるとあゝ今日本國の一切衆生方便權教の酒を酔て法華真寶の正氣を失ふ其生死長夜の醉をさますべき方術もかなと蓮長師は南都の六宗高

野の眞言廣く諸宗の奥蘊を窺ひ京都へ歸てしばし雄氣を養ひ在しける折天王寺屋淨本が年來した
 しかりし儒者あり博學の名高く月卿雲客を友とし仙洞の御所へさへ時々は昇りて經史百家の說を
 も聞へ上るよしをききたまひ遊長師は一日そのかたを訪たまふ東寺のほとり北面雜所の住居も
 交り街近けれどもかしましからずいと物靜けき玄關も物言さんとおとづれつ五條油の小路ある淨
 本が縁の者のよし言述て案内と請ひたまひ面會しつ且驚き膝を撲て先生は比企氏よはおはさぬや
 と有ければ彼儒者不審はれやらず斯のたまへども鬼の魂なき見も聞もせぬ貴僧をばいかで知んき
 識よしあらずと答れば師は微突て儒者のうへは半面の識とて稜の隙よりかいまみて其顔を半面
 見しさへ識人といふなるものをいかよして幼稚心のいはけなき吾さへ見覺へあるものを君は吾よ
 り節たかくて物々しくも吾が家を訪給ひし房州小湊の配流人實名が兒の昔日よはゆるかしといは
 れて先生ひたと呆れ幼稚ぬしさへ見覺たるを年華高くて忘れは我ながらるぞましかりきといひ
 降て一別以來の應答にむかしを思ひ出しけり此儒者といふは鎌倉二代の將軍頼家公の其頃には比
 企の判官能員とて世に時めきし權貴の家たるを北條時政が政子の方と心を合せ腹憑くも能員をお
 のが邸よ欺き迎へ名越の亭よてたまし討うのまへ手勢を引具て比企が邸へ押寄つ、不意を伐た
 る殘忍茶毒比企の一族のこりなく邪見の又も身を裂れ一閃と、又斷絶す其時判官能員がいとく
 季の男子ありけりそれさへ殺し捨べきをその頃比企の親族も伯耆坊とて戒行堅固の沙門あり鎌倉
 の北山の内なる證菩提寺に住しけるが此事をき、つ身を捨てその稚兒の法衣の袖に請うけてその

玉の緒は取とめつ其儘よは成がたしと房州へ流されしは此兒の二歳の時なりけりこれより配所よ
 人と成實名の家も程近ければ訪おとづれ罪なき配所の艱難とかたり互ひよ心をあぐさめ給ひける
 其後は比企氏も伯耆坊よともなはれ京都へ登り表には東寺に入て出家を志しぬと聞へ置實は才學
 いと頼母しく經學文章拙ながらねば過し流罪のつみ咎も代る月日の久しくて年々繁き諸國の成敗
 今は毛を吹疵を求むる人もあらじと儒をもて家を興し大學三郎能本と名乗都の人に仰がれて何不
 足なき身ありけり遊長師はむかしの好といひまた儒道よも望みありければ折こそよけれと大學三
 郎も厚く交り遊舞以來周公孔子の道とする仁義五常の教のものとすへ詩書論孟の儒書を研究能本よ
 學びたまひしが一時能本歎息し師の才智にて儒者とあり給は世上よ功高し人倫に益あらん階級法
 外無爲の佛道に身を陥し給ひしことよと歎かれければ遊長師は禮を正し先生その儒を知て未其佛
 を知給はず唐土宋の世も觀文殿の大學士張商英といふ人はその初め無學博學のきこへありて大
 觀四年六月召よ應じて參殿し始て徽宗皇帝よ御見目ありしよ此頃久しく早魃ありけるが此夜俄
 よ大雨降出天下を潤しければ徽宗帝御悅斜ならずこれ張商英が徳の雨ありとて雲翰を染て商英
 の二字を大字よ書して賜ひきこれより位階相丞よ登り天下の政事よか、つらひ北面無雙の儒者な
 りしが或時大寺よて釋尊の一代藏經たかくつんで麗々しく莊嚴し燈明を照し香を焚いと尊く歸り
 なす張商英これを見て憤りを含み天竺邊土の夷狄等が書し無益の書籍をかかまてに尊敬する
 ことはいはれずし從來佛といふは虛無空濶の教にして其體非ずその體なき道を求んとて迷ふ人これ

多し我れこれより取かへり恩味の邪説を難倒さんすと家より歸り久しく稽りて無佛論といふ書をか
 く其妻向氏あるとき大塔より問君は日夜何事を爲給ふや張商英答てわれ無佛論と書て彼佛法を破ら
 んとす其妻笑て無佛といはん何の論のあらん先有佛論を講て佛道と篤と見あきらめ後よこそ
 無佛論もよかるべしとあり一かば張商英默然として詞なくこれより心よかけて一切の經論を讀漸
 く儒道佛道一致なる事と辨へ大ひは佛教を扶たりとせき我ころみよ些これをいはん斯天地の始
 終りを佛は成住壞空の四劫とて無量萬々年限り知れぬ劫を佛の邪説の邪康節は一元十二萬年よて此天
 地は燬すといふ佛は三世を教へ儒道には一世を示す其説とてに大小あるは其道も大小あるゆへ
 なり譬は野蠚といへる虫はその朝生れてその朝直も死す世も明暮ある事知らず又蠚は夏生じて
 夏終る世界も春秋あるを知るに由をし周公孔子の忠孝仁義を教へて儒道といふも釋迦牟尼世尊の
 地獄畜生人間等の十界を立て佛道と教ふるも唯夫一尺と一文との長短の差別にて其教法もとより一
 あり天地の間も二の道なく聖人に二の教はあかるべし我が佛門に不殺生戒とて物の命を取ざるは
 儒道も示す仁なるべし不偷盜戒とて盜せざるは護を守るなり不邪淫戒とて道ならぬ婦女を犯さぬ
 は神なり不妄語戒とて人と欺き偽らざるは信と云べし不飲酒戒とて酒飲ことをいましめたるは本
 心を失なはざれと教ふる智もあらずや君が仁義智信の五常も我が殺盜淫妄の五戒と別あるも
 のと思ひ給ふや此五常五戒を持て身を慎むは戒あり志し善道にさだむるは定なり此二法を辨へ
 たるは智慧なりこの戒定慧の三學は身を修め家を善ふ直道の根本ありされば五戒三學を修行する

人家より一人あれば其家十人よく治り百人これを行へば千人和順ならん此數千萬人よ及さは百萬の
 人おのづから睦し争ひ家より息刑罰國よすくなければ國を治め天下を平かよするの道外に求べから
 ず法華經第六の卷には世を治る語言一切みな我が正法なりと佛は説たまへり先生の木業と立給へ
 る儒道はもと我が佛法十界のうち唯人間一界の教もしてそれも佛の道なりとせ給はて在すに
 やと齒よ衣きせぬ物語り大學三節能本は袴の側に手をさし入れ默然として始終をきつてありける
 がこれより志を佛乘に運び儒を教へ佛を學び魚と水との交りも後年鎌倉より再會し大士の化導を
 扶つ、其身も剃髮して法弟とあり家さへ轉じて寺とあり比企が谷妙本寺本巧院日學と喚れしは世
 にも不測の前縁ありけるかくて蓮長師はこの比企氏の親しかりける冷泉家またよりて我が日の本
 の教ある敷嶋の道をきかばやどその絆を能本に語給ひければ其は易き事なりとて能本も案内せら
 れて冷泉家を尋たまふ今の冷泉爲家卿といふは定家卿の御子よて代々歌道の名家なりそのうへ
 去つ寶治二年勅命もて續後撰集といへる歌書二十卷と撰びて秘蔵もあづかり給ひしよりいよく
 其家かやきて學びの門人は八百日ゆく濱の砂の數多し蓮長師は播磨の杉原十東よ宇賀の混布を
 取そへつ學ばかりの路の卷僕夫もたら一つ、式禮正しくおとさひ給ひければ爲家卿は柳さび
 の立鳥帽子よ縹色の水干を着し立出て面談しその志の淺からぬを祝し喜びつさて宜ふよう我が敷
 島の道といふは天地の成の隨意直る人の心を和として萬の言の染をいひいで、尾上の松の霞よ
 咽び谷の柏の風よ嘆ぐも皆ろの調べに協なる神代のつたへ賢きも初學初心の輩よ唯その道を語

るとも甘辛と味ひの嚼するのみ其身も益あし直なる道の味ひはみづから嘗て知よは如じ皇國學
 は我が國の古き書類を讀こそよけれとまづ古事記神代の卷を取りて、授けるそれより蓮長師は日
 よくこの許又立入て古書をもを問明らめ和歌又は奈良の都まで古言たゞしき萬葉集神代久しく
 傳へてしそのてよをはを初めとして秘事多き數々まで心盡し學びたまひけるに爲家卿もその俊才
 の器量を感じばせしが又和歌と認たる筆を見そはし此僧の才學といひ又その手蹟の妙あるこ
 と道風空海佐理行成卿これを本朝の名筆とつたへよび吾が家にも其筆跡は藏し持りしかるよ此僧
 の書法の絶妙なること彼の四人も驚るをもをさく劣はあらぬかしと舌と巻く驚きつこれより爲
 家卿は深く師を尊敬し文庫も秘たる歌書のいろく取出て其表題を師よか、せ深く秘藏せし給ひ
 今よ其御家に傳へけるとさんこの頃蓮長師へしばらく暇と見合東寺に遊び給ふ此寺は山城國紀伊
 郡よ屬一秘密傳法彌勒山教王護國寺と號て嵯峨天皇の建立なりといへり此寺の法華堂よ眞廣法師
 といふ僧ありて一度師又相見てさきりよ其智徳を慕ひ厚く交り尊敬大かたならず有けるが此眞廣
 の紹介よて東寺仁和寺の學室よ入り眞言よ小野廣澤の二流あるを大概これを學び給ひけるとか
 や

眞廣法師は此よ其縁を結び後弘安四年辛巳の春老林を杖よ扶けられ遠く身延山よ登りて本門の
 大成をうけそれより法華經一千六百二十部を讀誦せり大士滅後は日朗聖人よ法を閉常よ經を讀
 て本化の宗を修行す其東寺の法華堂今よ我が宗門の一寺と成て成就山法華寺とて靈跡を殘せ

一日蓮長師東寺の法華堂におはして眞廣法師の懇望にまかせ法華の開經無量壽經を誦讀なし給ふ
 に眞廣は柳椹を柱らせ頭を低て其梵音をき、すましたる折油の小路なる淨本の尋來てその微妙の
 韻經よ會釋も遣れ竹縁に膝り揚り共よ聞法の縁を結びけるが御經終てさていふやう今日は川筋あ
 りてこれより直に天王寺よ往はべる御師の望をもかねて其侍寮へ頼附たれば定めて古き書類も取
 いたして世つらん障あくばあそびがてらに往たまへ御伴一まいらせんとあるよ師も悦び給ひ御身
 の用の妨ならず伴ひてよとうち運て淀川づたへ難波なる天王寺に趣き玉ひけりみれば津の國
 東生郡よある古梵刹よして用明天皇二年聖德太子みづから瀬河の館よりうち向はせ給ふ時白膠木を
 もつて持國毘沙門廣日増長の四大天王を刻み怨敵退散の冥助を祈り物部守屋を誅戮して此寺を
 造立し四天王寺と號す日本國佛法最初の靈場にして西の門よ大鳥居をたて高二丈五尺額は小野道
 風の筆よして釋迦如來轉法輪處常樂樂土東門中心の十六字を四行よ書し蓮長師は此を仰ぎ見つて
 の寺よ入り敏達天皇六年百濟國より始て渡りし經論又聖德太子手づから書たまひ一法華勝曼羅摩
 の三經の註釋はじめ前多の書籍と引見し終り京都よかへりたまふ路のゆくてよ佐女半の八幡宮
 よ參詣し京都より比叡山よ歸り横川淨光院よひそみて、專天台の摩訶止觀を讀智者大師の己心中
 の法門を了解し天台は藥王菩薩の後身傳教は天台の再興なる其法門の次第古今御歩の妙説あるを
 悟り給ふ然るに此叡山は宗風乱れて諸派よ別れ神那流慈心流安海流安然流を互ひよ其流を争へ



圓宗守護
の三十番
神敷山小
影向



ども龜の甲の毛の長短兎の角の有無よといふ足ざる論あれば更取背たまはず唯傳教大師の
 正義を求たまふのみこれまで數年諸宗よわたり一切經の披見さへ既に三度及び釋尊の正脈を
 御手よ握り末法の要法御心よ居たまひ恰も須彌山の金輪際より湧出たるが如く百萬の外道も
 つかふべからず無敵の魔軍も犯し難し抑も一代聖經よ法華經のゐるハ天よ日あり國よ王あり家
 あり人よ魂あるが如し如來出世の本懷は唯法華一經よとゞまれり又此法華經に二の義あり一
 は迹門二は本門あり其迹門法華をば佛藥王藥上觀音等迹化の菩薩を召て正像二千年の弘通を
 許し又本門の法華をば上行等本化の大菩薩よ讓り末法五濁の今と救はせたまふ經文明白なり彼
 の迹化の藥王藥上等は既よ天台傳教等と生れて法華迹門を弘めて和漢の兩朝よ弘通せり今末法に
 入ぬれば其天台傳教の迹門の經法すら猶去年の曆よ似たり御經よは後五百歲中よ本門の法華經
 廣宣流布すべしと説給ひ天台大師もかねてこれを召知て後の五百歲遠く妙法に沾さん言ひ傳教
 大師も亦法華真實の教は必ず後五百歲よ流布すべしと正しく御筆を染て書殘し給ひしされば今
 その末法第五の五百年彼の神力品の附屬を受給ひし上行菩薩出現し給ふべき時節到來せり我身不
 肖なれども時を計り機を考へ御經文よ任せ上行菩薩に先達て此大法を弘むべしと心決して磐石の
 如し昨日よ今日ようちつゞき朝教起て沐浴し開結あはせ御經十卷讀誦まします其うちいとも妙
 なる異相の御神杉の折戸の際よ坐し御經聽聞なし給ふよ日に一其影向の神像かはるよがそれを
 不審く思召いま二十二品屬藥品をよみさ一御掌を合せ南無と唱へて刊をな一毎日よいませ其方

々はそも誰やの人よ在すとぞ尋給へば彼の異人恭しく體をな一我等は法華守護の三十番神ありと
 の日本を本土として跡を垂たる神々の其むか一靈鷲山の佛勅をか一こみ當具奉行と懸して誓違は
 ず末法よ御經守護の爲よこそこゝに影現はべりつゝ聖人を守りまぬらざるなりと右の御手を揚給
 へば不測やその指尖より縷々として五色の雲を起し霞よあらず霧よ似ずそが中に熱田御前廣田の
 神々を始として吉備明神よいたるまで整々堂々として天津空なる星の如く居並で異口同音よ斯人
 行世間能滅衆生間と讚歎な一たまひける師は泰然として謹み給ふのみ側ある料紙現をかいと
 りつ三十番神の御名を記しとゞめ猶法樂の心して残りの御經讀誦なし卷第八にいたるところ禮を作
 つゝ神々も返さ給へば萬字よめぐる多摩羅婆の香の煙の薫るのみ一室はさらん寂寂たりこゝよ
 いて其影現の神像を拜見のよ一書工を雇うて繪かゝしめたまひけれども輕忽一く世よは傳違な
 りけり此大士自筆の三十番神の神號は今駿州沼津妙海寺に傳來し又神像の高軸は甲州休息立正寺
 の寶藏に現在せり誠や權衡をもつて物の輕重を定む人これを辭ふべきや墨繩をうつて其曲直をた
 ます世よふれを挑者あらんや唐に天盛我が朝よ傳教此兩大師ひとたび出世ありしより經論の輕
 重諸宗の曲直たちまちにあらはれ古往今來誰か異議を述る者あらんされば遊長師は十年餘りの
 春秋をこの版山よ送り給ひ今年建長四年寅の冬傳教大師の御廟よ報恩の香花をさゞげ山王權現に
 正法守護の神徳を謝し奉り數年三塔よ骨肉の交りをな一たる學友よ残りなく暇を告給ふよ妙海師
 は取譯名殘を惜み素絹よ縫べき料ありとて加賀絹一匹よ別離の涙をそゞぎ馬のはなむけにぞ成給

ひけるこれより運長師は京都に出て年頃日來淺からざりー淨本がもと又音信歸國の事を告たまひしに夫婦は驚き餘日もあらぬ冬空の雪催すすきのふけふ御出家の御身よはいづくも假の宿なるを伺いそぎ給ふ事かはと其誠實よとめられ振分がたき旅の袖今年はこゝ又新玉の春をむかへて尙寒くさゆる日影にうち立たはふ淨本夫婦はとゞめかね美濃上品の袷衣綿の帽子よ足袋手巾城殿の末廣取そろへ未消残る雪路も情も厚き温草鞋こゝろづくして俄別を受おさめつゝ暇を告心いそぐは法の爲世よ鍛たる鐵石心本國安房よ立歸り身命を三寶よ奉り此法華經を弘通せんと今日九重よさく花の帝都とあどに見る一つゝ霞とゞも又打立て吾妻をさゝりて下り給ひけるこゝに伊勢天照皇太神とさきこへしは日本開闢天照しませず御神の宗廟よして人皇の始め神武天皇より五百三十餘年の間は禁庭の内天子の御座近く崇め祀りたまひーかぞ十代崇神天皇の六年神と同座なるとあそれみ給ひ始めて御祠を和州並縫の里よいとなみ内裏にいませし神林をこゝよ移し祀り皇女豐鋤入姫尊をもつて神よ事しめたまふ後大和媛尊これよかはり神廟よ事ふれより神勅に任せて祠を遷し改めたること十四次垂仁天皇二十六年勢州渡會郡五十鈴川の水源よ嶺座あるべきよー神託に依て神殿を造營す今の伊勢の宗廟これなり運長師は道を伊勢よもとめ間の山淨明寺といふは天靈宗よて此寺の住僧は飯山よての知己ありければこゝよやどりて旅の裝を解神廟よ詣し給ふよ神路山奉喚子鳥よびつれて吹神風ものどかなるみもすそ川の水清み移る八千代の若翠杉のむら立森々と神さびいます廣前にぬかづきて神拜終り御經取出いとも靜に讀誦し法施よ時をうつし給ふ四邊

しづけき神殿の扉を閉て鈴の音いともかすけく鳴々とひゞきつゝ拂よかけし神鏡より坂と音一て輝く光明樹々の枝葉も神垣も同じなる紫磨金色内外へたてぬ八百萬神も納受と見えよけり師は此奇瑞をかしてみつ神前近くすゝみより傳さく天照皇太神は本地久成の釋尊よて迹を東海秋津洲よ垂給ひ衆生の利益百萬餘載正像二千の其間は法華蓮門をもつて法根とて威光精力を増たまひ今末法第五の濁世よ當り諸經の利益盡滅たりとされば皇太神も無明濁惡の世よ堪たまはず此迹土を捨て本覺の妙土よ歸り給ふらん此事御經文に於て運長扶よりこれを知れりは數ならぬ身をれさも佛勸よまかせ法華本門を此神州よ弘通して末法當來の間をてらさんとす神慮いかよとありければ大地六變よ震動せりこれ此御經末法よ流布すべき地動端とぞ知られけるこれより靈時淨明寺よとゞまりて日よく神廟よ詣て法樂の讀經いと尊く聞えける時に又妙見大菩薩の示現も有て今に其地に妙見明の名を殘す皆これ正法の不思議とぞ思はれける間の山淨明寺よ大士とゞよ參籠の時手づから彫刻し給ひしとて一遍首題の本尊との下に建長六年甲寅四月十六日日蓮敬白と十五字を石面よ彫附たり案するよ宗旨建立の翌年録松葉が谷よ在して天照太神法樂の爲書認給ひしを後の人石よ彫てこゝよ建しものとぞ思はる諸傳の說又冥應論等その理當らず

神風や伊勢の社の威應奇瑞心よかけし注連繩日も稍永き春霞翅はやめてゆく鴻雁の古郷いそぐ旅の友日敷かさねて房國の彌生の空も十歳經歸りて見ればいとけなき雅遊びよ我袖と門の柳もや

、老て茂ると宿の目當又蓮長唯今歸園せりとき、て次郎は微びつ母梅菊は取分て轉が如く走り出
 草鞋どかし洗足す、めそれかれと旅の疲れをいたはりて積る話は四方山よ今を春都と出出る草葉
 の數も及びなき其喜びは知られけり父の次郎は心づけ何時〜までもこの宿よとゞめまほ〜う思
 へども道善御坊もさいつ頃より蓮長の安否は聞えはべらずやと厥を幾度か所化僧や童兒とおとし
 て問たまひきいそぎ御師に見えあげ厚き情と報てよといそがせば蓮長師も恋をえてやがて清澄よ
 登給ひ諸佛坊におとなひ給ひたるよ師の道善は雀踊し席も居らず喜しみて年月ながき學問にそ
 の憔悴もみえざるはとて、喜でうち笑ひ又修行にも程のあれ老たる我に久しく物を思はせたるは
 腹た〜しとて阿もしつ尙時〜らぬ袖の露しばしはれまはあかりけり蓮長師は戀戀よつ〜んで在
 すのみ事を委細に述べたははずもしその話の佛法の事よ移らんとすれば色を柔げ詞を輕く〜嶽山の
 峯は高かりき高野山は寒かりきと他の話よ紛らして更に佛法の事にわたり給はず師の御坊も亦戀
 愛深くてさのみは修行の事も問給はず相互よ心慰む物語に時を移し給ける又同寮の法兄弟圓密淨
 顯義淨等始としておさなき離僧兒達よでかはる〜無事を祝しぬ又師の坊は人を馳て次郎夫婦よ
 悦その〜給へば次郎重忠も使と〜もに山よ登り道善御坊よ式禮し淺からぬ慈恩と謝しはべるよ道
 善は手の舞足の踏をしらす庫裏の司を召換で蓮長はじめ其が父も亦院内の僧ども〜も些の應聲よ
 あれかれと指揮あるよ頓て折敷の木椀よ豆腐の羹、黒煮の蔬よ〜持出る並鍋は備後酒の味よ似
 ぬ其片白は許しても肉はゆるさぬ差酢の和布雁裘の帷茸とりす〜め過飲一座の賑はしく飯後の菓

子の碧餅に糝栗をさへ添さしつ最十分のもてな〜よ春の日影もたそがれたれば其名次郎は道善よ
 厚き造作の喜びをの〜又蓮長師を見か〜りて明は暇を貰ふて來ませやといひさ〜て足下暗き夕黒
 を送る奴僕松火よさし照させて高低と麓の方よ還けり蓮長師は翌の朝御坊よ言て山を下り小湊
 よいたり給ひしよ慈父重忠機嫌よく師を側近く招きよせ昨師の御坊の我にひそかよ宣給やう此山
 に僧多く我法弟あまた有されど我山と讓べき〜此蓮長よ限るかし我も六十を超たれば程なく寺を
 彼はゆづり心安かる身とならば我身の供侍御身達も老の特怙よめらすやと語たまふを聞よつけ
 れまで長き旅住居一處不住の癖つきて又鎌倉よ往もやする京よ上やしぬらんと御師も我も心よか
 かり待かしこれより心かちつけて彼清澄の主となり人も仰がば其身の立身登座のみか我々夫婦も
 世の人よ善兒持たりと羨まれ此世後の世安かる〜しよ思さすやとありけるに蓮長師は黙頭し
 ばし思案に沈み給ひけるが武藏鎧にあらねどもさすかよ懸ておもふよ書で果べき事ならねば思
 ひ切て宣やうわれこの歲月釋尊の御經を幾度か拜み奉り〜當時日本に弘まりし念佛真言禪律の
 諸宗の祖師よ誤多しその誤を傳へもて其とも知らぬ八宗九宗堂塔沙門のありさまは佛法繁昌と
 見ゆれども更よかひなき脱虛の恐ことよ佛の入滅より正像二千の時くれて今は末法第五の闍其を
 照すべき御經は法華經よ限るある佛の教を身よ受て妙法の蓮華を一天よ咲せんす大願すてに決定
 せりたとい八宗九宗にあらざる、とも其をばさらよ念とせず強盛に説の〜て世を救ふこそ末法の
 本因妙の立行ぞと御經よは見えはべりぬと詞しつかに語りたまへば母梅菊は法衣の袖に取纏厥を

あし、とはいはねども道善御坊の深情と慈父の今の詞とかれこれを思合せて餘の事よ心移して
 給はるる女の胸の山の井の深きものから濁いで夫婿次郎を勤つゝともはその弘通の志を障給
 ふあさよし、とも蓮長師は恭しく手を支へ元より出家と成給ひしは衣食も富で位高く榮耀と求
 むる爲はあらじ父母の御手を離て廿一年千辛萬苦も法の爲世の爲めせし學問修行その効験で御
 經の大小權實顯密の諸宗の義理を直下に見る一身をも惜まず末法の衆生を救ひ得させんと身にも
 不應大脚も佛の教是非なしと心定めてあるものを今父母の障たまふはこれ唯事とも思はれずむか
 し唐の天臺大師法華圓妙の觀念を凝して在ければ父母左行の障より涙ながら其行法を妨給
 ひ一事ありこれを御經よは惡鬼入其身と説給ひ蓮長いと一と思召御兩親の御心よ惡鬼夜叉のつけ
 入て慈悲の詞の劍とかくし今正法を妨なすと覺ゆるが熟思しかへられよ受がたき人界に生を
 うけ値がたき佛教よ遇奉りもし今生を厭止なばいつの世もか菩提を得てん生々世々無益と捨たる
 身の骨の積ば山とも成ぬべし其中よ佛法の御爲に捨たる骨は指一本だにありともめえず衆生が聞
 恩愛別離にそゝきたる涙は大海の水より多からるも一其うち佛法の御爲よ灑し涙一滴もあるな
 らばかゝる凡夫と生はせじ今度優曇華の時を得て身を傷ひ命を捨て佛法と修行一御兩親の御菩提
 をたすけ一切衆生を救はんこそ出家とありし面目ならんと稚幼ときより何ひとつ鬼の毛の尖の露
 はども親にそむかぬ蓮長が本懐大事を身に受て篤く教導を給ひしよ慈父次郎も稍顔面のいろ
 解て善らぬ事を爲兒とてそれも定まる因縁あるをまして廣る大千世界人も渡さぬ善海に法の御給

と身とあして多くの人と救べき平等慈悲の心をばいかでとやめん止なと妻梅前をもけ給ふよ
 り蓮長師は兩親をふり拜みその御詞こそ廣宣流布の大願も満足すべき初なりと御歡喜の色見へ
 て清澄は踏山なし給ひけり今年の春も稍寝て卯津木花さく夏山の茂る樹間の清澄にこそ澄して
 思すやう今年正しく如來の滅後二千二百一年も相當る天は一を以て清く地は一を得て地王公は
 一を建て天下を治たまふ況我が大覺世尊一佛衆を以て一大事因縁と説一塵淨提の一切衆生の爲よ
 一成道を示したまふ一の數縁ももつて塔中別付契當せり此時を過すべからずと卯月末の二日
 より一室よ籠り香を焚て大禪定に入給ひ時に御齡三十二歳建長五年四月廿八日東雲の空はがらか
 り旭日東天にかゝやき登り給ふ時安祥に三昧より起て念珠を御念ふ懸ながら旭日よ向ひ高懸る南
 無妙法蓮華經と十遍ばかり唱へさせ給ひけり其山々の梢吹夜半の嵐の音絶て今朝の高懸る萬代と
 唯一聲の松の音これぞ二千二百一年の昔大聖世尊より上行菩薩よ附屬ありし一呼百諾の金育末
 法相應本因下種の題目とはいふふあり賢くも此本化大慈の日輪今東海にさし登り平等大慈の光明大
 千界を照し盡來際の際を除たまふ始として誠よ法運開闢の時節とぞ思はれける此日兼て人を馳
 て觸たりければ午の刻頃より籠の男女檀越の人々別て當郡の地頭東條左衛門景信も若侍も下役
 召連忍びやかま登山す南面の本堂よ維も得立ぬ參詣は今日しも常山の蓮長坊數年京學の功績で歸
 來て此山よ始て法を説かればいかなる尊き事ありや都學びの法門を開ましものとかましく波羅
 婆梨多耶の真言と南無阿陀々の念佛よしばしは鳴も止ざりけり蓮長師は出堂の太鼓をうたせ徐々

と高坐よのばり焼香散華に心を澄せ四弘誓願を唱つ、法華經の紐を解第六の卷を讀あげたまひ顔色を和氣梵音しづかよ宣やう我年來一切經論よ巨廣く諸宗を學びたり八宗十宗見ざる事なく聞ざる事なく大集月藏經の第九の卷を見るよ如來入滅より五百年の間をば解脫の時とて單に成佛とる人多し又次の五百年をば禪定の時とて坐禪工夫を凝して得道する者多しこれまでを正法千年といふ又次の五百年を禪師の時とて能御經を讀修行して得益を蒙る又次の五百年は造塔の時とて塔伽藍を造りもて利益を得べき時節なりこれを像法の千年といふ此二千年過終て後五百年を白法隱没の時と名づけ如來一代の聖經利益一切よ盡果て一切衆生成佛の道たえたりこれ末法萬年の始あり其うへ正像二千年の間は本已有善とて佛よ成べき種を兼て釋尊より植置れたる衆生あり今末法よ入て二百年當世の衆生は本未有善とて本より耕さず耘らず種を植ざる亦凡夫也抑佛の種といふは妙法蓮華經の五字あり此事經文よ明白なるぞよ然るを淨土宗の法然は少乘下劣の念佛を弘むるとて撰擇集といふ書を筆て其法華經を捨よ閉よと罵り闡宗は放外別傳とて法華經を貶をり真言は天に二の日あく國よ二人の王あきものを大日如來を本佛と立て釋尊を落し法華は大日の履取よも足らずと謗り律宗は二百五十戒三百戒を算へ持て大乘法華の經王に隨すかゝる諸宗の邪流をば法華經第二譬喻品よ佛説て宣はく佛の種を斷す者なり其人命終て無間地獄よ落て無量劫にもうかふ時なかるべしと見へたるぞ耳あり眼あらんものはこれを見聞て邪正を辨へよ念佛は無間よ墮る惡法禪宗は天魔の眷屬真言は國を亡す邪法律宗は國賊ある事敢て私の詞よわらず皆御

經文よて見定たり諸宗無得遺地獄の根元法華獨一の利益さらし疑なし時知鳥の不如歸今は雲井に聲高し山田の早苗植ぬれ實のりの秋よ後悔する時は今法華經流布の時我はこれ如來の使なるはと弓手よ御經たかく捧げ妻手よ高座を打て説たまふよぞ一會俄よかしましくあふ勿味なし彌陀を謗りおのが宗旨の眞言まで罵よまかせて首罵る狂僧よあたら耳を穢したりと口々よ惡口し或は怒り又は笑ひ珠駁を輪組てさす腕と屈まる腰に又添て最堅來よと牛は牛馬は馬運いく群か堂を蹴立て蹄りゆくこれ本化の弘通末法下種の始なり就中圓智坊とて此山よ年を拾ひし老和尚澁庵たる聲怒らし我も法華經を信じて讀誦する事五十年又三年此方は一宇三禮よ書寫をもしたれ何を痴迷てさばかりよ法華經を信じたりとて諸宗を惡口はゆるぞやたれかある其狂者の蓮長を疾挽出せといきまきて老のかひなき拳を振り疎よ殘る齒を咬でいとかしましく叫喚けり地頭の左衛門景信の諸佛坊に突と入て道善御坊よあまの爲跡を見そきはしたるか他の事は角もあれ御師の事といひ此地頭景信よ殺意無禮の蓮長奴獅子の高座を引をろし切て捨るは易けれを無垢清淨の此山の靈地と穢すをかそれ見て其場は免一假たれぞか、る不法の痴漢を其ま、假ば地頭の不念寺門の恥辱我請受て連戻らん許したまへと有ければ道善は恐懼公の怒も道理ながら狂無の蓮長をいかよせん其儘この坊に預たまひね能言懲して正氣にかへらば今日の鹿忽は我より能んとひたすらに宥られたる鬼魅さしもの地頭も餘かたなく類ふくらしして立出ぬ道善坊はひたと呆れ蓮長師を坊よ招き性根の強きその耳に老の廻らぬ舌ともていふも無益の事ながら十二の夏より手よ育て見處多き法弟

なりと末頼母一き年月も却て後のあたとなり此寺をさへ譲へき心辨も水の泡消も入たき我が心東條左衛門景信が刀の錆になれかしと此春秋を願ひはせじ今日の心をひるがへし改め難きとならば此山には置がたしいづくへありともみをかへ願ふは東條景信が眼に當らぬやう心をつけよ此教訓の身に一みて先非後悔せしうへは疾我坊まかへりこよと幼稚者を懲すが如く懲めもしつ叱もしつ夕日さし入道戸口送るよしなき師の恩を後見あして性空に寝林もどめて立騒ぐ花鳥時鼓の下の路さして降給へば誰ともわかぬ二人運後を慕ふて追來よぞ近くなるま、斜視ればこれ別人あらす法兄の淨願義淨の二人よぞわりけるともよ師より向今車裡のしもへの語ときくよ地願の怒尙解す山を下らば待伏て切て棄んと半途の辻堂よ待どかきく此道をくだり玉は、いと危一さすれば小湊の親のいへよは猶往がたし我々がよき隠處を思つきたり此方へ來り給ひねと後と前とよ淨願義淨師をいたはりて廻徑のけはしき間道うちめぐりその夜の闇よまされつ、當郡西條の華房の蓮華寺といふ真言密寺よ身をかくし其難をのがれたまふ不測や此經を末法に弘通せば刀杖をもて恐人よ追れ又常住の寺を擯出されんと御經よ説れたる刀杖遠離の法難は今日よ、よ現前たりさはあれ又諸天善神晝夜よ守護あるべきよし五の卷の御經に違はず今宵危き劍難を兩人よ救はれたるも此將奇特の經力なり

華房の蓮華寺今よ真言宗よて現在す又淨願義淨の二人は後年大士の化道よ受戒ハしたれども其頃大山の住職にて綱位輕からざるをまつて名利よつながられて其宗門を出ず然れども内心深く其

宗義を信じ淨願は日尊義淨は日在と呼弘安元年大士氣を染て本尊と出しこれを授與ありことと前書よ見えたり

かくて華房蓮華寺の住僧青蓮坊の方よ在しけるが此華房の里よ近頃阿彌陀堂を建立す邊郎の地なれば開堂供養の導師よ立えき人なし幸ひ蓮長御坊は南都高野よ學びたる希代の學者なるよし對傳ふ此堂の供養をつとめ村の男女に念佛を勧め給はれと給も句ふ新造の御堂せましと押合つ師の説法を待處よ香染の袈裟拈揚つ、講席よす、み御經開て宣やう釋尊一代の説法大よ分て二とをす華嚴阿含方等般若の十餘年の經々は權經とて時を待問の權の方便又後八年の法華經こそ如来出世の一大事これを真寶經と名付あり其は私の義よあらす四十二年の説法終りさて佛の宣やうこれまて種々よ説法せしは皆方便よして未だ真寶と願はずとさ一きつて斷り給ひたる御經はこれなりけりよ無量義經説法品を取いて、未顯真寶とある其文をさ一示し其上彌陀は西方十萬億土他方の佛に在すなる此土有縁の釋迦世尊法華經第二の卷よ今此三界は皆我が有あり其中よ衆生は悉く我子なりとあるものを我が親を捨て他人を尊むを道といふべきかさればこそ念佛等の御經はあさましくも四十二年のうち方等部の經よれば名有て實なき極樂往生願むかひなき阿彌陀佛その理も諦すして念佛開祖の法然御坊煙のやうある阿彌陀を捉へ本佛釋迦をふり捨よと人を惑す地獄の罪業たどへば家よ飼れし狗子の下男奴僕よ尾を揺て主人を見ては却て吼る賤きに狎尊を恐む狗の真似する諸宗の元祖この事を大盛大師は狗作務に狎たりと釋一給ひしぞと説かる、を群衆の中より豈

かけて佛を誘る狂象の北賢僧を引出せ打よ擲と伏鉦の槍木を杖よ立騒ぐ蓮長師は斯こそあらんと
 高座を退き蓮華寺へ立戻りたまへども今は此寺へも入奉らずさらばこれより鎌倉よ立超て彼の地
 よ法を弘めんと心決して小湊よいたり兩親よいとまを告んと昔信給ふに前日の不興よは似もつか
 ず次郎夫婦は門口まで出迎上座よ押居鎌倉に弘通あるべき其志をも開終りさて宣やう前日の
 細々と示されし教訓よ我を折て能々思めぐらせば語るは今が初若菜と一若き時我々夫婦ある夜の
 夢よ云々の不測の事を見て一より御身を懐妊なしたるも思へば遠き夢語それにつけても今日此頃
 諸宗の祖師も及びる道に心をかけ橋のかけて弘むる御經あるを老前近き身を忘れ難波の浦のよ
 しあしも我が子と思ふ煩惱の今生後生の罪ふかじと母もろともよ觀念しけふより有無の乱變心よ
 剃て菩提に入御身が弘むる妙法の妙の一字は未來まで我が子の受し紀念ぞと此を頭にていたきて
 蓮華よ捧日輪の夢の奇瑞の二を取我は妙日其母は妙蓮と法名を定めんと持佛の前よ掲ひしぞ御
 身が鎌倉よちももきて後五百歳の御代の奉法運めたく開く日を指扇かぞへて待すかしと涙なが
 らよ宣よ子師も諸ともよ露時雨うれし涙に袖ぬれて今日御兩親の得脱は衆生教化の始あり又御
 夢の吉瑞とて御名と妙日妙蓮と聞うへからは慈父の日の字と慈母の蓮の字と此二字をもて我が名
 とし今日より日蓮と改名せん明なること日よ如ものあらんや消きこと蓮華よ勝ものやあるされ
 ば此二字は取も直さず父母なりこれより鎌倉よ立超て尊無過上の立行を開き佛勸の如く此法華經
 三千界に流布するあらば我が力用よあらすして其は父母の功德ありと三諦一身三人の親子は淨き

筒井筒盛 桐の香をこめてけふ汲初る法の水日蓮大士の懐中より御經を取出て今身より佛身よ至
 まて能持南無妙法蓮華經と慈父妙日慈母妙蓮の御領よ御經おじめて授たまふこれ我が宗門よおい
 て本門受戒の始なり父母御喜またへ給はず昨日は我が子今日よりは未來永劫惡業を救ひ給はる大
 導師布施の品々それかれと取揃もて供養しつ門外よ見送る老夫婦これまで涙し愛別の身を知雨よ
 ふりかへて今は嬉しき歡喜の涙心直ある一筋の門田の畦を高聲よ御題目を唱へつ鎌倉さして發
 足ち一給ひけりさて日蓮大士は五月の中旬船の便を求つ、相摸の國へ渡海せんと名古の海邊よ
 趣き給ひしよ此程梅雨を吹送るるの北風よ浪高く往來の船も道絶て困果給ふ所よ平郡泉澤と云里
 よ權の頭太郎といへる人有けりよと伊勢の國の山緒ある人なるが久しく此地よ住てありしが不圖
 大士よ相見し一樹の蔭の宿その弟次郎三郎ともよ大士を敬つ其化相を蒙るよ思はず日敷を
 重てし大士は此頃渡海なす風の日和を待わびて後の山に翠沙り海上はるかにみはたし八大龍王護
 念の爲靈時御經よみ揚給ひしに龍神納受やまししくけんこれより空晴風穩になりける此地の里
 人その奇特を言傳へ地名を南無妙法谷と稱す今は略して南無谷とよびおせり泉澤權の大友兄弟そ
 の母の爲よ法華堂をいとちむ弘安二年日念聖人をつかはして開堂して寺をなし名付て成就山妙福
 寺といふ妙福は其母の法名よして大士自筆の本尊を授與ち給へり斯はこれより廿六年の後の事
 あり其前經ありし古蹟は法華塚とて今よ現存せり

南無谷妙福寺の開基日念師は松木坊と號しもと天竺博學の僧あり宿縁有て真間の日頂聖人に値

て改宗し又大士を拜して別頭の秘法を受命し依て此寺と草創し大士を開山と仰ぎ其身は二世も
 居又日蓮聖人の舊恩を忘れず寺をば真間の末寺とせり
 借も日蓮大師は風なき海平にして船出をいさむ湊口と、又便船を求めつ、そよ吹南風又帆片帆
 取表楫又櫂かはし船路やすらに相摸ある二浦郡深田の浦米が濱に着船し給ひける此浦の浦は遠淺
 くて船を岸又は寄がたし砂まさ、はる船も大士は法衣の裾を掲持已に下立たまふを見て流藻拾
 ふ海人が走より我渡しまめらせん御裾ぬらし給ふまでとて大師を背負ひ奉り片山岸の岩根までうつ
 敷波の荒磯を渡しまめらせしと大師その志を喜つ見かへりたまふ其男の娘も血しほの流る、
 を驚きていかよ爲しやと問給へば榮螺の壳に踏つけて其角又踵を傷はべるはと應ければ大士憐み
 たまひ持る髪もあらざれば是好良藥の御經取出夏の日影の潮照影と一のく濱鹿鹿の袂間立よ
 りてしばし御經誦誦をし西をさして立去たまひける不測やこれより此磯も生る榮螺の角折て今
 の世までも米が濱角を榮螺の奇特をば此地を尋て知ぬべし後年こ、又寺を建その靈跡をさし示
 す猿山鹿本寺とぞ聞へける大師のこれより山路にか、り心無の里より守殿明神を遙拜し多古江
 川を渡りたまふこ、は三位維盛の御子六代御前の討れ給ひし處にて流る、川を最期川とよび傳へ
 其御墓も青葉かくれに見へ渡り誠は一朝の花と時めきし平家一門のなれの果いと哀れと思し出御
 題目を唱へつ、椽に暗き木下階ゆくて船しき名越坂洞をす山の切通し水無月ちかき此頃の榮き日
 影またへたまはず及る木陰に一掬の水もがなと求給ひしよ岩の間にとくとくと昔して清水の浦

出たり大士喜で御手に結び如以甘露とおしいたゞき咽をうるほしたまひける其味甘くして且清
 冷な類ひ稀なる水ありとて其頃鎌倉五名水の第一と稱し今に名越の道側に残りいかなる早懸もも
 酒ことなく日蓮水と尊稱す大士鎌倉に入て世の体相を見聞あしたまふと思へば此地も遊學せしも
 はや十二年の一昔去る寛元二年執權北條經時鎌倉四代の將軍頼朝公を京都より追登せその御子
 六歳にならせ給ふ頼朝を將軍とあし奉り此幼君の補佐を名とし北條一家我意の振舞多かりければ
 前將軍頼朝公京都に在てこれを惡み北條を討つべき御謀叛を企て給ひける此事はやく露顯し及
 びければ今の將軍頼朝公漸く御齡十四歳あるを謀叛人の子ありとて深く惡奉り相摸守時頼朝與守
 重時の兩人より京都に奏聞し頼朝公を退け後醍醐天皇第一の皇子宗尊親王とて御年十一歳なるを
 關東より迎へ征夷大將軍に任じさらば世の中も事あらたまりて見えよける日蓮大士は鎌倉大町の南
 名越の東の山際いさ、かなる餘地ありしをこゝよ土を均し地を垣め楠木の柱ふり、げく竹垣わ
 たして椽とし尾花刈吹我菴も七堂伽藍いやすさる久遠本果の古佛場大師はこゝよ日と送り經文
 讀誦の外さらば他事なく見えよける大町米田材木座傘町名越この邊の人うはさして彼處よ御經よ
 みすます道徳不思議の傳ありとて尊事と語つたへけるとある大師は鎌倉府内の諸宗門北條一門
 歸依の僧天下の有様世の姿まで心をとゞめ狼の首を出したまはず身を如法堅固にまもりつ、雄氣
 を發ひ在すうち社司大伴と紹介を求め鶴が岡の經藏に入給ふこれは去る建暦元年十月十九日實朝
 將軍永福寺において供養ありし宋本開元の日録五千四十八卷の經經なり此等の事も秋暮てきのふ

の路に置かへる大路の霜の村消し履音しづかにかきとづる、者あり大士唯ぞといらへて對面あるよ
 三十あまりの氣高き法師容貌柔和に小膝を折大士と三禮し奉り我は釈山は修學なす成辨といふ未
 熟の僧よりへるが久しく彼の山に在學すこれまで年頃學びたる天臺傳教阿大師の書類をもつて三
 堂の學者に論議するに法門さらは相合す尙弘く其義理を尊やしし慈覺大師は傳教の法弟よりありな
 がら還て其法流を亂したる法敵ありと見定てその不審を學問に告じかば其元は遊長が弟子よはあ
 らぬやと問れて其は辨へず其遊長とはいかなる人乎と尋しかばこれは近き頃房州より來て此山に
 學問せしが慈覺大師を佛敵法敵と罵るゆゑ夫は傳教を知て未だ慈覺を知ぬありと有論しても心解
 ずそのまゝ、山を退きぬ御坊の問る、處能其遊長に似たるはと問も嬉しくその人は何國にありしや
 と尋しよ無動寺の尊海といへる僧その席よりありて遊長こそ國にかへり近き頃は名を日進と改めて
 鎌倉よ見えたれを風の便よき、けるときし示されて嬉しくも其師は値べ我が胸の月よ隈あす雲霧
 も晴すやはとて山を下り音羽の瀧のおとよきく其名ばかりを知邊まで漸くと、に尋ね得しと其真
 心の喜びはいはぬ色に見えよける大士はその始終開終り不測も同道ふむ菩提の柳わたす效
 のなからずやと此より御側よ在て日々に難難の條々を書もて大士は問奉り大士喜ぶこれを解釋疑
 食を忘れて教化をし給ふよ成辨へ坐よ感涙拭ひあへず幾日もあらで本化の宗流を融得て晴し心の
 うれしさに本門の大戒と受て改めて法弟となり給ふ大士も此鎌倉よ入てか、る學匠の法弟を得玉
 ひし事實よ百萬の加勢を得たる心地して其が父の名を神昭と云よし問召其昭の字よ我が一字をそ
 へて日昭とぞ召れけるこれより水よ薪よ朝夕の炊さへまめやかに立練て大士に事へ給ひける一日
 大士御經半途よ日昭を召れ我弱年よりの志願遂に満足し上行所傳の妙法を四海よ弘むなる若此御
 經を經の如く弘るあらば三類の強敵とて當時の名僧智識第一よ怒を發し上よ騰巻を擲へ上も亦其
 邪正その善惡を正ささ度く嶋へも流しあるひは頸よ及ぶべしと今讀きたる五の卷勸持品二十
 行の偈の文に見えたり御身我が弟子ながらも我よりひとつ齡たかし今日本國中よ充滿たる衆佛眞
 言禪の諸宗この諸經中王の法華經の勸命に背き方便下劣の分際を忘れ法華の利益を奪はんとす我
 是より忠勤を拙て征伐よ取か、り其權門の諸宗を退治し一天四海みな妙法の民となさんとす然は
 あれども敵は多勢我は唯一人あり身命を期とするとも獅子をもつて磐石にうち當るより猶危し
 若我討死をもなすならは末法萬年の群衆を誰かたすくる者あらん御身けふより心を決し日進大敵
 と合戦を挑みいかよ成ゆく事ありとも必ずこれをと願見す信心有縁の味方を聞めつゝいて旗を揚
 られよ共よ討死するも忠又惜からぬ身を存命て再び家を興すこと却て拔郡の大忠なるぞ努々遣れ
 給ふなといと丁寧に宣へば日昭師も涙よ咽び數あらぬ身も法の爲難事を忍び御遺狀よは戻らじ御
 心安かれとありければ大士は満足の色を顯し給ひ日昭師も同音よ勸持品を予讀上給ひける此六老
 僧の第一位大成辨阿闍梨日昭上人とて大士常よ辨殿と喚給ひしは此御坊よずかはしける抑此
 日昭聖人と云は下總國葛飾郡平賀の郷に平賀神附と云者の子也其は福有よして田園に富郷郷よ尊
 敬せられ輕からぬ郷民也兄弟三人にて姉は印東次部左衛門有國よ嫁す又一人の舎弟あり日昭師は

へて日昭とぞ召れけるこれより水よ薪よ朝夕の炊さへまめやかに立練て大士に事へ給ひける一日
 大士御經半途よ日昭を召れ我弱年よりの志願遂に満足し上行所傳の妙法を四海よ弘むなる若此御
 經を經の如く弘るあらば三類の強敵とて當時の名僧智識第一よ怒を發し上よ騰巻を擲へ上も亦其
 邪正その善惡を正ささ度く嶋へも流しあるひは頸よ及ぶべしと今讀きたる五の卷勸持品二十
 行の偈の文に見えたり御身我が弟子ながらも我よりひとつ齡たかし今日本國中よ充滿たる衆佛眞
 言禪の諸宗この諸經中王の法華經の勸命に背き方便下劣の分際を忘れ法華の利益を奪はんとす我
 是より忠勤を拙て征伐よ取か、り其權門の諸宗を退治し一天四海みな妙法の民となさんとす然は
 あれども敵は多勢我は唯一人あり身命を期とするとも獅子をもつて磐石にうち當るより猶危し
 若我討死をもなすならは末法萬年の群衆を誰かたすくる者あらん御身けふより心を決し日進大敵
 と合戦を挑みいかよ成ゆく事ありとも必ずこれをと願見す信心有縁の味方を聞めつゝいて旗を揚
 られよ共よ討死するも忠又惜からぬ身を存命て再び家を興すこと却て拔郡の大忠なるぞ努々遣れ
 給ふなといと丁寧に宣へば日昭師も涙よ咽び數あらぬ身も法の爲難事を忍び御遺狀よは戻らじ御
 心安かれとありければ大士は満足の色を顯し給ひ日昭師も同音よ勸持品を予讀上給ひける此六老
 僧の第一位大成辨阿闍梨日昭上人とて大士常よ辨殿と喚給ひしは此御坊よずかはしける抑此
 日昭聖人と云は下總國葛飾郡平賀の郷に平賀神附と云者の子也其は福有よして田園に富郷郷よ尊
 敬せられ輕からぬ郷民也兄弟三人にて姉は印東次部左衛門有國よ嫁す又一人の舎弟あり日昭師は

承久三年をもつて生る生質篤實としてをさなきより禮義正しく進退度よかある殊に舊籍を改事を好で僧と交り寺に遊ぶことを樂とす十二歳の頃より靜なるを愛一人は應對するを辭はず父昭才智の人とて夙く其宿縁を察して十六歳の時出家せしむ後年叡山と於て奇遇の因縁を挽録倉と下つて日蓮大士の上足となり末代法華弘通の後殿と定られ大士鎌倉府内を退出されし事二十餘度また伊豆と三年佐渡と四年の流罪に處し又龍の口死罪の大難かゝる大士の急難も兼ての約束日昭師は些もこれを念とせず歸依の人々隨身の徒弟等四散し落行べき味方の殘兵を圍め濱土の邊にかくれ住大法將日蓮が法運遂に開くべき時節をはかり給ひしはこれも亦六萬の副將軍木化陣薩の再身とこそ思はれけれ

日昭聖人鎌倉松葉が谷に來て大士の法弟となりは三十三の時よして大士より給ひとつ立超給ふ年華といひ道學といひ智徳圓滿の法弟ゆゑ後陳の任を命じ給ひしも又宜なり我が宗運既も開け大士入滅の後には鎌倉の濱土に歸り師恩報謝の爲心と契に籠り讀經禮讚十三年に及ぶこゝに比叡山の尊海老屈して九十一歳日蓮大士宗門を弘め給ひしより成辨も亦その弟子となり師匠の跡を繼て在すとき、昔なつかしく正安二年の春書通を鎌倉に贈り本門の大戒を受ざるを悔たまふ文牒を見て日昭聖人も此時七十九歳こしかたの空懸しくや思しけん二人の弟子も扶けられ遙々京都に登給ひければ尊海師はおもひがけあき今生の對面と喜びむかし日蓮聖人いまだ蓮長といひし頃鎌倉の旅の舎も初て知己とあり我も昔しは男山盛ある身は張つよく聖人と此北叡山と連來りしも今指折算れバ六十餘年の昔ありと老の臉に涙をうかめ在し世の物語よどりませて本化

別頃の法門を談じ受戒終て鎌倉へ歸けり日昭聖人五十餘年の問法を繼て在したる山井の濱土の雙居の草庵この程越後信濃兩國の太守風間信濃守信昭大檀那と成て一寺を造立し弘濱山妙法華寺と名づけ法弟日昭をもつて住持とす時よ九享三年三月廿六日日昭聖人世壽百三才よして示寂なり給ふ大士入滅より四十三年の後なり此濱土の靈地も怪なく正慶建武の乱に取壊とあり妙法華寺も兵火の爲に焼失なはれ日昭聖人は寶物わづかま惜まかして池上に逃去漸く豆州雲命村と東金山妙本寺を延ていさゝか古蹟をどゞむは後法孫十三代日包聖人文祿年中同國田方郡齋殿村と鎌倉濱土妙法華寺の號をもつて一寺を建立す元和年中第十六代日亮聖人新に今の伊豆玉澤を開基し昔の寺號も倣て妙法華寺と稱し山號は經王山と改む第二十一代一乘院日養聖人といふは俗姓陸山氏にして 紀伊水府兩館の御母堂發珠院殿阿萬の方の姪なり此ゆゑをもて當山これより美觀を盡し諸堂院々として一方の大木山とはなれり實もや開山日昭大聖人の昔し由井の濱土と竹を編流よる瀬沙岸とかき紫め茶根を齎つ、雨路を凌ぎわびてし五十年艱難辛苦の禮法の功德後年こゝも顯はれけり別て尊く思はれけり

愚者は愚を知らずいらざるゆゑよこれと愚といふ賢明哉 本化の肉身日蓮大士去る建長五年この鎌倉より來り今年甲寅の四月廿八日名越松葉が谷の御草庵に天照太神三十番神を勸請し奉り御筆を取て南無妙法蓮華經の七字を大文字に御認有てこれを法體と捧給ひ名越の往還間近ある處よ

高座を儲説法利生の花と雨せ給ふよ去年よりこ、かこに噂の聞えたる事なれば米町辻町の邊より遠近よ語傳へ言繼て聽聞する者いと多し高祖大士は一代の御經に權教あり實教あり方便あり眞實あり又正法あり邪法ある事を説諭し日出ぬれば生かくれ末法の今に至ては法華經の外諸經より利益はあらぬよし懸懸にさし示給ふこと幼稚は乳房を興ふる母の如し一日いかめしく太刀を佩たるひとりの武士八目を憚る編笠深く御衾室の外表に佇立始終聽聞し居たりけるが説法果て等脱乘聖人よいさゝか不審あり如來元來偽なりいつはりなきゆゑ佛といふ念佛真言禪律の經々を方便無得道と説給ふはその所謂なきも似たりとありければ大士笑を會給ひさればとよ塔を建んよは先その足代を細これるを方便といふ大塔全く成就せば足代を取捨るありこれを眞實といふ大聖世尊法華經の大寶塔を遺立せん爲に四十餘年の間禪念佛の緒經の足代を説たまふ今これを世樂るを正直捨方便と御經に見えたるはと説示し給へば彼の武士一ばと默然としてありけるが立て三禮し奉り此程出勤のかへるさに度々聖人の御演説をき、まわらせ何となく御徳の尊はしく今日しも見忍み入るうれしきよ我は北條の一門江馬遠江守の近臣にて四條金吾頼基といふ者あるが近き頃建長寺の道隆禪師又參禪一專又坐禪工夫を凝しはべるうち聖人の説法よ心傾きふかく隨喜し奉るにこそと疑ひある條々と問よめらせ逸々その理よ感伏し忽ち邪を捨て正法よ歸したりけりこれ江馬殿の家臣にて府内よ名高く武勇の勝れたるのみならず文學ことに譽たかく醫師の術よさし遠く遠くの聞へある雄士なるがこれより深く大士を尊信し勤仕の暇よは日夜御側よ在て法をき、妻も亦とも歸依し奉り朝夕の食物より其折々の衣服まで心にかけて供養し奉りける頃しも水無月菰の始をいとひつゝ夕日傾く酉時日蓮大士は筋違橋より若宮小路にかゝり名越の方よ歸らんと思はれたる途中俄よ白雨ふりいでたるよかざす法衣の袖笠も浸ぎかねたる礫雨いかゞはせんと見たまふ處よ袴の裾を高く取揚年猶わかき侍のそれなる御僧よ此輩に入給へとさし招くよういと嬉しく會釋して其人に伴はれたまふ他生の縁の傘やどり我は名越へ歸る御身は何地へ往給ふやと問れて我も名越の者なりと答給へばそはよき同伴なりさあらば御僧彼の地よ日蓮といへる法師を知たまふや大士答て我は其日蓮よ侍るといへば彼の侍うち驚きさいつ頃より人の語をき、はべるよ天下の御歸依淺からざる禪宗を天魔の眷屬と宣ふよし出家にも似ぬ雜言と我はいはねと世間の取抄法寶よさる辭もいはる、よやと遠く詰ればうちうあづき出家の身は元來佛の使あり世を畏れ人よ媚てこれをいはずば道立半抑も禪の宗流は教外別傳と學び不立文字と示すありか、る宗旨を御經よは我入滅の後は大慈大悲をもつて文字と成て衆生を利益せんもし佛教よ依らずして成佛得脱すといふ者あらば天魔の眷屬ありと説おかせ給ふ禪宗の魔族外道なること御經分明あり天魔と天魔とさしていふ我が惡言と思ひたまふはいかゞやと難じかへされ半句も出せ我は進士太郎善春とて北條家の近臣あり朋輩四條頼基が聖人の噂して勸れども受かはす今日はた不測の合傘よ觸る秋の法の織蓑あらためて教を受んと自禮し心も雨もや、晴し辻は邪正の別路いとまを告て歸りける進士善春はこれより大士を信する心厚明暮些の暇よも御衾室を訪まわらせと、よ在日が多かりける夏

もよ歸依し奉り朝夕の食物より其折々の衣服まで心にかけて供養し奉りける頃しも水無月菰の始をいとひつゝ夕日傾く酉時日蓮大士は筋違橋より若宮小路にかゝり名越の方よ歸らんと思はれたる途中俄よ白雨ふりいでたるよかざす法衣の袖笠も浸ぎかねたる礫雨いかゞはせんと見たまふ處よ袴の裾を高く取揚年猶わかき侍のそれなる御僧よ此輩に入給へとさし招くよういと嬉しく會釋して其人に伴はれたまふ他生の縁の傘やどり我は名越へ歸る御身は何地へ往給ふやと問れて我も名越の者なりと答給へばそはよき同伴なりさあらば御僧彼の地よ日蓮といへる法師を知たまふや大士答て我は其日蓮よ侍るといへば彼の侍うち驚きさいつ頃より人の語をき、はべるよ天下の御歸依淺からざる禪宗を天魔の眷屬と宣ふよし出家にも似ぬ雜言と我はいはねと世間の取抄法寶よさる辭もいはる、よやと遠く詰ればうちうあづき出家の身は元來佛の使あり世を畏れ人よ媚てこれをいはずば道立半抑も禪の宗流は教外別傳と學び不立文字と示すありか、る宗旨を御經よは我入滅の後は大慈大悲をもつて文字と成て衆生を利益せんもし佛教よ依らずして成佛得脱すといふ者あらば天魔の眷屬ありと説おかせ給ふ禪宗の魔族外道なること御經分明あり天魔と天魔とさしていふ我が惡言と思ひたまふはいかゞやと難じかへされ半句も出せ我は進士太郎善春とて北條家の近臣あり朋輩四條頼基が聖人の噂して勸れども受かはす今日はた不測の合傘よ觸る秋の法の織蓑あらためて教を受んと自禮し心も雨もや、晴し辻は邪正の別路いとまを告て歸りける進士善春はこれより大士を信する心厚明暮些の暇よも御衾室を訪まわらせと、よ在日が多かりける夏

去秋も吳竹の軒瑞と拂ふ音さえて燈燦ほそき有明がた大士は奇異ある夢を見そなはけり山も崩る、ばかりの大雷の鳴はためき此菴室の茅の庇をうちぬきて其所墮たりと見るうち忽ち天氣朗かになりけりと側の人よその御夢を語給ふ折から下總國猿島郡能手の人印東次都左衛門有國聖人にまみえまわらせたまよし言入るにぞ日昭師案内て席も居らしむ有國慕しく願うきて我度々此地より來り聖人の説法を聞奉り其深妙の法蓋夜も忘れがたく聞ふ隨て妻も語らひ一人の男子吉祥といふ醫を徒弟に附んと違々此兒を携來ぬ此兒の母は法弟日昭の姉なれば伯父甥といひ法兄弟宿世奇特の因縁とおぼし願ひに任給ひねとありければ日進大士悦たまひ雷の墮たりと夢見しその席も處もかはらず吉祥磨が座したるも正しく此兒の徒弟とあるべき瑞相ならんと其徳御側よさし置せたまひ天朗なりし夢も因みて日朗とぞ名付給ふ此時齡十才にありけるが常々大士の御傍近く事へ奉り給仕のいとま手蹟學問を勵むこと一方ならず見えよけり

日朗聖人は寛元三年乙巳四月八日の誕生よして幼少の時より外柔利よして内よ勇猛の氣を含みかりそめよも他の童と交り遊ばず稚おくして稍年高たる人の如くありけり大士御一生の間よく事へて孝行第一と喚れ給ひ大國阿闍梨といひ又筑後公と稱す大士滅後三十九年元徳元年庚申の正月廿一日よ示寂す御遺命に依て松葉の谷よ茶毗し阿闍梨の山の頂よ葬る塚の上の松を隨涙の松といふ此地は文應元年宗祖松葉が谷に焼討し值給ひし時御身をかくしたる巖窟あり越中阿闍梨明慶聖人こよ寺を建て猿島山法性寺といふ日朗聖人よ九人の弟子あり世よ入れを九老僧と

て日像日輪日善日傳日庵日印日澄日行朗慶の九人をいふ其うち朗慶師ハ徒原義宗の末子あり茲に下總國葛飾郡八幡の郷若宮の里よ宮木權摩守胤繼といふ諸侯ありけり清和天皇十代の後胤よして本國は因州宮木の城主たりしが今は此下總國若宮よ住居し上總下總兩國よ知行を領し世に聞えたる名家なり實名の次郎重忠が妻梅菊が父は此宮木氏の一族なり梅菊實名が妻とありしより胤れば繋がる宿世の縁宮木胤繼も折を得て鎌倉殿よ訴訟實名が無實の罪を肯解て木領安堵させんものと久しく心よ掛られたれと天下よ非分の訴のみ多く政所の混雜に言出すべき潮もなくそのま、月日を経うち貫名の一子善日磨が出家と成しを喜びたまひ我もと佛法歸依されば何卒これを能出家よ生立一大道利生の聖人ともまさば彼の家を再興より百倍あらんと鎌倉の游學叡山の修行二十年の食料衣服贈る等なる兩親ハ世に樂られし羽拔鳥我が子を翼翅もなく宮木の家より何くれと皆これを恵まれしハ龍に水を施し火よ風を添るが如しか、る大導師を發立し宮木の大功實よ佛門の柱石とも謂つべいかくて日進大師はいふく鎌倉よ供法の志をさため妙法の職を一天よひるがへさんと思ものからか、る重恩の宮木殿よ一度此法門を傳へずば須彌八萬の頂より高かる恩を知らぬよ似たりと今年霜月初旬かた武藏よか、り下總國若宮の館よふもむきかくと案内を備けるに生憎よ殿は今朝鎌倉よ參勤の首途して船よりかしてよ赴き給ひぬとき、て大師は木尊おくは思せきも時今已牌の螺角よはすこしハやかり便船もとめて御後慈ひ御船よ還付來らんとそこくよ暇を告二子の濱に立出て船場ハるかに見やりたまへば高樓造の御座船よは紅白吹貫の船印水色

よ桔梗の紋の幕打廻し水子楳取は一様の出立し陣笠一梅柏子取て噴連船出後し地風は沖合遠く漕
 出るを日蓮大師は槍の笠をさし揚て宮木殿の御給しはしと呼たまへば宮木殿耳と辨て路の人見よ
 りかいまみ給ふよまがふ方なき蓮長師なりければ彼の僧これへと聲のした直よ小船に迎來て日蓮
 ちかく招入たまふに日蓮大師兩手を支へ隨で絶て久しき挨拶の詞真中よ宮木胤繼大師をはつたど
 睨へていかよ其方天魔破句の其身よ入去年古郷安房よかへり諸宗を惡口おすよしは拙にそれと聞
 定め悔てかへらぬ事ながらこの年月衣食と贈り性根の惡き道心を發立一身の罪障いつか汝を招
 寄言戀さんと思ひも繁き公務にいとまなく今日のいま、で過したり我目前よ諸宗を罵り惡言な
 さば一殺多生の慈悲あれば細頸討て捨んずといきまき給へば大剛些も憐れ給はす宮木殿はし待
 たまへ法門ひとつ警告さん本より殿の信仰深き比叡山慈覺大師の邪流の法門妃の腹に昇夫の種を
 孕たるやうに法華と真言とを習合せて法華經を穢し其上此法門佛の恣よ協ふやいかはと佛前よ七
 日の間祈誓を凝したる五日目の夜寅の時日輪を的として放箭の聲たかく鳴ひよき日天子を射て
 落したりと夢よ見てさては我が法佛意の的中したりと喜でその宗流と弘めし事これぞ邪法の穢
 あり釋尊の御名をば日蓮とよぶそれゆゑよこそ須跋多羅は日の落るを夢よ見て佛の御人滅近けれ
 と知又唐土よ築といへる國王の日の的として箭を放ちて其國を亡したり又我朝は日本とて日の御
 神を主とすこれを射落て吉夢と思ひたる慈覺大師はよも正氣よは在すまじ定て惡魔の入たるなら
 んと真言と法華とは七段の相違ある事を問よ答へ語るよ應じ真言亡國の法理を説給ふよ宮木殿は

握りし拳の張ゆるみ宿因催す後悔懺悔大師に深く流怨を託たちまち真言の珠數を切り今身より
 佛身にいたるまで能持べき妙法の誓の船のいと早く武州久良岐郡六浦の濱よ舟船し互ひよ再會を
 期して立別れ給ひける日蓮大師は是より一心決定し名越の庵室を根城と定め日蓮聖人はまた後服
 の任を身にひき受大師の御手を扶法弟檀越を教化して専別山の法門を弘通なし給ひければ大法將
 日蓮大師は日にく辻町の東小町往還の路よ立て往來の人の足ととゞめ念佛は無間地獄の業因よ
 禪宗は天魔の邪法真言は國を亡す大惡法律は國の賊なりと聲を限りに喚はり給ひ末法當今の集生
 の爲には南無妙法蓮華經の外たすかるべき正法なしと御經よ卷かへし線かへし説示したまへば流
 る、水を塞が如く眠る獅子と擲がごとく立つたふ僧俗男女黒山の如く眼を怒らし牙を咬惡口過言
 とするもあり氣の狂ひたる痴者ありと笑ふもあり阿彌陀如來の現罰はかゝるものとして石瓦礫古
 履雨あられ御身よ當ると事ともせず諸宗無得道墮地獄と高聲に喚はり給へば一人の老人あまたの
 群集押わけて人の騒ぐを宥めつ、御身は出家よありながら心きたるくも路端よ立て説法し人に罵
 り打る、が修行ならんやいと見苦と懇ぶりよ再詰るを大師はいやとよ置給へむかし不慚菩薩は
 石瓦を擲うたれをがら法華經を弘給ひ又龍橋菩薩の赤き瓜と建玉城とめぐる事七年法道三藏は面
 よ火印を當られたながら佛法を弘む今末法は一切衆生五濁亂離よ心濁海を山と見西を東と心得る天
 地轉倒の濁惡世正法を弘る者怨敵なくて協ふべきやと曾懲せば首を抱て後込す又一人の青侍御
 出家よ物首さん備道佛道ともよ禮義あり往還よ佇立で其大法を説ことば非禮の振舞心得がた一と

立かゝるを人間は座して食するが禮あれども亂軍急場の兵糧は立て食するも亦禮なるを知給はずやと返し難じて打針に又立替てさればとよ念佛禪の諸宗門御上よ立置法なるをその好惡をいふ事は片腹痛しといひ詰るを王侯貴人は皆在家の俗衆なり在俗何ぞ法の邪正と知召さん在家の衆も佛法の通圓邪正を放てそれを辯くが出家の本業あるをよと逸々に説聞せ給へども道理を曲る邪智愚昧皆口々罵りて果へ崩る、人の山背昏時に法戦はて、御題目高らかに唱へつゝ御座室よ立尻り給ふかく日々の社誼法よ諸宗惡口の座と揚俗誹謗のひゞきを傳へ鎌倉殿近諸士の面々も此をき、是を見れどもいかよとせんすべからず鎌倉一圓の取抄法區々なるよ建長寺の道隆禪師光明寺の良忠上人極樂寺の良觀大佛殿の別當隆觀その餘多寶寺長樂寺等みなこの頃道學の弊たかく萬人の歸依深き名僧なるが松葉が谷の日蓮とかいふ瀧迷僧が面白く諸宗を誘り往還をぞこれも一時の流行ならんと口よは嘲弄し笑へども心のうちよは胸焦れ腸然し怒の剣を鍛けるこれぞ末法三類の強敵の一種よして併聖僧上僧とて後年遠よ法華の大怨敵とぞありにける其社説法の古蹟小町の路傍よ日蓮聖人腰懸れとて今よその傳は残りけり今年乙卯も歳暮て康元元年丙辰二月廿九日の事なりけるが俄よ大雨大風吹荒て關東洪水あなじ六月十四日の曉天鶴が岡八幡宮の社震動して鎌倉中よ鳴ひ々其日の巳の刻ごろ空に白鷺はどのもの飛めぐり忽ち碎て火の車の形をなし大さ五尺ばかりよて絹を裂が如き響して一箇の跡を曳西の方よ飛去りけり白鷺の飛星は前代未聞のよしかり傳へすて去る百年より諸國に凶變多く四年このかた五穀登らず穀侯不順にして寒中

桃櫻の花さき雪中却て雪霜をふらせ田畑次第よ獲損じかくては人命いかよ繋ぐらんと米恐しき世の有様なりけり執權北條時頼も十一月節とおろし禪門に入覺一坊道崇入道と稱しその子正壽七歳なりけるを將軍の御前に於て元服せしめ宗の一字を賜つて宗時と名乗一族重時の次男武藏守長時をもつて補佐となし大事は皆時頼入道決断せられける此頃青砥左衛門藤綱といふ奉行あり此人は始め真言宗の僧なりしが佛法は偽り多しとて廿一歳の時還俗して廿八歳よて鎌倉殿に奉公一天下の政道よあづかる常に細布の直垂よ布の大口を着て問註所よ出勤し朝夕の膳部は乾たる魚を焼鹽の外と、のへす其廉直世よ知識あり上よは最明寺時頼あり下には此青砥ありて四海の成敗上下の仕置道よ當らずといふ事とこのうへ世よ變災なくば世間よ物はおもはじと萬人ひとしく天下の靜謐をぞ祈ける時よ日蓮大師は日々十字の社に立て而強海之の鼓をうち諸宗權門を攻伐給ふよ珠數を切て降参するもわりいよく怒て怒むもあり妻の信じて夫に追れ子の歸依して親よ怒らるゝも亦すくあからず折伏弘通のその中よ房州大津の領主工藤左近之丞吉隆御所勤番のいとま化導を受て檀越とあるこ、よ又池上右衛門太夫宗仲といふ士あり代々作事の奉行をもて將軍家よ事へ武州荏原郡千束の郷を領地よ賜り池上に住居し天下よ墨繩をもつて賊とする者ハ屈命をこの池上よ受ざるはあしこゝをもつて田園ゆたかよ家富さかへ春秋兩度鎌倉に出遊のいとま建長寺福福山に入て禪學を修行しけるがちかごろ名越よ諸宗を惡口する僧あるよしか、る者よは近寄ぬこそよけれとて途中よて大師の説法を見れば耳を塞いで往過ける然るに此池上宗仲兼て四條金吾頼基は親

とき友なりければ頼基種々に教導して名越ふ伴なひしが宗仲一度大師より目見えけり深ながら前非を悔て受戒せり其弟兵衛志もとも檀越となる又池上の縁家又荏原左衛門義宗といふ人ありけり八幡太郎義家の曾孫として武州荏原を領して中延に住居し世に武名の聞えありて荏原殿と稱す近き頃大師に師檀の契を結びけるが此家又先祖中延守頼信以來頼義義家三代軍中守護の八幡の神像あり一夜靈夢の神勅に依て大師より懇眼を願ふ後年及び義宗の子徳次郎といひしを日朗聖人の法弟とあし九老僧のうち朗慶聖人これあり此師中延に一寺を建立し祠を立て八幡宮を安置し八幡山妙法蓮寺と號す今中延の八幡宮とて諸人渴仰せりこゝに鎌倉成實川の邊に住居しき者ありて夙く父母より死別れ世より力なき孤獨の童とし十六よりけるが宿世より種ありや深く大師を師依り奉り賤の子なればかひあてせめて世と早うせし兩親の菩提のため御庵室に炊せばやと願ひければ其意よまかせ名を熊王と呼いとい眞實に事ける此時よりたり師依の檀越池上荏原富木四條我もくとい供養を捧げ松葉が谷の御庵室は朝夕の煙賑しく法弟隨身の輩も何一不足なく道心中中衣食ありとはかゝる事やいふ成べし又甲州巨摩郡波木井に住居ある南部六郎實長といふ人あり新羅義光六代の血統にして當國飯野御牧波木井三が郷の領主たり性質篤實にして思慮明かよ深く佛法を信ず初て大師に相見舊來の權宗を棄て本門の大成を受信力ことよ勝れて一宗より輝き後年其領内の身延山を大師に寄附したり末法萬年妙經流布の基を開きたまひし大檀那も在しける

世法はもと佛法佛法本より世法なり天晴ぬれば地明かに法華を識る者豈世法よりとからん法華の信者深く此理を察すべしされば建長康元もきのふと暮今年正嘉元年丁巳の春より四季の氣候不順にて四月の月蝕五月の日蝕とも恒ならず同十八日海の潮泥に變じたるはいかよと思ふうちよその夜子の刻大震地そのうへ三月より此方雨一滴もふらず田畠涸乾て野より一株の青草たよなし六月加賀法印雨晴七月鶴が岡の僧止も雨晴ありけれども一切又驟なく大地燃焦れて人間さへ命つぐべしとも思れずありけるに八月初日より地震ゆりはじめ同廿三日夜の戌時地震のありさま地底しばらく鳴動するよと見へしが大地を揺揚たる事大凡二丈ばかり大名小名堂塔伽藍の差別なく其外町家農民の住居漁郎の磯合にいたるまで瞬間に微塵とあり人畜とも大半これが爲よ命を喪ひたまふ免れたる人も傷つかざるは稀なりけり其山岳の鳴とよむて悉くさまじく大地は三尺五尺ひび破れて泥水を吹出し又青き火焰十丈二十丈所々より長空に立登りそれより百日ばかりの間暫止す又十月十三日一天俄に五色の雲を播乱す又いかなる憂目を見るらんと思ふうち餘の如き電光八方に散乱し人の眼を貫ぬくばかりしばしばして大雷鳴はためき襖屏障子をうち外す又同十五日にも大雷地震おりかさきり打つゝ凶變は東鑑み扱て詳かなりこゝにはその大略を述るのみかゝれば鎌倉をはじめ關東廿八か國農民は鋤鋤を取らず漁者は網を曳きよしなく米穀諸色買の道絶果てよし天災を免れたるも餓死者を多かりける日蓮大師は此ありさまを見そなはしてあまたゝび歎息し近年の凶變別て今年の有様は時運にもあらず天災もあらず全く法華

經流布の時節あるを念佛眞言の諸宗門その大法の妨をそと天怒り地罰し給ふに懸あらじ此事を房州清澄南都の藥師寺下總土橋東漸寺鎌倉鶴が岡と四度まで一切經藏に入てこれを考へ附たり今一度藏經を開て證據とあるべき諸經の要文を撰ばんと正嘉二年正月六日鎌倉と立て駿州岩本實相寺の經藏に趣きたまふ日朗印は御側さらす襖包を背負て大師を従ひ奉りけり七日の夕月山の端まかくれ沼津の海邊に行幕てやざるべき方もなく倅ひあやしき茅葺の辻堂のありければこゝに一夜を明しつゝ今宵は七草の嘉辰あればとて香を焚て御經讀誦在しけるよぞ非端に近き海原より龍燈しばく往來して夜も亦還て露の如しこれ正しく八大龍王護念の供養とぞ知られる此堂はもと當地の齋藤彌三郎利安先代妙覺禪門の爲に營む處なるが此龍燈の奇瑞と破じ明の朝山本重安と共に來て大師に朝餉を奉りこの日は強てとゞめ參らせ一家のこりなく受戒して御題目と唱へつれ大ひは佛事をいとなみけり

後年中老僧但馬房日實山本重安が宅地を寺とし龍王山妙海寺と號しまた齋藤利安も家を轉じて満松山妙覺寺といふ兩寺ともよ今に毎年正月八日法會を修してむかしの式法をのこすとぞ駿州富士郡岩本實相寺といふは比叡山横川に屬する天台の寺院なり當山の一切經は智證大師唐土より二部と持來り一部三井寺に納めたるは治承の兵亂に焼失し一部此山に傳來す高祖大士この經藏に入り給ひしは常院の學頭智海法印はじめ高祖に值まめらせたるよ世に附するとは其人林大地雲泥の相違にして道徳たかく智解ひろし智海は恐れうやまひよき折柄なりとて摩訶止觀の講釋を願ふこれに依て藏經を讀給ふいとよ時々止觀を講論なし給ふに地開するとの甚だ多くて歸依の心を發すものも亦すくまからず就中當山は伯耆坊といふ所化ありて齡十四歳には美濃國司橘善根が裔孫大井庄司の子よして甲州巨摩郡鵜澤の人なり母は駿州山井氏河合入道の娘ありその母腹よ白き蓮華の生ずると夢見て懐妊一寛元四年丙午の五月八日又出生し頭の頂に黒子七ありて七曜破軍の星に似たり八歳の時兩親擄て岩本實相寺に登り播磨二位嚴慶律師の從弟とあり此兒は我が一宗の豪傑よあらんとて三井寺に登す此頃母の身まかりたるに依て其墓詣にとて歸り來て當山は居高祖大師の容貌を拜し頗る隨喜の心を起せり學頭智海はやく其意を察しひそかよ我が寮にまねきさて言やう我ふかく日蓮聖人の大徳を慕ひ願くは其弟子となりて屢とも採んと思へどもいかにせん三井寺より當山の學頭よ附られし我が身の上は爲すべなし御身はいまだ若輩なれども末たのもしき器量あり熟世上を考ふるよ諸宗の佛法皆未枯たり今出家の本懐を遂んとおもハヤ聖人の法弟とありて一佛乘を學び給へと懇よすゝめけるにぞ伯耆坊よろこびの泪せきあへず在けるが此春の季高祖の慈父次郎重忠逝去ありしよし房州より告來り大師これを開て哀感またへず聲をあげて哭慟なし給ひ三五日の程は飲食もあし給はず歎きよ春もやゝ暮て泪とそゝぐ竹の杖力なき身と扶けられやがて鎌倉よ歸り給ふこゝに彼の伯耆坊は智海法印の計らひみてひそかよ實相寺をのがれ出漸く沼津にて大師よ追つき奉りその志願をのべて歎きけるよぞこれを不便と思召とも鎌倉よ携かへり名を日興と召れまた其母の夢の緯をきこしめし後年自述阿闍梨と稱し六老

を願ふこれに依て藏經を讀給ふいとよ時々止觀を講論なし給ふに地開するとの甚だ多くて歸依の心を發すものも亦すくまからず就中當山は伯耆坊といふ所化ありて齡十四歳には美濃國司橘善根が裔孫大井庄司の子よして甲州巨摩郡鵜澤の人なり母は駿州山井氏河合入道の娘ありその母腹よ白き蓮華の生ずると夢見て懐妊一寛元四年丙午の五月八日又出生し頭の頂に黒子七ありて七曜破軍の星に似たり八歳の時兩親擄て岩本實相寺に登り播磨二位嚴慶律師の從弟とあり此兒は我が一宗の豪傑よあらんとて三井寺に登す此頃母の身まかりたるに依て其墓詣にとて歸り來て當山は居高祖大師の容貌を拜し頗る隨喜の心を起せり學頭智海はやく其意を察しひそかよ我が寮にまねきさて言やう我ふかく日蓮聖人の大徳を慕ひ願くは其弟子となりて屢とも採んと思へどもいかにせん三井寺より當山の學頭よ附られし我が身の上は爲すべなし御身はいまだ若輩なれども末たのもしき器量あり熟世上を考ふるよ諸宗の佛法皆未枯たり今出家の本懐を遂んとおもハヤ聖人の法弟とありて一佛乘を學び給へと懇よすゝめけるにぞ伯耆坊よろこびの泪せきあへず在けるが此春の季高祖の慈父次郎重忠逝去ありしよし房州より告來り大師これを開て哀感またへず聲をあげて哭慟なし給ひ三五日の程は飲食もあし給はず歎きよ春もやゝ暮て泪とそゝぐ竹の杖力なき身と扶けられやがて鎌倉よ歸り給ふこゝに彼の伯耆坊は智海法印の計らひみてひそかよ實相寺をのがれ出漸く沼津にて大師よ追つき奉りその志願をのべて歎きけるよぞこれを不便と思召とも鎌倉よ携かへり名を日興と召れまた其母の夢の緯をきこしめし後年自述阿闍梨と稱し六老

僧と第三より給ひけり

日興聖人大師入滅の後その遺命よ任せ五老僧とくも身延山に籠り常任院と建ててこゝに興を終り其後輪番に此山を守護なし給ひける茲に大檀那波木井六郎實長ある時身延久遠寺に詣り大師の遺後わづかよ七年横倉食礎石苔も埋む實長歎息して六老僧に談じ給ふやう此山を輪番に守護すると高祖の遺命なればこれを改めがたしといへきも法の爲山の爲其たよろしき處もあらずその故は當山も主職なし當番の主はこゝに居事旅の舎も居るが如く疎するとにはあらねども各我が寺の修復も心取れ本化栖神の靈場も年を追て衰ふる事のありもやせん早く住持を定て萬年の榮へを計るはいかよとありければ各詞を揃へ法は出家も依て久住し寺は檀那も因て榮ふ波木井殿は寺の永續を專一よする任なれば其義貴意も信すべしとありけるよ日興聖人ひとりこれを承陪たまはず法子檀越の身として師の遺状も背く法やある寺の盛衰は在家の御身等が預る處もあらずと答へ給ふ波木井殿其た不興の色を顯はし一座の老僧皆然りとす貴師獨非禮の旨を述給ふはいはれ給へ今日より御身と交を絶んとありければ日興聖人も法衣の袖を拂て立給ふるれより時の當番日向聖人をもつて身延山の住職とあしけるにぞ日興聖人はいよく波木井殿と中絶たれば當木比企池上も自然音信を通ぜず大檀那四人かくの如きゆゑ日昭日朗日向日頂日持の五人もみな疎縁となりゆき日興聖人は唯一人背くまじくおぼせども自然と身延一山は敵の城廓のやうになりゆきけるよぞ十月の初めつかた秋澤に在して一通の書を認め下野坊日忍を使として波木井殿につかはし和敬の心ありけれども實長一言の返事よさへ及ばれずこゝに於て日興聖人も憤りを召み房州北野郡保田村に後と隠し門を杜て遺經を給ふと久し今の中谷山妙本寺その古蹟なり上野殿の法の因ふかゝりければ後年日興聖人を迎へて大石寺を建立し又北山よ本門寺を建正慶元年壬申の二月七日日興聖人示寂す時に八十八歳ありけり此傳よよく心をこめて見るべし日興聖人は勝劣一派を立んとて身延に背きたるよあらず身延山と中不合よなりゆきしゆゑかのづかと一派の流義も殺れり誠は師檀の中間よいさ、か是非を許てより平等一味の海に別派の波を起したる事悲むべし願くは其末流を汲ん者我慢偏執の風を收め相互ひよ平等大慈の本誓よ根づかば真如の法水從來跡ふ處なからん若又彼を此とは黑白の相違ある別流なりと察らば高祖大師かねて六老僧と稱して末頼しく御覽ありしは御目迷ひか日興聖人五老僧と、もよ二十年來高祖の御側よ在て法門を聞給ひしは虛耳か塔中別付上行所傳の法理よ何ぞ二三の別流あらん廣く考へ深く察して一を二と信じ不二摩前衍の佛海よ歸入し現當の大願を満足せん事佛門の肝心ならんかし

さて高祖大師は旅裝をど、のへ給ひ日朗師を將て房州小湊よおもむき慈母を慰めつ檣の青葉摘とりてそゝく泪を手向御經讀誦いと懇よ百ヶ日の佛事はて、鉢倉よかへり給ひけりいづくも打つゝく變災に人の心も崩りはて年々五穀登らずきて淺ましき事のみ多かるよ今年八月朔日颶風洪水よて非命に死するもの數をいらすおむじ其廿八日の夜は災惡といふ悲甚いで、一天の星み

赤光を奪はれしかのみならず狂星長き四丈ばかりなるが乾より巽の方へ飛わたるそのひき山岳
 も鳴轟くこれより諸國大飢饉うのうへ疫病流行し萬民なげまの中も今年もくれて明れば正元元年
 の春歳あらたまれど壽き祝ふ聲もなく國中民の食盡てそのうへ疫病いよくはげしくいさゝかも
 手脚の協ふ者は病煩らひながらも籠を提籠を腰よして野山をさまよひわるき木の皮革の根をせ、
 りそれを咬ながら倒れ死するも多かりきまた北行協はず家は居者は飢も苦み病も惱み泣呻親子
 兄弟夫婦の間いさゝかの喰物を得れば互ひよゆづりあひ其太切と思ひ最愛と思ふ人よまづす、
 めて喫しむるゆゑも情ふかく實ある者は其家のうちにも人よりはやく命を喪ひける佐原義宗名越
 の御庵室に來り高祖大士は物語やうけふしも村圍の越りも通行かゝり咽喉の乾きたるま、水を一
 抄貸は、やと或る農家よ立入たるよ主翁とあはしき五十ばかりの男壁よ倚か、りいと惱まじげ
 に見へければ流行の病も苦しきはべるやと問は頭をうち挿て九旬このかた食料つきはて糖も餅も
 啖つくし壁土をさへ口よ含み今は食たへ廿日あまり妻はその庭の下よ死てあり土間の曲窓の下に
 は弟の死體もありその亡骸をさへ取飲むべきすべなしと泪を拭ふ訣さへ手を掲かぬし此の無息納
 戸のかたをさし覗けば何やらん古葛籠のうちよ揺むしる物音するにうあれば何ぞと尋ればされば
 とよ五才と七才とある男子二人ありて妻は夫をいたはるとて己れは食すふたりの兒等よのみあた
 へつゝそれゆゑ早く死したりき五七日このかたは二人の兒童も聲泣喚し慈母は何處におはしたる
 ぞ爺さま早く物食して給ひねと此世からなる餓鬼道の飢にくるしみたへかねてや兄弟たがいにか

合類先手脚に噛つきて血は染るありさまの眼の當られぬ振舞を今は見兼て兄の方を憎み入弟
 を古葛籠よ入見給ふ如く繩もてからげをきたるは千代もと祈る我が子さへ早く死ねかしと涙ふの
 みと涕をす、りて物がたるを聞ておはれさやるかたなく腰につけたる一袋の乾飯をとりいだし彼
 の主翁よあたへたるよ主翁はこれを押戴御志ハ好しけれとくも生ながらふべき親子が命なら
 ぬを今なまじひよ食物を得て一時なりとも生延なば又一時の憂目や兒ん前給とさし戻しぬさて
 恐ろしき事かなと歸る途中の障ももいつやより京都よ人を啖ことばじまりて飢え辨り一袋を
 又往倒れたる人の肉を啖ふよ一此頃鎌倉よも移り來て昨夕王袋坂の遊所よて死人を啖ひ居たる者
 ありと取々人の語りはべるどありければ日蓮大士も共に哀れを催して御法衣の袖を縫り給ひされ
 ば末法法華經の弘まらせ給ふべき時節あるを諸宗の邪義よ障られて正法の立ざるを大怒り地割し
 給ふなりいでや此事決を鎌倉殿に訴上ん上一人此事を辨へ給ふ程ならば下萬民の幸ならんとい
 卷の書をつまり給ひ正法を立て國を安くする義を取てこれを立正安國論と名づけられ兼て前年
 京都よて圖らず面會ありし比企大學三郎能本の近き頃鎌倉に召下され儒道に天文を兼て御所よ
 昵近一太士とは神樹の契淺からざりければ幸彼の安國論を大學三郎よ見せて文章の雄辯文字の誤
 過をしらべ給ひけり例せば天台よ徐陵あり妙樂よ梁肅あり傳教よ真綱ありて其時の豪傑の儒者
 佛法を扶翼たり今高祖大師よ能本ありて此安國論を校正しけるもみなこれ三省諸天の所爲とぞ
 知られける

大學三郎能本の住居せる比企が谷といふは去る建仁三年九月二日父判官能員北條時政の爲に滅亡ありし其舊地なるを拜領し文章博士をもつて世に時めきしが前年比企落滅の時庭前の池に入水して果たり一姉嶺岐の局の靈魂猶得脱せず崇を爲とて御所より此地におゐて一日願寫の法華經の供養を遂らる大學二郎も亦法華堂をいとあみ高祖大師を請待して佛事をいとなみ姉嶺岐の局の靈を蛇若止大明神といはひ祀り給ふこれ比企が谷法華堂の始めなりこれより妙本寺となりて二百年の後當山の檀越佐竹常源入道家督の事まついて管領上杉憲定と合戦し佐竹入道此山より船籠り應永廿九年十月三日早天より軍始り其夕方上杉方より燒草を樹て寺も火をかけ既に堂塔灰とちらんと見る内より井戸の中より一道の白氣立昇り忽ち震動雷電し大雨霰を衝が如く燃へ立柴もたゞちに濕りて火は消たり此時黒雲の内より大象をも呑べきほどの大蛇利ひの舌を以々とひらめかし火船を嘔と吐出し伽藍の燒亡を護ると見ければ兵士ども畏恐れて逃失けりこれは去ぬる弘安三年日蓮大師認め給ひし十界の本尊を此時の住持日行聖人此兵亂も灰となるべきを悲みこの井桁の裏に隠し給ひたるが此御本尊の不測を現したるありこれより蛇形の曼陀羅を世に言傳ふ本尊紙中長三尺二寸廣二尺三寸七分今も比企が谷に現存す此時佐竹常源も大將の分十三騎釋迦堂の前より切腹して相果けり此等は祖傳も預らざる事なれども比企靈場の兵亂また本尊蛇形の曼陀羅の利驗もよつて茲に附す

今茲正元二年の春疫病愈々止す二月十四日十五日の兩日日輪の色赤くして物の色皆紅ひも見ゆす

べて去年よりの日蝕月蝕時からずして度々かゝり一天薄曇りて日の色さへ定かならずこれに世の滅する時節もや成果けん人と人々生たる心地もせざりけること、駿州富士郡上野に領居する南條兵衛七郎といふ人あり北條時政の親族にして駿河國を大半に支配せし世に上野殿と稱して輕からぬ家柄なり上野一門はもと岩本實相寺の檀越たりしが岩本の一山舉て高祖大師を尊崇なすに上野殿もこれより大師の師檀の契りを結び深く信仰し奉りけれども國中の政事にいとまなくして度々高祖を値奉るとかたかく唯時々布施を捧げ衣食を供養してその厚志を盡されければ高祖も又其間暇を察し交通を以て節々御教導ありけるあり又日興師は本岩本に所化たりし時より上野殿知己なりければ折々觸ては我が邸に請待し高祖に見ゆる心地にて、隨で教化を受給ふ日興師も亦其信力の厚きを喜び、自高祖の御側も在て朝夕問つる法門を逸々書とて、め上野殿へおくり給ふ世に此を日興記と言傳るなり時又文應元年庚申の七月十六日高祖大師は奉行宿谷左衛門尉光則が邸に推參し拙僧は御府内名越に住居なす日蓮といふ者もはべり近來つゞく天地の變災一代藏經の鏡よかけて當世日本國をうつし見て認認たる立正安國論といふ一巻の書ありこれいさゝか國恩を報ひ奉るのみ願くは前執權時頼公の賢覽も備へ給れと其書をさし出されければ左衛門尉光則請取頼て御所より出仕せし此旨披露に及びたるも將軍の御前におゐて北條一門をはじめ列國の諸侍伺候し侍讀學士比企大學三郎を召てその書を讀しめ給ふにその趣意も曰く國は法に依て榮え法は人に依てたつ近年うちつゞきたる天變地天は末法應時の法華經諸宗の惡義も利益あらはれず其正法誹謗の

罪深く諸天善神は此國を捨て守らず惡鬼國土に充滿するゆゑなり金光明經には正法に背けば其國に七難おとると見へたり其七難の中五難はこれまで顯れたれど二難いまだ起らず其二難とは此國に軍起ると異國より此國を攻るとの二なり又藥師經の三災すてに二ツ起りておほ一を殘す兵革とて戰の災あり若國王自官此法華經を御信用なくいよく念佛禪律等の歸依ふかくは此國の滅亡程近きにあらんこれ我が言ふあらざる釋迦牟尼世尊金口の佛説ありと予嘗たりける形類はじめ非居る諸士も一同に顔見合互ひに問もあかりけり北條時頼此書を見て甚だ快よからず同廿四日高祖大師を我が邸に召寄東の窓に喚入てみづから對面有て宣やう今度一卷の書を差出し天下の政事を侮り萬人の信心を感はず事出家沙門の所行にあるべきやと仰ありければ大師答てむかし周の世に陵き蔡姬あり我が機杼を識ずして周の天下の亂れんとせしを案じ煩ひし老嫗心左傳の昭公廿四年に見へはべりぬ況て天下の安危は佛法の邪正に依これ告さずは出家の本業に違ふも似たり抑法華經は正法の中の正法よして諸經に優れて在ること一切の江河の中は海の第一なるが如く一切の山嶽の内には須彌山の第一なるが如く又一切の星の中には月を第一と仰か如く闇に燈火渡り又船營へは高十六萬八千山句の須彌山を列圍めて現とあし大千世界の佛の業を筆と結ひ大海を視水としてこれを一するすとも書つくし難きは法華經の功德なり然るを諸宗の經々も其廣大の利益をふり塞んと邪正混じて明白ならず如くは公深くこれを察し給ひはやく念佛真言禪律の諸宗を停止して我が一乘法を御歸依あらば四海の太平とならんこと掌を反すよりも遠かならんこと有ければ時頼面色怒りをあらはし一人の詞を信じて何ぞ三國傳來の諸宗を破らんと申啓扇取て立揚り稱うち拂て入給ふを高祖大師は御體たかく若我が言を御用ひあくば自界叛逆とて御一門又同士討の軍はじまり他國難難とて他方の國より此國を侵さるべし其時時を臨給はんぞと喚はり給ひしよぞ近來惡徒の面々もあを恐ろしきことをいふ日蓮かなと面色かはつて見へよけるこれ天下諫言のはじめなりこれより忠告耳に逆ひ北條時頼同重時とも高祖大師をふかく思恋み給ふこといはなりぬ上一人の心下高民もおしうつり彼の名越の日蓮坊いよは北條殿も疎んじ給ふとさく討殺したりとも咎はあらじ阿彌陀如來の怨敵目も物見せんと百人ばかり手にく得物持拵ひ名越の御菴室へ押寄たり時に八月廿七日今宵は當る庚申帝釋天へ法樂せんと大師は暫し御經讀誦し終り月もや出ると滯戸細目と押明て東の窓よりうち見やり給ふ折竹線つたへ白き猿大師の御袖をしきりよ曳ければこは不審と思しめしながら何ある事の諭しよやと彼よひかれて符給ふと階いと暗き山つゞき東をさして七八町山王堂より奥まりたる窟の洞に入奉る大師西の方を眺み給へば我が庵室とおぼしき邊りおびた、一き物音の聲猛火燭々として天を焦しければさては我が庵室は燒失するにやと思しける此夜御庵室よへ人すくなくして進士太郎善春と能登坊と唯二人ありけるが念佛禪の諸門徒ども日蓮を瀆すを盛々よ喚かはし松火を投懸々々燒討み予進士善春刀おつとり扱はなし無益の殺生をすまじと當るを幸ひ棟打よ致倒し蹂躪る能登坊も櫓の御柵はやうち折て近傍敵を捉捕へ目よりも高くさし揚て丁と投たる人禪討手の雜人かなはじと皆いつくへか逃散て夜は

れば時頼面色怒りをあらはし一人の詞を信じて何ぞ三國傳來の諸宗を破らんと申啓扇取て立揚り稱うち拂て入給ふを高祖大師は御體たかく若我が言を御用ひあくば自界叛逆とて御一門又同士討の軍はじまり他國難難とて他方の國より此國を侵さるべし其時時を臨給はんぞと喚はり給ひしよぞ近來惡徒の面々もあを恐ろしきことをいふ日蓮かなと面色かはつて見へよけるこれ天下諫言のはじめなりこれより忠告耳に逆ひ北條時頼同重時とも高祖大師をふかく思恋み給ふこといはなりぬ上一人の心下高民もおしうつり彼の名越の日蓮坊いよは北條殿も疎んじ給ふとさく討殺したりとも咎はあらじ阿彌陀如來の怨敵目も物見せんと百人ばかり手にく得物持拵ひ名越の御菴室へ押寄たり時に八月廿七日今宵は當る庚申帝釋天へ法樂せんと大師は暫し御經讀誦し終り月もや出ると滯戸細目と押明て東の窓よりうち見やり給ふ折竹線つたへ白き猿大師の御袖をしきりよ曳ければこは不審と思しめしながら何ある事の諭しよやと彼よひかれて符給ふと階いと暗き山つゞき東をさして七八町山王堂より奥まりたる窟の洞に入奉る大師西の方を眺み給へば我が庵室とおぼしき邊りおびた、一き物音の聲猛火燭々として天を焦しければさては我が庵室は燒失するにやと思しける此夜御庵室よへ人すくなくして進士太郎善春と能登坊と唯二人ありけるが念佛禪の諸門徒ども日蓮を瀆すを盛々よ喚かはし松火を投懸々々燒討み予進士善春刀おつとり扱はなし無益の殺生をすまじと當るを幸ひ棟打よ致倒し蹂躪る能登坊も櫓の御柵はやうち折て近傍敵を捉捕へ目よりも高くさし揚て丁と投たる人禪討手の雜人かなはじと皆いつくへか逃散て夜は



諸宗門の悪徒等

松葉ヶ谷の

巻室を焼討す

はのくを明よける高祖大師へ人しらぬ岩窟のうちに御經をよみすまして在しけるに不測や猿のうち群て柴栗覆盆子楸の實あらんとかはるく手折もて供養し奉るよぞおもはずこれに飢を忘れこよかくれ給ふこと三日の間後年此處に寺を立て御嶽畑法性寺とて今よその靈場をよめけり其頃鎌倉市中には日蓮名越えて焼死したりと専一風盛せしとかやさても富木播磨守は伶俐たる家來をつかはし大師の在處を探り索め漸く山王堂の山奥にこれを尋當り御手を取てひとかたに下總の國若宮の館に伴ひ参らせ富木殿との無事を喜び尊敬日頃よ百倍し邸指のうちに法華堂をいとあみ茲に法越を開らま家門一族のこりあく大戒を受奉りこれより日々の説法教化の外他事あらざりけりけふも富木の法華堂よ來りて受戒せし付谷入道教僧といへは代々越前の國を領し當國曾谷よ居住す此人佛縁淺からず日と追て大法を傳得せり二人の子あり嫡子は四郎左衛門直秀といひ次は女子よて芝崎と呼ぶ生長して千葉大隅守胤貞の室となる兄弟ともに大師の化導に預り清淨堅固の信心者よぞおはしける

曾谷教僧後年身延山よ登り剃髮して法蓮日禮と名を賜ひ家よ歸りて法蓮寺と建立す承應四年辛卯五月朔日八十歳よして示寂す嫡子四郎右衛門直秀家督を繼で信力父よ劣らず妹芝崎は父存生の日鼻和地藏堂と本化の寺とし日朝聖人を請りて開堂す長谷山本土寺といふ尖塔大隅守逝去の後尼と成て妙林と號し其居宅を寺とあじて禮林寺と名づく兄四郎右衛門は後よ山城入道道徳と云其子典久末子を大師の法弟とす筑前坊日合これなり山城入道その日合の爲に千葉郡山田の邸を寺となし妙興寺と號す又平賀六代日福も入道の孫なり曾谷の一族本化の宗を信じたる事斯の如し

高祖大師法華堂よ在て日々の説法夜々の講談老若男女取交て聽聞するものいと多かりける中よも當國白井の住士秋元太郎一座の説法いまだ聞終らずして珠數を切て改宗す又柏井村よ鐵阿彌といふ念佛者ありしが念佛無間の法門を難じ來て一宵のものと念佛を捨て法弟とある名を日唱と賜ふこれまでの念佛と言滅んとて眼を暗萎を握り強情に題目を唱ふ其幾夜となく滅とあく一村よひやくこれに依て首題坊と呼給ひしなりその子も亦法弟と成て日恵といひ父の家へ轉じて寺とす今鶴山唱行寺これなり新化導の中よ此所より一里ばかり去て千足といふ里ありその地の人ありとて年闌たる婦人日にく來て聽聞する日我が法名と御本尊とを請大師本尊と書て法名を妙正と與へ給ふ婦人喜んで歸りける其郷の人もあまた茲よ居たれどもその婦人を見知らずとてあやしんでその後をいたひ覗ひけるに千足村の池よ入て見へす本尊の池の邊りの柳の枝よかけたりこれより奇異の事也とて祠を建て妙正大明神と崇め今へ姪神とて疋齋の守護神と仰ぐかゝる不測を語りつたへ參詣群衆の中よも大田左衛門乘明は人味重く身分いやしからず富木の内室は此大田乘明の姉ありければ日々こゝよ在て大師の化導を蒙り粗ろの宗意を所へ師と歸依すること大方あらず嫡子太郎と剃髮せしめ法弟とす帥の阿闍梨日高これなり

太田乘明老後よいたり夫婦別々の家に住んで五辛を食せば肉を啖ず法衣を着し袈裟を掛たりと

れも依て高祖も常も聖人と喚び給ひ其宅をも直も本妙寺と稱せらる弘安六年四月廿六日寂す
 梅檀の林に毒草なく須彌山に近づく鳥は皆金色なり曾谷秋元太田とはじめ此法堂に入て邪宗を捨
 て正法に歸する者其數を知らず教化の果敢ゆくもおもはず日數を重ね給ひ峯の木枯吹絶て霜冴わ
 たる庭傳富木胤繼は法華堂に入來り優曇華の花咲き匂ふ千歳の一時御說法も既も昨日は百座も
 滿給ひぬ鎌倉名越の御菴室も去ぬる八月燒討の後番匠左官を遣はして今は漸く成就なしたりと今
 朝しも鎌倉より告げ來りぬとく御入在て大法弘通を給へ法弟も檀越も待わびたりと問はべりぬ
 とありけるよぞ高祖大師はその志意の淺からざるをよろこび其日鎌倉におもむきかへり再び木化
 折伏の轡を賜し給ひけり

富播磨守胤繼は件來書を讀ことを好んで篤く佛乘を信じ日蓮大師いまだ遊長たりし時より衣食
 資財を見繼て學問修行をばげまし給へり實に末法萬年宗門第一の大旦那ありしをもちて日蓮
 もし上行の可廻ならば富木殿は無邊行なるべし火を盛するものは風なりと遊ばしたるは此
 ゆゑありけり百座說法の道場は寺と成て正中山妙法華經寺と名づけ大師手づから彫刻ありし一
 尊四菩薩また鬼子母神を建て本尊とし大師を開山とし富木胤繼は建治二年の夏身延山に登り大
 師の御手を勞して剃髮し名を常修院日常又常忍と號す大師入滅の後初て袈裟をかけて中山第二
 世を繼大師御在世此時かねて此人の志の堅固あるを知召て一切の書類は多く此家へ傳給ひし
 ゆゑ今此山に納るゝ高祖の直筆一百餘通に及ぶ點未來門外不出と定め今猶其據を護る在世の時

より六老中老とも富木殿を敬ひ見ること大師にかはらず正安元年己亥三月廿日八十四才よ
 して示寂す中山三代日高四代日祐聖人此人は當國佐倉の城主千葉大隅守貞胤の子なりこれに依
 て佐倉より當山寺領一萬石を寄附すこれより寺門盛まりゆき關東關西末山末寺五千七百餘
 ヶ寺ありよび今も連綿として日常聖人の餘光宗門にかやくこと仰で敬び侍すべし

國に道あり法あり傳へあり我が神國の道の學びといふは京都吉田殿二位兼益これが長上たりこゝよ
 吉田の御神領武州都筑郡恩田御厨の代官兼行といふもの年來日昭聖人と交り厚かりければ高祖大
 師これをよき紹介なりとて益行の吹擧又依て吉田家に門入を給ひし兼益一度詞を交へて大ひ
 よ驚き日蓮聖人は一代藏經の才覺と極たる異人あれば三十二尊の神號より神祕口訣の相承幾るを
 ころなく傳へたるよしは二位兼益の筆記に審詳なりこれ法華勸請にあらざれば諸神も利益を
 一といふ日蓮所立神道の根元あり此頃高祖大師は折伏弘通の鋒尖するさく愈々諸宗を攻なびけ
 俗男女落降て徒弟となり檀越となるもの日を追て盛なりさるゝ北條陸奥守重時諸人の醜言を信
 し大師を惡む事甚しけれどもいかんせん今は逆世の身の上なればとて徒も牙と咬でかはしけるが
 教權時宗幼少よつき重時の子長時天下の政事を補佐する身とありければこれ予能き時節なりと重
 時ひそかに子息長時にこれを談じ時弘長元年庚酉五月十二日の朝挂替小路の辻日蓮大師を
 召捕へ問詰所の吟味を遂すして情もなく由比が激よひきもてゆき船ようちのせ伊豆の伊東へ流罪
 とすきこへける荏原池上進士等の檀越も我もくゝと驚き聚まりてありけれどもはや嚴重の囚人な

れば番の兵士松うち振四邊へ人を近よせずかゝる處へ日朗聖人この日比企が谷に在しけるが斯きより徒跣して由比が濱邊に駈來り給ふにいまや御出船を見へければかよはき腕を引とめ我れハ流人日蓮が弟子の日朗ははべるかー我をも共に同船させて給ひねと聲を限りま宣へば船人いかりの聲あら、げあつれ背道心奴太切の御用船に浪難なさは目に物見せんと持たる槓を振揚て綱を細りし右の手をはつしとて日朗聖人なまかはしはしもこらゆへき一聲あつと叫びつゝ磯の渚に打すへられ其儀動と倒れ給ふ餘處の見る眼も中くよあはれ果なきありさまあり日蓮大師は船梁に立揚り官人の衆中よ彼は幼少より我が弟子よてしばしも別と離れざる不便の者よはべるかし何條一言の暇を告させ給はれと會釋して此方よ向ひ日朗々々と御聲高し喚給へばその聲はしき御聲の耳よ入てや起揚り御船は未だ出ざりしかあら嬉しや南無妙法蓮華經と合す聲も右は折れて片腕あげて泣入血の涙大師も臉一ぱたきいかよ日朗日朗の教化を忘れたるよを今末法に御經を弘れば杖もて打れあるは又遠く流罪も成べしと法華經勸持品よ説おかれたる其明文二千餘年の今日唯今汝は打擲われは流罪如來の金言違はぬうへは廣宣流布も疑ひな一願て救免の時を得て再びめぐり値まては法の御爲その身を愛せよ此地を伊東は西東八重の潮路は遠くとも朝日東天よ登り給はゞ日朗鎌倉に在とあもふべし月西山よ傾くを見る時は日蓮伊東にありと知れさらばと念珠を拵此經難持若暫持者と若塔品の偈文を唱給へば御船は波にゆられつゝ一聲高く一聲は低く一句は伸一句は縮り波の間に遠ざかり沖合はるかよ漕出たり歸依の男女隨身の法弟遠路口

同音よ御題目を唱へつゝあだなみならぬ際際よ捕しぼりつゝ見送るうち沙風吹たつ朝霧に御船は見へずありよけり日朗はじめ弟法檀越御名残の聲はしくて御船よきこへし此經難持自然よ節づ御經をその節よ唱へ登へ沖中節の此經難持とて今の世までも傳へけり新て御船は西とさして走りけるが程なく西風吹起り潮と風とよ立合て逆巻波をましきりくその日の中の伊豆の岬よ近づきけり船中の官人大士よ向ひけふは生憎風あれて船の進退自由ならずあれ見給へ彼處の黒き茂りこと伊東の浦みはべるかし此處の磯傳ひ程近ければ步行給へと船よりあろしまめらせて鎌倉さして走りさりぬ大士はかゝる蒼海の船よゆられて御心慟しく磯よ腰をうちかけて見やり給ふよ往べき伊東も程遠く磯石岬々と横たはり若なめらかよ水草生岩よせかれてうつ浜は白蛇のかけり狂ふよ似たり大士は御聲しづかよ題目ししはし休らひ給ふ折から藤の一葉のさゝ小船竹の子笠よ腰に懸して機柏子高く漕ぎ來り大士を見て大ひよ驚き御僧は天より降ておはせしか驚よ捕れて來給へるかこれ伊東が岬の魚根岩とて磯根別れし離嶋今さしみつる上潮時この黄昏は沙みちて暎て隠るゝ浜間の磯石あな危ひかゝる舌を巻ての物がたり大士はこれに應答して我は鎌倉の日蓮といふ僧よて伊豆の伊東よ流罪の身あるが爰よ追揚歸りしは死ば死ねかし活とても活かひもあく鎌倉に思憎まれし者とおもひ芥のごとく棄たるならんと語り給へば何おもひけん漁者は小舟を岸よさよせ我はかしの川奈といふ磯村に彌三郎とて日よく此岬よ漁業して世を渡る者あるが今宵は亡母の十三回忌の待夜よあれを佛事はさておき此風の荒吹よ命を的の殺生もあさねば協はぬ深恨人

御僧をたすけ参らせおはせめての追尋いざこの船に召れよと御手を取て舟ようちのせ奉り人顔不
分灯ともし頃おのが伏屋の背戸近き透りの岸よ舟さよせ妻の名を呼立れば妻も戻りの運きを案
じ紙燭ともして走りいで船のうちよ大士の在すを見てうち愕くを大淵三郎附々なりと首さす路
半途に灯を吹消し今日しも村の莊官より流罪の出家を歸依さば辛き目見せんと觸たるはど耳
に口よせさ、やくよ彌三郎も心得て人よ知れてはあしかりなるとひそかに我が家よしのばせ奉
り妻もともく、駈走り手水洗足何くれと足はぬがちの瘦世帯心ばかりの夕餉を供養し掛て見かく
す狹狭納戸のかたに休らはせ奉りこれより夫婦は人知れず大士の教化よあづかり慈まかくまひ供
養すること三十日餘り高祖もふかく感じたまひ男はさもあるべき事なれど婦人の身として共我
をあはれみ何處も米の乏しき時節あるに久しくはこくみ給はり事いつの世よか忘れはべらん定
めし我が父母の伊豆の川奈よ生れ來り給へるかさらすばいかで鎌倉殿よいみ恐まれ天下の人よ嫌
はれたる日速にかくまで信仰をし給はんやとて御涙と、もよよろこび給ひけり

大士船より上陸たまひし處は篠見が浦とて伊東より南二里その磯を今日蓮精といふ小山原北條
家臣今村若狹守この地を領したりし時初めて堂をいとなむ萬治二年江戸大久寺の日蓮師これを
寺とあして海岸山蓮着寺と名づく今は越後本成寺の末寺なり又川奈は篠見が浦を去事一里餘彌
三郎姓は上原と云大士は船守と喚給ふ其跡寺と成て船守山蓮慶寺といふ蓮慶は彌三郎の法名を

雨ならば宿もかるべき夕暮の霧よぞいたく袖ぬらしける今日本國よ佛法渡て七百餘年念佛真言禪
の諸宗似て非分ある如法の毒氣いつしか上下萬人の骨髄よ染徹り今正法の法華經弘まらせ給ふべ
きを惡み嫉むと嘘へば鳥の糞を嫌ひ蜚蜋の日の光りを畏る、よ似たり其上鎌倉に於ても御府内を
懼りなく名越の御庵室よ火を放ち夜中狼藉ありたる無法人よは何の詮議もなく正法弘通の高祖大
士をば遠く此島よ苦しめたるは世界不測の政道なり日蓮大士彌三郎夫婦よ語り給ふやう傳へさく
一向門徒の親鸞上人は一流をたて妻を妻として色慾なく肉を食して食念なく堅く菩提をこゝろざ
すこれを清淨の梵行と名づくるはとて三衣と身よ纏ひながら肉食妻帯を棄てて釋尊一代の聖經
にかつて例なき魚鳥を啖ひ妻子を養ふ法外の僧は却て萬人の歸依をうけ又身に一分の過失なく唯
一切衆生を救はんを勵む日蓮の如く、る實よ値へり天の地とあり陸の海となり子は親をうち家臣は
主君を罵り轉倒亂離の世なればよそ今惡鬼國よ充滿し種々の凶惡有て五穀登らず惡病も流行す此
うへいかよ成ゆく世あるらんとありければ彌三郎もさしうつむき斯かそろしき惡世よは御題目の
外頼みはあらじと夫婦愈々信心とはげまじけるこゝも常願伊東の領主莊司八郎を備門朝高五月の
中旬より流行の毒病よ犯され既に正氣を失ひ見る目いぶせき大病に醫藥所念の驗も見へずはや命
の際と見ゆるにぞ此伊東の親族よ綾部正清といふ者あり深く事を考ふるよ此國へ流され來りしは
蓮聖人鎌倉殿の惡みはさることちれを其弘る御經は法華經といふ尊き御經ありとさくそのうへ不
測の名僧とて御府内よも信ずる人の多しとづいふなるあはれ領主の病ひを救ん事を頼まばやとみ

づから大士に見へ奉りうの祈念を願ひければ大士眉うちひそめ宜ふやう御經文よもし正法の幼な
 さば其頭七分は碎くべしと鬼子母神十羅刹女の誓ひあり今その誹謗正法の罪を憎んで諸天の怒り
 甚し我祈るとも協へしとも覺へずと辭退な一給ふと正清強て願ひ奉りければ六月十七日伊東和田
 の邸に入給ひ朝高の枕邊に坐して讀經を給ふに三日にして正氣よかへり五日よして病ひ大半に
 除く朝高正清を始め妻も族もその奇特な驚き晝夜寝て題目を修行す朝高すでも本復よ及びければ
 我が命は聖人の賜ありとて大士と仰ぎ奉ること大方ならず或時朝高聖人は何を持佛と成給ふやと
 ありければ久遠の釋尊ありとてその法門と喻し給ふ朝高よろこんでいふやう茲よひとつの妙ある
 ことあり前年よりこの伊東が崎の海上に夜々光明を放ちたりしが一昧の佛像を漁者の網よ曳揚
 たりとは阿彌陀如來なりとし近郷聚て念佛せりしかるよその頃熱病諸方よ起りて死するもの多
 し彼の佛像はよく見まわらずれば釋迦如來なりければ村中の者呆れはて熱病の流行も此佛の所爲
 あらんいははしき佛かなとて我が方よ持來りぬ我れも生氣味わろけれと地頭ぢごうの任に預りおきぬ
 これを聖人よまぬらせばやとて應うち拂て大士よ渡し奉りけり高祖は御法衣の袖もてこれを受取
 おしいたゞき拜し給ふよ相好微妙の釋尊の立像よありければ尊ひかな久遠の本佛久しく苦みの海
 よ沈んで在したるも今末法第五の時を得て光を放ち出現ありしは正しく法華經の弘まらせ給ふべ
 き時節なりと御涙よかきくれて一ばし自我偈の文を唱給ひける誠よ久成の釋尊肉身の上行菩薩に
 めぐり值本地の世界よ御對面ありし其師弟の御喜びは本結大經の現證よやあらんといとも尊く思
 はれける

伊東が崎海中出現の釋尊は大士一代の隨身佛よしていま京都本國寺よ安座す八郎朝高その出現
 近き海邊よ海光山佛現寺を建立す今は總堂と號し大行寺妙照寺蓮昌寺龍仙寺廣仙寺いづれも伊
 東山と號して其靈場を護る又朝高の邸よ寺と成て佛光寺といふ
 今日將暮き夏の日けふはの樹の葉にそよぐ風もなき茅の葺端よはし近く大士は夕涼して在しけるが庭の
 切戸よ昔づる、人あり誰なるよやと見かへり給へば去つとし和泉よてゆくりなく因みたる江川太
 郎左衛門吉久種々の布施物もたらして轉來つ絶て久しき面會をよろこび我の近きころゆかりあ
 りて此垂山といふ處よ住はべりぬ近來聖人のことよ在すとき、むかし想しく訪たてまつりぬとき
 こへければ大士もよろこび年來の修行路より今は弘むる妙法の深き法門をかたり給ふにそ吉久隨
 んで御經を頂戴しこれより深く佛乘を信じ一門のこりなく改宗し時々此配所よゑとづれて供養を
 捧げ給ひけりさても鎌倉よ在ては工藤吉隆をはじめ四條通土池上つちいけ伊豆の伊東へ人を馳衣服品々
 を送り奉つることひきもきらず日朗日興も折々かしく安否を助大士の意なきを言給て共に喜び
 あへりけり時よ天台の僧大乘坊松榮が谷よ來て日蓮聖人の法弟とあらん事を願へともいかにせん
 伊東よ流罪とあれば力なし一の徒弟日昭聖人は大士に代て法弟檀越を敬育ありければ大乘坊も日
 昭師の法弟とあて給はれと望めども日昭師は兼て思召す事有て元より弟子を取給はず茲よ聖人
 の法弟よまたあれば何れなりとも御身撰みて師匠と頼み給へとありければ大乘坊しはし御蓮室よ

と、まゝ其弟子衆の立振舞またその學力を見ぬたりしが心よ感ずる處ありて一日日明聖人よ向ひ我この程こゝに在て本化の宗流を見もし聞もしいよく末法の要行は法華經に限る事を粗辨へは入りぬされば玉をつらね錦を緋が如く僧俗ともよまた御弟子は在せども我宿縁あるまや頻りよ御師を慕くもひはべる何卒我を徒弟とあして給はれとありけるよ日明聖人笑て宣ふやう御身ハ廿一歳我は十八歳師匠の若くて弟子の年長たるも似つかはしからずとて辞退なし給ふを大乗坊これをき、こは淺まき件かな百歳の翁も迷へば小兒なり背負し兒は淺瀬を放へられたる例もあり齡の多少は優劣はあらじと理とせめて馴ふにぞふれをゆるして授戒させ師弟の契約を成給ひける大乗坊日澄ときこへしは此人なり弱輩の日明聖人を師と頼みたる日澄師凡人ならん又齡高き日澄より師と撰ばれたる日明聖人の智徳人品五百年のむかしを今も察していと尊く思はれけり

日明聖人は大士よ別れ奉りてより猶その御名殘の忘れがたく朝夕由比が濱よいて、伊東の方をふし拜み御願經ありけるが或夜波間よ光明かやき靈木の流れ倚ければ日明聖人これを得て手づから高祖の尊像を彫刻し奉りこれを敬尊すること生身の居士に事ふるが如く御飯を供じ茶を獻じ丁蘭が親よつかへし無二の孝心おろそかならず在けるが諸天感應の時いたり御教免有て大士鎌倉へかへり給ひ此像を御覽有て汝が至心の誠よて我精神の此像よや入ぬらん伊豆の配所よ在て目ごろむ夢よ日明を見し事いく度ぞやと悦び感給ひけるこれ高祖大士の尊像を彫刻の始めなりこの尊像もとは武州碑文谷法華寺に安置ありしが元祿年中故有て同國堀の内村日圓山妙

法寺日性聖人の時此寺よ移し奉るしかしてより此かた現證救護の利益いちじるく世上よ被むれり又大士伊豆よおいて伊東八郎朝高が病ひを加持するとて御いたゝめの護符を日明聖人へ御相傳ありしを此尊像に因みて今にこの妙法寺に傳へ世よ尾張護符と稱して信心歸依の聖奇特をいのるもの多しと、よ又日明聖人の徒弟となりし大乗坊日澄といふは相州小田原の人よして漢名豐後守時成の子あり三歳よて父母を失ひ祖母の妙珍といへるよ育てられ亂國の世のならひさしもの大家も人よ押倒せられ程おく家も亡びければ自ら髪を切て天台の僧となりて今本化の宗よ歸す後元享辛酉年父母の邸跡を小田原にたづねて妙珍山蓮昌寺といふ一寺を建立せり又尾州名古屋妙光山本遠寺も此師の草創あり

むかし前漢の世に于定國と云へる官吏試て孝行の婦女と刑罪ければ天下三年雨ふらず又燕の恵王人の饑饉を信として忠臣鄒衍を獄舎よ繋ければ六月霜をふらず一人の非道すらかくの如しいかよいはんや國のため世のために正法を弘通する僧を流罪よ處していかで其現報のあかるべき弘長元年五月高祖を伊豆よ流してよりいくほどもなく陸奥守重時たゝならぬ病ひよ犯されて氣狂はしくあり其年十一月三日あへなく逝去し其子長時また執權時宗も毎夜あしき夢よのみ覺れ重時炎の車よ乘て泣苦しむ形状も長時の幻現よ見へ病ひならぬぞ五体麻痺胸うちさはいで何となく物怖ろしく覺へければ僧をよまた請待して一日五部の法華經を齎しめ其追善を營猶日蓮を赦しかへさずば悪しかりあんと心よ悔み今年弘長二年十一月十一日救免の狀を認めさせてありければ其彼と障

る事ありてその年もくれ今夏五月廿二日高祖伊東の御邊に立て日天子と拜し讀經ありしに異相の
 人來てこの地もはや御名殘なりとて禮拜して去りぬ大士あやみ思ひけるに其日鎌倉より知文を
 つたへて伊東に來る其狀に日遊法師教免あるべきよし仰出さる早々召返さるべし宗教久家承る
 とぞ奮たりけるこれによつて大士彼の地の人々も別れを告て鎌倉よかへり給ひければ歸依の信者
 みなしく御座に馳聚りかはるしく喜びをのべ徒弟達はいつれも嬉し涙よくれたりける其夜人
 々皆燈籠のともと聚り三年このかた當地のありさまをかたり大法すでも關東は輝き聖人の御本懷
 も稍満足の色現れたり此上は折伏を御罷あつて宗門の御教化のみあらまほしと口々も練めけれど
 も大士さらし聞入給はず今末法強毒のはじめあり折伏を捨て病に藥を止るが如く慈悲に似て慈悲
 もあらず猶このうへに他宗權門を征伐せば三類の強敵いよく烈しかるべし其時こそ御經の利益
 も現るべしとてますます説相募りけり此秋八月廿四日朝より雨風烈しく人家を吹潰し山崩れて谷
 を埋め大雷八方に鳴はためき山此の淡きは大船八十餘艘微塵も碎けるとぞ同十一月廿二日はさ
 しも賢君のきこへありし最明寺殿ととし三十七歳にして逝去ありしかば上下の諸人親に別れし幼
 稚も等しく世より力なく見へまけり又駿州荏原郡杉野の三主松野六郎左衛門といふ人あり同國上野
 ある南條兵衛の通家なるを以て高祖大士の檀越とあり夫婦とも歸依浸からずありけるが松千代
 といふ一子ありはじめその母夢に遊華の咲を見て懐妊せり八歳の時四書と誦じ生長に隨て十三經
 十七史諸史百家の書をよみよく文章をつゞり性質凡人ならず名利を物の數とせず出家とならん事

をねがひ此取に登りて剃髮しけれども彼の山の宗法心に協はずとて本國に歸り或時若本實相寺に
 遊んで學如智海法印と此事と語る智海をひそめて今鎌倉より遊といふ名僧あり實又當今の英雄
 あり我前頃この山の沙彌伯耆坊をす、めて其法弟となしぬ今は日興と改名して隨身するよしき
 、ぬ御身も佛教の根元をきはめんとおぼさば鎌倉へゆき給へとありけるよす火こそ近き頃我が同
 親の歸依ある僧あれば因縁淺からずとて松葉が谷に來り事の顯末を物がりけるよす大士も別て
 喜び給ひ遊華院日持と名を賜ひき此時廿一歳後年六老僧の一人よ加へられ能登阿闍梨日持聖人と
 稱したる英傑あり

松野六郎左衛門本願として其地一寺を建立し日持聖人を開山とすその徒弟日教日圓等その後
 を繼でありけるが後年兵乱の爲寺院顛廢し元和四年紀伊の后室兼珠院殿松野の地理狹小とて
 同國有度郡香が谷に移し伽藍を再營を給へり今の貞松山遊永寺これ也日持聖人は高祖大士入
 滅の後つらく思召やう我が師本化の再誕として此日本國宿願厚くこゝに垂跡な給ひ大法今
 大半國中に弘まつたり此國の弘通は日昭日朗等にてはや事たりぬべし開淨提廣實流布とあるか
 らは日本一國は物の數ならず願くは我れこれより外國異朝も渡り佛縁うすき續夷の諸國を弘通
 せんと大願を發し給ひ茲年永仁二年申午九月十三日高祖の十三回忌を我山よ發み十月十三日御
 正當身延山よ登りて大士の御廟を拜して御殿を告奉り明れば永仁三年正月元日輪加はつて四十六
 歳元朝の喜びよ盃を法弟に譲り寺と檀越に任せ唯一人法衣を振て旅立たまひ奥州津輕よ

り弘前よか、り路の傍の大石に題目を書てこれを日本の名残として松前より秋津に渡りて行衛
 知られず成給ひけるこ、をもつて日持聖人は今正月元日旅立の日をもつて命日正當と仰奉る
 なりそれより年歴五百年その教化利益の跡一切知るべからずといへども和漢ともよ太平久しく
 彼國々より渡る書籍いと多き中に日持聖人化海の跡と覺ゆる事最も多し行山戀志地理の部よ分
 轄阜平の西に法華の五社といふ祠あり又法華村あり題目ばかりを唱へて諸宗の僧の入事を前
 さき又蓮華寺といふ寺あり東國興地麻覽といふ所に朝鮮の開城府より題目を唱ふる妙蓮寺あり長
 瑞府より蓮華院慶山縣より法華寺靈光縣の蓮華寺みな法華をもつてその宗旨を立るよし其書に記す
 又文祿年中朝鮮征伐の時大明より加勢の軍中より題目の旗見へたる事清正紀事といふ書に記せり
 近年相州浦賀の船難風は流されて唐土よいたる船中十六人船長勘右衛門日蓮宗の信者ありけ
 れば十界の本尊を楯に掛て十六人高聲に題目を唱ふ彼の國の人々これを見て小船ともつて迎へ
 たりけれども言詔一切は譯らば彼のもの趣有衛門の袖を曳て多く寺々を參詣せしむ寺院凡十八
 ヶ寺みち常宗門よてその内の大寺を日蓮山法華經寺としるす此寺より日持聖人の墓あり石碑五
 月十八日とあり年號は唐國の年號にして見馴ざる文字ゆゑ船難はは讀ずして歸りぬと年曆異致
 に見へたりこれみな日持聖人艱難弘通の跡にしてこれと見聞くと雨夜の星の心地して床しくも
 亦尊くつゝあもはれける

此秋の最中の月もや、虧て初雁が音ぞ渡るなる古郷の空あつかしく日蓮大士一きりも慈母の事案

じわび日朗その徒弟日澄の兩人を將て旅立つ、安房の國よかもむき給ひ絶て久き我が宿をそ
 れと音信たまひしと鍼と藥と取交て家内よ人の立願ぐに予何事よやと尋ねたまへば御母公此程病
 にふして在せしが今朝しも秋の真寒に俄に病のさしつめて唯今相はて給ひぬとさきより大士へ走
 りより日蓮よはへるはと喚べきさけべき亡魂の消て果なき今はの涙れ大士へ心取直し其機感の厚
 きは定業も又かへし轉する法華の利益今一度我が母を蘇生させて給はれと本尊を侍した、め機牙
 の松よこれを掛け御經誦ありけるよ病即消滅の文よいたり釋切れたり慈母の氣息次第よ立か
 へり御眼を見ひらき手を舉て南無妙法蓮華經を唱へ給へば大士へ嬉しく傍側よ奇厚き御介保よ日
 を經て次第よ快復なし給ひ涙ながらよ御物語りかざりしられぬうれさま思はずこよよ日敷をかさ
 ねたまひけりこの頃安房上總の兩國に疫病大ひに流行し死するもの多かりければ彼の御母をいの
 り活し給ひたる其奇特を言傳へかたりつぎて大士と尊信し此疫病を攘除き給はれと願ふよぞ大士
 は白布よ御題目をし、ため其端と船の楫よ結びつけてこれを海よ流し出つ、浦々海上を漕めぐら
 し又小湊ちかき澳津の村なる井戸の中よ護符を御認めありし石を沈めこの水を諸人に飲め給ふ
 程よ忽ち疫病退散して萬人の喜悅いはんかたなかりき今その井の邊りよ寺を建て嚴長山釋迦本寺
 と稱しけるこ、に當國男金村よ小林民部實信といふものあり一子藤十郎給四才よして伴實凡なら
 ず常よ寺よ遊ぶを喜び出家を見て嬉しむ戲よも帛紗を結んで袈裟とし木の實よつらねて珠數を遺
 る父實信もこれ前生の約束をらんとて實名は實き朋友といひ幸ひ其子の出家をあり道學たかき日

遊聖人心あかれぬ昔の好みをもて此兒十一才なりけるを高祖よ奉りければいと愛み給ひ御側さらず出家の學行満足して後年六老僧の共一人として大士入滅の後身延山第二世民部卿日向聖人は此兒よ在ける

日向聖人は佐渡阿闍梨と號す博學智辯として問答に長じたり高祖滅後十九年正安二年の秋中老師天目鎌倉圓成寺に於て本迹勝劣といふ義流を立圓極實義抄を造て大ひに門派を募る日向聖人名越よ在してこれを聞召天目を召給ふて御身は大士の御側よ在の日短し在世の時曾谷教信誤まつて其義を立しも大士丁寧に教へ給ひ一みれば御身等も知事あらすやと法理を説て曉し給ひ一は尚心解す又七ヶ條を問聖人猶また其邪義を折く天目も懺悔して退きたり其餘宗門に譽れ多し後年藥原兼綱本願として上總國垣生郡藥原に一寺を建立し師を開山とす今の常在山妙光寺これなり正和三年甲寅九月三日六十三才よして示寂す

斯て高祖大士は師匠道善御坊よ教導養育の恩を報せんと九月中旬華房の蓮華寺よ入て清澄よかくと通達よし給ふ此蓮華寺は眞言宗よして住持淨圓といふも清澄にての知己にて十二年前此寺を彼の念佛宗の爲に追出されし事もありけりと身の上の昔話によそへつ、諸宗と法華との勝劣をかり給ふを淨圓種々よ難じければむなく詞よ前乘んより紙よしる一とよめんと九月廿二日これを書したゝめ住持淨圓に渡し給ふこれを念佛無間壽と名づけたり道善和尚は紫竹の杖よ扶けられ越なやみたる老の坂けはしき路をたどりつ、蓮長よ値んぞとて遙々華房の房よ來り大士を見て心

弱くも涙よくれ縁かへ一たる縁言も權實わかぬ身の果敢あさ首で止なば功き時物よみ手習ふすべをさへ教へ給ひし師の恩をいつか報する時あらんと思ひきりつ、念佛諸宗隨在地獄の業あるよし聞耳うとき老僧よ物がたり一ばし淨圓坊よ止宿して夜を日にあかね教化の法問問る心の疑すみて釋尊の本佛なり一といふよしを祈辨へて清澄に歸山よし給ひけりこ、に去る建長五年宗旨建立の其日より根ざし久しき東條左衛門この國の念佛者をかたらひ高祖大士よ種々よ難じ給へども在の魔を怨み蛇蝎の如蛇に敵たふ如くか、る邊界の念佛者果敢なき禪宗の理題よていかで嘴得ん本化の鉄壁みな逸々よ攻伏られ口おしくも嘴呀をなしてありけるが此頃天津の頼主工藤左近之丞吉隆大士よ歸依し奉り時しも十一月十一日使を華房へ遣して高祖を招待し奉るよ行程遠からぬ天津なれば午の刻頃華房を立出給ひ御伴には日朗日澄鏡忍乘 觀歸依の男女十餘人高聲に御題目を唱へつ、霜よ荒たる畔徑天津をさして急ぎ給ふ處よ彼の法敵東條左衛門染信は兼て期したる味方の腹心小手腹巻よ身を固め前後に伏たる百餘人小松原の路真中大士よ矢頃に遣すぐし台圖を喝一て打て出射る箭は雹 劍は霜妻歸依の信者のその中よ鏡忍左藤次長英等物の用よ立べきはわづか四五人に過ぎざれども手頃の獲物を引提て大士よ御怪我あらせじと目よ餘る狼藉人に馳合せしはしこらへて見へけるが東條染信馬上よ在て鏡を合せ縱横無礙に蹴たつるに予何かはもつて支ゆべき鏡忍坊は乱軍のうちよ肩先切れて動と坐す左藤次も左りの股よ矢を射ぬかれ乘 觀長英は袖を結び一玉襟きかけし袴ひも法の爲身は借まねと多勢よ無勢すでよ危く見へける處よ工藤左近之丞



文永元年
十月十日
東條景信
小松原小
高祖を
討ん
と成



吉隆は東條源頼の住士北浦忠吾同忠内を連立て大士を途中より出迎へけるが此跡を見て大ひに驚き
 妻手刀の垂緒と取て袖ひき絞り袴の側を端折つ、眞一文字を馳來るを東條馬上きつと見て弓に箭
 番ひて切て放つを工藤は躬を沈めて其箭を避射損じたりと東條源信之矢を番ひて射る處を矢より
 もはやく飛來る吉隆東條目かけて切てかゝるを景信はやく身をかはし七八合鬨たりするをき切尖
 ちる火花景信あやうく見へたる處を鬨凡十人餘り吉隆が前後左右を追取勢多打に切立られも
 とより金鏑あらぬ躬の終も多勢に切伏られ、に討死おしたりけり東條景信は自餘の者には目
 もかけず高祖大士の御側へ馬一文字を乗よせて年來の遺體もひ知れやと此方は徒立彼は馬上二
 尺七寸の大刀真向を振かざし唯一打と切つくるを大士右の御手も念珠をいたたき妙法蓮華經序品
 第一と九字をきり給へば大刀尖のびて珠數の母數ふたつむわれ餘る切先御額右筋邊より三寸ばかり
 切つくる仕損じたりと太刀取直一既よ斯よと見へたる折柄空中より鬼形の鬼子母神善神現はれたま
 ひ日月の如き御眼ははつたと睨み給へば景信が五体すくんで耐き得ず眼眩んで馬上より倒と落た
 る時しもあれ颯と吹來る夕風に霧立舞て遠近の物の聲目も分ざりければ大士はその間よこを逃
 れ天津小湊を身を置も却て使りあしかりなんと武藏住返市が坂よさしか、り給ひしに日は暮か、
 るあややく空かきくれて雪ふりいたし北風さむく身よしみて月間の御疵も痛のたへがたくおはし
 ければ傍の山根に洞のありけるを見そおはし此中よ入て今宵は此よやざり給ひ夜もすがら降野風
 に御疵疼みて惱ましく御經と、もよ夜の明るを待わび給ひしに明の朝人の往還もとだへたる此山

坂の雪踏分齡いと閑しひとりの老婆念珠を杖よ持そへて漸くこゝよ登り來つこの洞をさし覗きし
 ばし驚きたる跡なり一が我へ此郷の土生神へ日參の歩行を迷ぶものよはべる御身いかなれば尊よ
 埋みし此洞よ夜を明し給ふぞよ見まぬらすれば實頼も疵もあり此野風の疵口よ入ば御爲あしくは
 べらんよと自身被し綿帽子を脱で大師よ奉る大師はこれを押いたまき御疵と覆ひ給ひけるこれ當
 來今の世も高祖の像に御綿を着奉る事の始めと知れけりさても日期日澄の兩人漸くその在處を
 尋ね當よろこびあへるうち此日の夕つかた昨日小松原よ討死ありたる吉隆の父工藤行光高祖大師
 のこゝよ在すときよて御迎ひに参り自ら御手を取て我が天津の邸よ請じ奉り我が子吉隆小松原に
 おいて法華經の御爲に討死したるは天降佛門の忠臣なり其妻も懐妊すでに臨月よ近し吉隆存生の
 日出生の兒もし男子あれば聖人の御弟子よなしはべらんといひし事猶耳に残りぬと物附れば大師
 もしばし御涙に咽び給ひける後よこの子男子よてありければ父の遺言よしたかひ徒弟とあり刑部
 阿闍梨日隆といひ一はこれなり高祖大師は工藤吉隆が討死を憐れみ出家の儀式をもつて送葬し法
 名を妙隆院日玉聖人と賜ひけるこゝに佛敎東條左衛門景信は小松原の時顔よいさゝかある手疵と
 負けるが其疵より惣身腫爛次第に腐入その夜大熱火焔を揚五体竹の節々鏝の杵をもつて搦る、がこ
 とく牛の吼るが如き聲をあげて泣喚はり目も當られぬありさまにて相果ける恐き見ひ一室に滿て、
 妻子すら其邊りへは寄がたく非業の死を遂たるもこれ全く正法敎對の現罰ありとてこれを見聞も
 のその不測を感じ却て高祖と歸依するもの多かりける工藤行光は我が菩提所あればとて天津領内

眞言寺といふ大師を入奉る住持の僧快よからずして此宗流を誇るこゝろいいて日澄師は此一問
 答をば我に許し給れと大師あらびに日朗聖人に願ひ住持の僧を扱て眞言の邪義を論じ破る其付た
 ちまち改宗して名を日宗とあらたむ大師は寺號を賜れとねがひければ大師笑て日澄が手にて改宗
 なりたれば其儘日澄寺よてよかるべしとて即ち日澄聖人を以て開山とさだむ其寺今も依然たり
 刑部阿闍梨日隆慈父吉隆討死の地に寺を建て鏡忍坊日曉師を開山とし慈父日玉を二世とし其弟
 三代も順列すはじめ妙隆寺といひ今は鏡忍寺とよぶ小松原御難の舊地は今の聖人塚の地ありと
 いふ古今道師もすこゝの逸ひはあれど地理をもつて考ふれば其理あたる歟
 茲に年改て文永二年乙丑の春高祖大師は房州を立て下總のかたに志し給ふ海上郡桑和の眞言宗の
 寺を宿し給ふ住持の僧教導もあづかり法弟となり名をも日正と賜ふ寺を蓮乘寺と名づいたる處
 法を弘め諸宗の法敵と攻なび給ふこれより常陸の國新波山の龍を過給ふよこの山男妹女妹と衆
 を分たる靈山としてそのかみ釋の得一とよ住で法相宗をひろめたりと曾傳ふ霞が浦より筑波峯
 よ見渡一遠き山水の風景を賞譽して野州奈須よいたり玉ふ斯は近き頃中風の御心地よてありけれ
 ばしばしこゝの温泉よ湯治して御身を養生なし給ひつ、此地を發足ありけるよ原中に五尺ばかり
 の大石の見へければ御筆を染て題目を認め給ふ後人そのまよ彫刻て今に傳ふ中古火のためよ
 焼れたりとて年號見へず二年四月十三日とあるのみあり今は小兒の暇初には必ずこゝよ供物を
 奉るのへ世にこれを敬初佛といひつたへたりゆくては藤原といふ里あり里正治郎助給七十ばかり

かひなくしく大師を我が家よ迎へて師檀の契を結ぶ歸依のあまより治郎助泣ていふやふ我年老たり
 再び聖人をば拜しがたし我れ死せば誰を導師として冥路の燈とせんとありければ大師四流の旗と
 製して上行無邊行淨行安ん經の四大菩薩の名を書て是は汝が導師なるはとて與へ給ひければ治郎
 助よろこびまたへず寺を建て藤原山清隆寺といふこれより路を宇都宮に求め給ひ若島氏よ宿り給
 ふ其家の老母剃髮して名と妙金と賜ふ後年日印聖人を請じて一寺を建立して法光山妙金寺と名づ
 く此寺に夜光といへる御本尊を什寶とす宇都宮の城主下野守景綱の姉大師の高徳を慕ひ名を妙正
 と改て受戒す後文永十一年こゝよ一寺を建て名を長宮山妙正寺と賜ふ城主景綱はじめ妙正尼も高
 祖の御身の惱ましげなるをいたはり中風の病よは當國撫原の温泉功能あればとて勤めけるよぞ前
 樂所感の疾なればとても愈べしと思さねど人の心よ戻らじとそその温泉に三日ばかりも在しけるが
 程なく宇都宮に歸りしはし此地よ法を弘め給ふ妙勝といへる老尼ありてふかく大師を歸依したる
 も此時のことありけりとかや茲に十月の初めつかた上總國夷隅郡奥津といへる地より星名五郎と
 いへるもの尋來て大師を見へ奉り謹で言上やう我が主人佐久間十郎左衛門重貞元より佛道と歸
 依し領内よ釋迦堂と建て香華を供養する事ひさし近頃聖人の宗風をつたへき且その奇特と判み
 奉り何とぞ今度聖人と請待し奉らん爲に態と此五郎御使ひを承りぬとありければ大師の遠路の
 處志の厚きを挨拶し程なく星名五郎と案内として奥津に趣き十月十五日より廿五日まで彼の釋迦
 堂よおいて御說法ありけるよぞ領注重貞一門のこらす改宗し其歡喜またへず今年七歳よありける

長壽磨といへる我が兒を徒弟となす然るも重貞が季の命弟ありて竹壽磨とてこれも今年七歳ありけるが長壽磨が出家するを見て我も僧にちして給はれと泣て止すこれ宿願あらんとて子息長壽磨會弟竹壽磨ともて釋迦堂よて剃髮せしめ法弟とす同七歳あれども伯父と姪とあり大師ふかくこれを憐み給ひ伯父の竹壽を日家と名づけ姪の長壽と日保と名を賜ひ兩人ともて修學増進して後年廣くこの近國を弘通し中老僧十八人の列に入給ひけり

此興津の釋迦堂を寺として廣榮山妙覺寺と號し日家日保ともて此寺に在て弘通す弘安年中兩人心を合せて小湊誕生寺を建立す高祖をもつて山と一日家は二世日保を三世と次第す又興津妙覺寺は同く高祖を開山とし二世は日保三世は日家と定め世の陸法の交り斯の如くなりしゆ此兩山と今も同根一寺と稱す

此時も當て鎌倉よへ猶うちつゝきたる凶變も今年も奇怪の事のみ多かりき六月三日秋田城之助義景十三回忌の大法會無量寺よて行れ十種の供養を遂若宮別當隆辨僧正導師として說法あり伊勢入道行願始め並居追善最中又大雨大風荒いで、本當の長梁くじけ參詣あまた即死しければ諸人は命大事と逃歸る龜が谷の山々崩れ落家人もも牛馬までみま土ようづめられ親類縁者を見廻るとて鋤鍬を擔て人々の馳あるくも前代未聞ときこへけり又八月十七日相模武藏大地震十二月四日の夜彗星一天より亘ること去年七月五日の曉の彗星より廣大にしてその芒尖七十餘度に及ぶこの天災いかゝあらんと掃部頭範元をはじめ晴茂國繼等の司天曆學の輩出仕にて將軍家の庇の御所より出御ありて是を開召在府の大小名は賢の子の牀に列座せり司天の官人百上告やうむかし皇極帝の時

初て此星出てより今に至るまで八十五度一度として凶變あらざるへなし傳へいふ其芒象の差とてろ必ず災變ありその光りの色青き時は王公將軍破られて四海困窮すその色赤きは盜賊國よ起て上下の歎ふかしたまた其色黄なるは女人權威と振て國家みたる又色の黒きは海邊に賊民起て中國を悩ます毒惡國土よ在故にその色大に顯るゝなり天この御大事これに過すとありければ府内宮寺まで仰せて御祈り初りける若宮の僧正金剛童子の法と修し安祥寺の僧正は如法尊勝王の法を行ひ陰陽師業昌は天地災變の祀を修行し同國繼は風星の祭をす又翌日陰陽師少允晴茂を御所の西の齋よ召て如法泰山府君の祭祀を行しめ將軍出御有て鞍置馬一匹製造の劍一口手箱二合よ紺の絹を入れて取せ給ふ賊よ重き御恨とて將軍ことよ恐れ給ひけり此御祈正月十二日に始りて魔範なる鎌倉中の春氣色も絶て餘る人もなく潜み渡りて心さびしく日を送りける中よ二月朔日の朝日は出てありけれども空墨のごとく暗くして物のあいろも定かならずたゞことあらぬ日の光りやと思ふうち巳時雨ふりいで、小龍あし申時よいたり雨の色うるしのごとくこはいかよと見るうち頻りに泥をふらしその夜よもなりけるよ樹々の枝葉は泥よおされて倒れふし鎌倉の町中は山の中をあゆむが如く開闢このかたの珍事かなとこゝろあき野夫農婦まで身とふるはして恐れけり又時の將軍宗尊親王も北條一族の我意よ容められ思ひよ懸る月と日の恵みかひあき御身を歎き海には御船情と聞へさせ給ひ密に松殿付正法印殿をさしよ名僧を招き執權時宗を副伏なし給ひけるが隠れたる

は顯れ易く隠謀はやくも露顯よおよび將軍も是非なく夫人興よ召て京都にかへり給ふ十一歳の時
 又鎌倉よときめき下り現ともあき十五年久しく住馴し御所を立いつるとその名を惜み給ひ固
 瀬川を渡るとて
 かへり來てまた見んとのかたせ川濁りし水の澄ぬ世あればと遊ばしてなくく帝都に登り給ふ
 其御子惟康親王わすか三歳よして征夷大將軍よ任せられ天下の御主と成給ひしも偏に御幼君を名
 として政道を自在なす北條の討らひとこそ知られける今年文永丁卯高祖大師の御母妙遊尊尼久
 しく病の床よ臥て在しけるが已よ去る年妙典の經力を以て定業を所延たる事四年あり今は此世の
 縁もふれ限りなりとて臨終正念の御題目の外他事なく見へさせ給へば大師も御側を去すして晝夜
 看病ありけるが日期日向日澄諸師もともよ師のちからを扶け介保し奉れり檀越工藤行光佐久間
 重貞小林實信は鹽に新よ一切の費を供養しければ妙遊尼は何も事屬たるよしもなく其秋八月十五
 日睡るが如く御臨終ありければ大師も悲みよたへたまはず躬みづから葬式をいとなみ塚を築き石
 を建て佛事といとなみ往て歸らぬものは年月也わかれて再び相見ざるものは親ありとて百日の間
 其御墓よ讀經し名殘おしくも房州を立て下總よ遷き給ひけり御両親の御墓のうちよ寺を建御名を
 合て妙日山妙遊寺と號す又遠州貫名の御屋敷跡よも貫名山妙日寺を建立しともよ悲父妙日尊備と
 以て開祖と仰げりこれより大師は上總國垣生郡にさしかへり給ひし處踏すがら雨のふり出ければ
 洩りのうちの辻堂よ立入給ひよこ、は傳教大師の開基よして大悲山笠森寺とて觀世音の靈場な
 りければ高祖とありあへず

うきに降る涙の雨よぬれじとてけふ笠森を身よ着するかなと口ずさみ茲に一夜を明け給ひしよ
 戸の間しらむ有明がた墨田の里ある高橋五郎時光といふ人なりとて畏るく此堂に入來り大師の
 前よ掌を合我は常よ此尊像を持念するよ昨夜更闌て枕のうへに夢かあらぬか觀世音現れ給ひ我が
 堂に尊き聖人あり早く迎へ奉れよとありければ夜霧を拂て御迎よまゝいりぬとありけるよぞ大師其
 家に入て教化を給ふ後年中老日秀聖人當地に寺を建て庭谷山妙福寺といふまた滋原の邑津野麻
 兼綱も高祖を請待し檀家と成て歸休淺からず斯て大師は鎌倉よ歸らんとして若宮の邸へ立寄給ひ
 しよ主富木胤繼大師に向ひ奉りもはや今年も餘日よし殊よ近年覺へぬ寒さあるに柱て此方よ年を
 越給へと強ちにとやめられ大師もそれと心定めあら玉の春を待たまひけり此年のうちに古河の邑
 主千葉氏富木の一門ありとて大師の徒弟となり名を日胤と賜ふ建治元年木尊を御授與ありて故
 郷古河にかへり法興山妙光寺を開基せり一日富木胤繼大師よ言やう我に一子あり性幼學問を好む
 今度日向師聖人の御側よ在て立振舞を見てしきりよ出家せんとを願ふあはれ徒弟の數に入給はら
 ば彼が隣伴一家の慶びあらんとありければ大師これを許して大戒を授け名を日頂と召る時よ年十
 六歳なりける大師も文永五年の春をこよ迎へ日頂をも伴ひて霞と共に下總を立て鎌倉名越の御
 港室よかへり給ひけり

日頂聖人は伊豫阿闍梨と號す真間山弘法寺は天台宗の檀林ありしが先年住持了性僧都富木殿

又論じ破られて還天せしより學寮の所化も四散あり失せ今は住する僧も亦此寺は當木代々の香華院にありければ胤繼ろの無住あるを悲しむ大師日頂こそ有縁の山なりとて入山せしめ開堂ありしは廿六歳の時なりけり後年大師入滅ありて三回忌を池上にて誓みし時日蓮聖人は鎌倉の宗論の事ありて此法會は値給はず父日常大ひも怒り宗論は一生の所作あり三年の法會は又と來ることなき殊も其身六老僧の一分もありながら不義不孝の所爲なりとてこれより面會あしたまはず日蓮聖人その過失を悔て中山の門前より來り銀杏の樹のもとより立て寶塔品の樹を稱て七日の間晝夜御赦あらん事を願へども聞入給はずかくて正安元年の春日常病に罹りし時日昭日朗兩聖人その病を訪ふ事春日頂師の過を許給へども聽かずその躬も若て在たる法衣を脱て兩聖人は渡し給ひ三月廿日日常聖人示寂す日頂聖人は邸よりいたり勘氣の身なれば門より入給はず闔は蹠づき兼て賜ひ御紀念の法衣を阿の手に捧げ御經を讀誦し聲を限り泣て立去給ひしがそれより何地に在しけん其終る處を知らず日常聖人無慈悲の親に似たれども高祖を師依するの厚きなり日頂聖人又不孝の子に似たれども宗義を守るの固きなり此親此子兩人の行狀その是非得失凡慮の裁断却て恐れありとぞ思はれける

昔天竺に獨體を賣者ありけり此を賣者この獨體は斯爲んと思ふ事を立願してこれを賣るよいかなる願も協はぬはなし其獨體の耳の孔の深きと淺きとよよりて價も高下あり常も正法を聞たる耳は深くして一生佛法を聞ざる耳はその孔淺しとかや茲に日蓮大士今末法に入て二百餘年日本國の萬

人その耳の孔の淺きを憂ひ給ひ本地秘妙の大法と説諭し給へども身の爲にする良藥は口も苦かる世の謔語却てこれをいみ悪みまわらすれば愈々彼を不使と思召給ひけるは誠も大慈大悲を聞つべし今年戊辰の春唐土大元の世祖忽必烈その國の至元三年黒的といへる臣下を使として書翰を日本に贈る朝鮮の國王王袖添書をあして臣下潘阜といふものを案内として正月十八日京都に達す其大元の書翰を披見るも大蒙古國皇帝より日本國王に言す我太祖天命を奉じ宋國を亡し今中國に居て四海を治む高麗國もはや我が手に入願くは日本我が國と好を通じ和親して相交らば四海一家の如くあらん事を思ふて使を遣す處ありとあり又高麗國王の添書には我が國大元の命に従て其德に懐く皇帝今日本と好を通せんとするは利慾の爲もあらす偏に萬國一致の睦をささんとの心なり早く貴國の返翰を待と書たり京鎌倉の詮議區々もて其書翰の文言無禮なればとて返翰に及ばずそのまゝ使者と還歸されけるこれ大元蒙古の日本また、りをあす始よて高祖大師兼て安國論も認たる諫言こゝに符節を合せ末代の不測これ過たるはあらじとぞ思はれける此大蒙古といふ國は唐土の西に當る戒夷あり其先祖の起りは一人の寡婦あり奥深き關のうちより獨起ありけるが毎夜も天より光明さして其婦の懷中より入其光も感じて自然と孕めり月滿て安産し三子と産中も母の男子學端生れながらよして機杼拔群なり一も其子其孫つゝいて才覺すぐれ終る廣大の威勢を成一體と合鉢し雲中九原の地を侵して九十餘部を征伐し而河山東數千里の間は打殺さるゝ人民算を知ず燕片を亡し高麗國を降參せしめ六十六歳にて病死しこれを太祖皇帝と稱し第三の子窩淵後を繼

で太宗皇帝となり、西の丘汗城を攻落し、命を亡して宋國に及ぶ太宗死して、憲宗位に即その命弟忽必烈世を繼いでこれを世祖皇帝といふ至元元年都を燕京に遷し、易に大哉乾元とある、帝は依て元の世と唱へ、今四百餘州を伐綱め、其威勢高麗までも靡き、虎も畏る、國の名を大元蒙古と喚び、なんありける、今其國王日本を奪ふ心あれども、表は仁義の詞をかざり、此國は使をつかはす事たとへば、密を塗たる劍のごとく、日本の厄難の時よきはまり、その危きこと、風前の燈、尙早し、あらずいか、變りゆく世の機ぞと思ひ、煩ふうち五月十二日の朝日輪ふたつ並び出たり、關東關西見ざるものなし、此時は當て日蓮大師書通を認て、奉行宿谷左衛門尉光則に捧ていふ、抑々正嘉の大地震、文永の大筋、屈伸、また疫癘日運、これを御經よ考へたるに、念佛禪宗等正法の法華を邪問なすゆゑ、此禪を招けりも、我が諫を用ひ給はずは、他國侵逼難とて異國より此國を犯すべきよし、去る文應庚申の七月一巻の書に公の御手を以て御記よ奉れり、老かしてより、此方既九ヶ年、今年大元蒙古より使を此國に來らしむること、我が先言よ符合し、終れり、この異國の敵を招くものは、念佛等の諸宗あり、又此外敵を退治するものは、唯日蓮一人あり、國の爲法のためいさ、かこれを言上すとす、奮たりける、奉行光則有無の返答を、しこれに依て、其年十一月十一日、又一通を書て、執權北條時宗にたてまつる、天下の安危存亡は法の權實邪正に依て、其年安國論よ述たるが如し、願くは當時諸宗の興者、知識を殲り、あく、因沓所よ召れ、此日蓮と掛合せ、御前よおいて、彼の宗々と我が義と邪正明白よ、問召、辱られ、其邪惡の宗を捨て、此純圓一實の御經を御歸依あらば、此國の安泰ならん、事草を反すよりも、速ならん、國を治め、天下を平和とす

るの根本はこの一器の宗論ありとす、しける、其はか平の左衛門尉、賴朝、北條彌源、太極樂寺の良觀、建長寺の道隆、大佛殿の別頭、隆觀、淨光明寺の行敏、祐福寺多寶寺長樂寺以上合せ十一通の書をつかはして、其邪義を責し、かば此寺々はいづれも、御由緒ありて、輕からぬ、寺門あれば、其日蓮の書よ添書して、各々訴上るよ、上下萬人これを傳へ、喋々しくも罵りけること、又先年北條義時、蝦夷の備として、安藤五郎をつかはして、奥州津輕に岩を擲へてありけるが、此秋、蝦夷謀反を企て、東國よ乱入し、安藤五郎とれがために討死して、皆さへ焼うたれたるよし、鎌倉よ注進す、大士これを聞たまひ、法弟、檀越よ宣ふやう哀れあるかな、我が日本國、蒙古西に動き、蝦夷東よ叛き、國よ種々の變災起るこの災難の根を知る者は、絶てなし、反て法華經の行者を賞、憫ます、ゆゑ、愈々國に災を襲ぬるを知らず、今よ見よ、諸宗の謾言を信じ、此日蓮を捕へて、又々流罪、死罪におよぶべし、我弟子、檀那と名乗ん者は、心よ懸し、思はるべからず、妻子を思ふことなけれ、權威よ畏る、となかれ、命惜さよ、法華經を捨たりとも、終に蒙古の爲ようち殺さるべし、とても協はぬ身なりせば、一乘法華の爲よ、骨身を碎き、此生死のきすなを以て、佛果を得らるべし、と進退きはまる世のありさまをなみださ、がらよかたり、給ふ明れば、文永六年二月廿一日、噯、よ月三輪並び出たり、人皆奇怪として、見物す、茲に極樂寺の良觀上人は、世よ聞へたる、律僧よして、此年月伽藍を造立すると、八十三ヶ所、大塔を建ること、二十一、一代經藏を取立、たと十四部、諸國よ、櫛を運すこと、百八十九ヶ所、路を造り、坂を掘に、その身よ二百五十戒をかたく、たもち、三千の威儀を刷、正女人の手より物を取らず、青脚を踏す、戒行堅固の生如來なりとて、御所館の御付、何淺からず、世の

人其道徳は懐くと小兒の母を遊ぶが如し今日しも御節は侍候し執權奉行人と膝つき合せての物語り我戒律の一案を日本國一圓よおし弘め第一國土は酒を造ることを禁制し米穀をゆたかよして嘯口論放埒騷の根をたやさんと此年頃をれを願へどもいかんせん日蓮といふ惡僧は幼げられ其緯さへ得果さず嗚呼寸善尺魔あるか春日蓮死なすば佛法は乱離なり國土も安穩にはあるまじりかけたる天目の茶も毒とされこの事は超て愚僧が歎なりと誠しやかに聞へ揚る其調奏は未終に高祖の御大事とこそ知られける斯てこの頃甲州の農民なりとて彼處の往還此所の辻と大士よつき纏て其説法をき、居たりしが其法理といひ立振舞を見てこれ日本第一の名僧なりと思ひ定め大士の御菴室よ來て戒をうけて改宗す大士その名を問給へども甲斐の國巨摩郡今諏訪といふ片山里の殿の身よして名を聞へ奉る程のものにはべらすとて立去ける幾程もなく一人の飛を携へ來りてこれは我が長子よて侍るあまりは聖人の尊く覺ゆるぞ何とぞこれを法弟よとし炊の扶ともあし給れと願ふもぞ大士その兒を御覽あるは眼光人を貫くこれ尋常のものよあらすとて法弟として名を日進と賜ふ時よそが父も側座よしありていふやう願くは我をも御手を勞して剃髮せしめ給へ御門前塵を拂ひて御庭の草なぞ除て事奉らんとあるは大士願て髮をおろし久木坊日元と呼給ひ親子他事なく仕事けり

久木坊日元は俗姓嵯峨源氏安部貞任が末裔なり貞任滅亡の時その母懷妊ながら甲州の山里よりかりありて茲にかくれ其出生の子姓を樂て農民とある久木坊は其正嫡なり日進師此時十一歳後

に三位阿闍梨と稱す十三歳の時日朗聖人と、も宿谷の土の半よ入十九歳の時桑が谷は龍象坊と問答す正安二年駿州富士郡柚野村は竹葉山正法寺を草創し正和二年五十五才の時身延山第三世を相續す同四世日善聖人も久木坊の子よして此日進聖人の舍弟なり
今年卯月の初旬大元蒙古より又書翰ともたらして對州に來る宗對馬守宗資これを追かへす蒙古の使その歸るさよ對馬の國人塔次郎彌三郎の兩人をとらへて船に載て歸國せりとて鎌倉の風評取く、にぞありける或夜久木坊日元大士の御肩を摩ながら語るやう我が生國は至極の山國よて人間も木石のやうよはあれど山の姿水の風流かへつて見處多し秋よりは寒冷の他國よ勝りて凌ぎがたけれども青葉よしげる夏山は木陰冷しく岩間を下る瀧津瀬は浮世の塵を洗ふが如しいつかよき折を得て聖人を伴ひまわらせたしとありけるよ去ば我もかねて願はしきよとありいでや甲斐の國より富士山よ登らばやと思ひ立日を黃道吉日これより旅の要意しつ程なくこれが遣しるべにて甲州吉田よ着給ひける木より久木坊の職人なりとて神職總屋平内の方へ入奉る平内宮んで教化をうけ授戒して本尊と賜ふこの近き四邊法を聞て歸依するもの多し後年こよ寺を建て吉祥山上行寺といふ大士此地は滯留のうち信者十人ばかりを案内として富士山を登山あし給ひ時よ天晴風靜にして十三州は一箇の眼下に遮り紙よ開淨無雙の名山ありと賞歎なし給ひ兼て書寫ありて法華經一部を山の半腹よ埋め巖石の上よ座して暫時御經あそばし給ひける其地を今に經が嶽とて其古蹟とよむ此末法萬年廣布の基を固めんとの御意ありといひ傳ふそれより山を下て小立村に入しばら

く懸ひ給ひしは此里人かねて聞つる日蓮聖人ありとてこゝに群衆を題目と唱へ各々手よく紙を
 さしげもちて御本尊を請高祖これを敷へ見給ふに二十八枚ありこれ御經の敷也とて此紙をひとつ
 は粘合て一紙とあし大筆も題目を書て村長渡邊藤太夫と渡し給ふ今駿州岡宮光長寺に傳來一岡宮
 二十八紙の曼陀羅とて世も名高しそれより山梨郡勝沼北原を過て田並みやどり給ふ主翁の願にま
 かせ大黒天と書て授給ふ今も存在す又此地は黒川といふはその頃金銀山有て千兩餘の産賦しか
 りしかば大士も此里に入て弘經なし給ひけりすべて當國の大法有縁の國もやありけんこばしの弘
 通も改宗のもの多くいま勝沼より上行寺黒川も法蓮寺北原も立正寺等有てその靈跡をこゝむそれ
 より州州足柄郡板橋といふ地もかゝり象が鼻といふ處の石も腰うちかけ此わたりより安房上總の
 方波問はるか見ゆるまゝ古郷をつかしくおぼしめし一ばし兩眼を閉て妙日妙蓮へ御追福の御題
 目と唱へたまひける後より明慶聖人この地も寺を建て象鼻山妙福寺といふ高祖大士は漸く長月の頃
 松坂が谷に歸り給ひしは歸依の男女は是を尋び不歸依の族は又いかある事をか育山んとたがひよ
 惡み語りけるさるゝ年改りて文永七年午の二月十四日慈父妙日尊儀の十三回も當りければ大法會
 を修行して厚く其冥福も備ふ此頃些いとまを得て十章抄秀句十勝善無畏抄等數篇をあらはして
 門弟中に示し給ふしかる處に安房上總の檜越より鎌倉へ人を馳此卷の末より夏まかゝり又々疫病
 の流行前年の如しあはれ聖人御渡り有て其横死を救ひ給はれとありければ高祖佛工師に命せて我
 が肖像を彫ましめ白布に題目を書して其木像の手まかけ是を便に渡し此像は我に與る事なし持歸

て前年の如く浦々の海も曳渡すべしと仰ありければ彼の國の海岸も是を軌行し程なく病難うすら
 ぎける國中大ひに喜で改宗の者多かりとぞ此尊像今も江戸も傳へ布引の祖師とて牛込幸國寺も
 安置せりかくて今年も吳羽鳥橋よりはやき年月のあらたまりたる文永八年辛の未世は春なれど何
 となく陰ならぬ近年近日人の心も暖夜の影さためなき心地して花さへ待ぬ彌生のはじめ大略の砂
 を蹴立つ、京都よりの早馬はまた何とか出来つるも耳を側てきくもうき大元慶古の國王より兩度
 の使も返事あきその怠慢を憤り趙襄彌を使として又々鄭紫も来るよしの注進もぞ有けるかく靜な
 らぬ世の中にかへ加へて此春より雨一降も降ずして夏もいたりて大地乾き田植時ある入梅にさ
 へ雨無催す氣色もあく六月には江河の水涸はて、魚は炎天に焦れ草木は色をうしむひ井の水出で
 濁を浚べき術もあく人の命も頼なき大旱魃海の潮さへこのころは引潮有て潮汐なくこれぞ天下の
 大事と見ゆるまゝ極樂寺の良觀上人を御所に召し貴僧年頃持戒の法力をもつて雨と八大龍王に請
 四民を潤し給はれと懇も台命ありければ良觀上人身は不肖なれども佛力法力をもつて應て験を現
 し奉らんと御受をなし退出ありしは尊くもまたいさましく見へよける此良觀といふは大和國瀨川
 の人よして姓は伴氏十一才の時より赤貧山も學問し十三才の時五辛肉食を断じ其頃飛行堅固の聲
 たかく建長四年關東も下向して律宗を弘む北條義時の三男陸奥守重時ふかく此を信じ極樂寺を建
 立す後入道して其境内も別荘をしつらひ茲に念佛して終る其子長時樂時いよく信仰すゆえを以
 て今度この雨請の大任を仰つけて其名僧の徳を天下に知らしめんとといふ北條家一門の結構といふ

もはれける

極樂寺は靈山と號す真言律宗より南都西大寺の末寺なり其頃關東十三ヶ寺御祈願所のうの一にて七堂たかく雲に聳へ境内四十九院世も目ざましき大寺あり今は衰廢して本堂と寺中の吉祥院のみ残り寺領今は九貫五百文を寄らるむかし其假上人は佛門前の西桑が谷といふ地に一院を建せ頼なき病人を聚め食料醫藥を施し別て癩病は前世の宿業あればとて戒と授け念佛せしむ此時癩病人多くあつまるより元亨釋書に見へたり世に癩寺といひ一は此也えあらんか

一輪の梅を見て天下の春をしり半抄の水を汲て大海の味を辨ふ淺きはもつて深きを知り小は以て大に喩へつべし茲に其觀上人既も天下の台命を受けて靈山が崎にひろく壇を拵大慈大悲の雲を招き甘露の雨を四海にそゝかんものと六月十七日早天より終法始るよし高祖大士これとき、給ひこれ幸の時節なりとて其觀上人の弟子に入深の道淨坊防坊といふ二人あり大士此兩人を招て宜ふやう我は經文も任せて律宗を破滅とせよ其觀上人はまた我を惡僧とのしる鎌倉府内の上下萬人心の眼盲たればいづれを善と譯る人なし其觀上人今度雨を所給ふよし道理よりは相違又その證據より現證よし事なし此般の雨請をもつて其觀上人と我と法の邪正を定むべし若七日の間は雨降ば我この法華經を捨て其觀御坊の弟子と成鐘を敲て念佛すべし若又雨ふらずは其觀上人我假の心をひるがへして来て我が弟子と成て一乘法華の行者と成給へむかゝ傳教と護命と守教都僧と弘法大師と雨の祈りに依て法の勝負を定めたる先例ありと宣へば兩人並躍してよろこび極樂寺に歸り斯

と告げるに其觀上人も心得給ひさらば一七日のうちは大雨を降せ日蓮を我が弟子となし鎌倉中の目を驚さんと百廿人の僧を八面に列坐せしめ上人は中央の壇に登て修法なし給ふ遠近の男女數千人その奇特を拜まんと處席まで肩並んだり續經の聲天に響き念佛のひびき地を動し日々夜々の丹誠も既も五日も及ぶとも雨の降べき氣色もなし松葉が谷より御使を立られ今日もはや第五日雨の降ぬはいかにぞと有ければ其觀上人聲あら、げ今は修法の真中なりとこたへたりこれより泉が谷の多寶寺の僧二百人を助行にたのみ請雨經といふ御經を聲を限り讀立て既も廿四日になりければ大士より今日満願の日ありければいかよと問せ給に其觀若し息をつき此上七日と日を延ければ大士その意も任せ給ふに天下の雨請といひまた日蓮と法のあらうひ跡ありと近郷遠村よまでいひ傳へその勝負を見物せんと追々増る數萬の參詣金も爛れ石も焦る、六月の炎大雨氣絶たる一百餘日靈山崎の人の山崩る、ばかりの其中も聲も嘔たる三百餘人と、を一世の大事ぞと汗へ五体もながれても雨もあらねば誰も勝よしと其觀上人いかゞはせんとおぼす處も廿五日より大風吹出暑氣を巻て熱湯の如き風天邊より吹おろすより鎌倉中の土煙塵空高く吹立て眼鼻も明ぬ祈りの場所汗まぶれし砂埃人は誰とも別がたくたがひも顔を見合て眼珠右眼左眼ばかりなり其時松葉が谷より高祖大士使をもつて賣給ふやうむかし能因といふ破戒の僧あり早の時伊豫の國にありて雨請のうたをて

天の川苗代水をせき下せ天降ります神もらば神と讀たりければ

大雨忽ち降来り又婦女の和泉式部といへる婦女も歌を詠て雨を降らすとさくか、破戒の能因論
 乱の婦女わずか三十一字をつくしてさへ易々雨は降たり飛行墜因の御身といひ三百餘人の丹波
 助行二七日まで祈りても雨一滴もふらざるはいかにぞや此をもつて思召せ三尺の小溝を踏待ざる
 者が二丈三丈の堀を越へしや世々手易き雨さへ降し文ぬ人が一期の大事たる往生成佛協ふべきや
 母無過上の法華經の行人を思はざるばす御身こそ此早を招き民の歡きを成し給ひし根本也千日
 萬日祈り給ふとも雨の降べき道理をし其觀上人實の出家よし在すならば我悔を棄て來り給へ雨と
 降す法を佛に成道とを教へ奉らんいざ、らば末法應時^{まつぽうおうえいじ}の經力を見給へとて御弟子兩三人うち隨へ
 靈山が崎より西に當り田邊が池といへる古池あり大士彼處へ懸き給ひ小杖子も御經を書した、め
 田邊が淵に是を流し御聲しづか又讀經はじまりすて御經二の卷よいたる頃ほひ南の天又一烈の
 雲起ると見へしが忽ち大嵐ふひろがりてさしも烈しく吹たり一風も止海上恰も鏡の如くいと穩か
 り雨降いで田畑山林一とろくと樹芽草木石瓦うるほひ初し法の雨三日三夜ふりつゝき人畜鳥類昆
 虫まで活かへりたる色見へて天下の喜び大方あらず是奈く八大神王の擁護よて法華現證の利益と
 ぞ思れける

田邊の池は七里が濱より西へ入こと五町ばかり余洗深の上なり今は懸て田となり中央の高き處
 よ一丈ばかりの石と建て題目と彫付たり此南の田の中に蛇枕といふ塚あり其池の畔然として
 物凄し鎌倉繁榮の頃この池も雨請のこと往々東鑑よ見へたり

魚は水と己が世界を見魚鬼は水を火と見天人は瓊瑤と見人間はこれと水と見る全し一の水なれど
 も一水四見の道理に其身の業よりこれを見るの姿全じからずとかや今正法現證の力をもつて妙
 法の雨天下を潤せきも信するものはすくなく識るものは愈々多しとす茲も七月八日扇が谷淨光明
 寺の行敏といへる住僧書をしたゝめて松葉が谷に贈る大士これを披き見給ふ法華經の外一切諸
 經皆佛の妄語といひ念佛を無間といひ禪を天魔と罵り大小の戒を持つを國賊と誣らる、よしこれ
 輪外の佛敵ありと種々も恐口を雜へ喧嘩欲きの難問を書たりける大士も今は輪判以て乱妨の基を
 らんとおぼしめし首ひ越されたる不審の條々自己の問答無益あり天下の決斷所よゐいてこれを答
 へん宜しく其とを計らるべしと返答す今日しも十二日孟蘭盆會の御心掛の處に四條頼基防奉りけふ
 は慈母の忌日なりとて白米一斗油一筒錢一貫文を盆の供物よ奉り此孟蘭盆といふはいかなるもの
 起りよはべるやと尋奉るよ大士は扇を笏に取直しさればとよ昔目蓮尊者の慈母一飯の施しを借
 みて人又與へず其上よ與へたるよし偽り給ひし慳貪の罪より五百生が問假鬼道に墮給ふその御
 子目蓮尊者佛の御弟子となり其慈母を救ひまゆらせしよし御經よ見へたるぞこれ孟蘭盆の始なり
 けるその餓鬼道三十六種あり食吐食水有財無財なきすべて心に飽足ことを考らす地を救はんには
 法華醍醐の法味あらばは協ひがたし御母妙法尼の靈魂も此施餓鬼の功德よて佛にあらせ給ふべき
 よし細々教化なし給ひけるか、る御物語の處へ入深道淨坊あはたしく尋きて我今朝より淨光明
 寺よ遊びて在しよ此釋迦人より相對の問答御斷ありとて行敏和尚聖人の流義を述べ非難したる

と一通となりてこれを御館にさし上るとて見せられたるを我もかたの如く後生を願ふ心よてあれば
 ば潜かよそれを寫しもて参りぬこれ見給へとさし出すを大士手を取りこれを讀で斯淺々しき法門
 は答へ方もあらざれき言すば愚なるものは詰りたりと思ふべしさらばとて料紙視の塵うち拂ひ激
 まぬ筆の走り書さらしく認め終り是を入澤の入道と渡し給ふ其論義のするべきと電光のごとし
 行教もこれを見て塵を消し口籍んで見へけるがいかなとも爲すべく所詮我が力よは協ひがたし
 とけ二日間註所へ訴状を差上げるやう近來日蓮といふ惡僧佛法の次第も辨なく諸宗門を地獄と罵
 り愚味の男女を誑らかし彌陀觀音の像を火と燒川と流し劍戟兵具なき室の内よかくし持無頼の流
 者をかたらひ聚め前年流罪御赦免のうへは惡行をも止べき善の處左はなくして亂坊以前より十倍し
 尺觀上人雨請の時も天下の御祈の場所と知りながら再三弟子をつかはして嘲弄もおよび此早魃は
 禪念佛の事なれば建長寺淨福寺大佛殿等燒拂ひ諸宗の僧の頸を切らば雨立處も降べしと惡行雜
 言古へ守屋が惡逆も付の頸とされとはいはず願はくは此毒惡の日蓮が邪義を停止あらば佛法王法
 ともにさかへ天下の萬民安堵も住しその御仁徳を仰がんとす訴へける又尺觀上人も一通をさしび
 てこれを歡き訴へ其餘諸宗の本山本寺力かひなき法法師までその虎の威と假んとて我後れじと訴
 へ出又はひそかに北條の御一門後室尼御前奥方姑女達も取入て彼日蓮奴が此程は時頼重時兩君を
 無間地獄に落たりといひ諸宗の寺を燒拂ひかねて御歸依の道隆禪師尺觀上人の頸を切と罵るよし
 ありあらぬ事まで細々に目上るよと奥方尼御前も驚きたまひそは勿林なきいひ條かな日蓮とか

いふ僧の疾いましめすやと婦女心のやるかたなく唯一筋も大士を恐み奉る此内外の騰奏つもりて
 九月十日日蓮問註所へ出よと召寄られ諸寺院より御訴出たる其條々逐一尋ね問そのうへ先君時
 頼重時御兩代地獄も預給ひしと云よしそは實もやと眼も角立て睨らまへば大士つゝしんで世界と
 照らす日月さへ法華經の御教とあらば惡道はのがれがたし況て人間世界の國王大臣落ざるべしや
 此法門は御兩君世に在す頃よりの事として今新清しき沙汰もあらすこれまで我が説開きたる法門
 の逸々皆これ如來の命言にて一言半句も日蓮が論を若それ諸宗の騰奏と併じ我を無實の罪よ
 りおこなはし國も同士討の合戦起り果はまた異國より此國を征伐せんと必定ありこれ又大集經樂師
 經の文よして強ちよ我が強言にあらす自他の合戦も一超らば後悔その餘あるべしと白洲を打て
 述べたまへば列座の官吏顔見合せかへす詞もあらざりけり全十二日の朝立正安國論を持参し平左衛
 門尉が邸よいたり具參を請頼綱に向て宣ふやう一昨日問註所の見參悦び人まいらせたり日蓮出家
 となりしより八萬寶藏を開らき諸佛の本意を明らかにしたり其實は妙法蓮華經の五字なりしかるを上
 下萬人其正路を塞みて流布を妨ぐ諸天善神これ怒て國土を守護せず七難並起て四海安穩をらす
 先年立正安國論を造て執權最明寺殿も獻覽も備へしより今十二年外國既も日本と觀ふよいたる
 まで其書も考がへたるが如くすこゝも違はず日蓮日本大一の忠臣なりいかなる御賞美にも預るべ
 き處却て快よからぬ見参も入事案外の至り也我邊は當時威勢の御家にして天下の寵用輕からずと
 きく願くは此一巻をかさねて御館も奉り天下泰平の御仁政を扶け給へとて安國論取出しこれを願

綱は渡して歸し給ひけり

平左衛門尉頼綱は入道して果園を號す執權北條時宗の近臣より其頃管領と稱する程の威勢あり時宗も、も又頼綱を信じ太子を實戀し奉ること度々及ぶ法政の現罰これより二十六年の後嫡男家綱家督を繼ぎ其身は入道して猶天下の管領にて驕を射め世に時めき其門前を乗うちする人さへあかりける時頼綱謀叛を企て執權貞時また將軍をさへ討亡し我が二男依安房守を將軍になさんと膽太くも巧みけるを嫡子宗綱これを誅めければ大望路顯の端なりとて宗綱と殺さんとす宗綱逃て此事を貞時言す是より依て父頼綱をらびに飯山の兩人を欺いて殿中より逃げ逃意を討てその親子を殺し一家の所領を沒收し妻子眷属は鎌倉を追出す嫡子宗綱は忠あるも似たれども父の悪事を訴人せしよ依て佐渡に流され其處にて死せりとて現罰の的而頼の如し

唐土楚の國に平和といへる賢人あり或日荆山に遊んで一の石を拾ひ得たりこれを磨かば天下第一の名玉となるべしとて國の厲王又獻す厲王五人を召て見せしめたるよこれは玉よあらす左も右も石ありといふ厲王怒て國よ多分の費とたてんとする事大罪ありとて左りの腰の絡を切て山中に追放つあまたの年月を経てその太子武王の世となりければ平和又此石をさけて磨かん事を願ふよこれ玉にあらす國王を欺くありとてまた右の腰の絡を切らる行歩かなはず操窟の洞のうちには彼の石を懷て泣事こよ二十年武王崩じさせ給ひ其子女王の御代となり山中に御待ありて闕らす平和と見そなはし深くこれを憐み給ひよしや玉ならずとも國王三代二十餘年の念願なればこれを協ひ

得させんとて數萬の黄金を費してこれを磨かしたるよ不測も天下に類ひなき名玉とありて夜の御幸よ車十七輛を照すゆゑ照車の玉といひ又市中には十二街の暗をかゝやかすゆゑよ夜光の玉ともよび後年泰の十五城と易たるに依て津城の玉ともてはやしけるとかや今木化の武士の妙法蓮華經といふ閻浮提第一の名玉を懷て此日本東海に跡を垂一切衆生を憐み給ひ大慈大悲をそれとも知ろで離れず北條一門評定所よ集會し日蓮上と遊り下を憐し佛法よ事寄て國を乱さんとする事の罪輕からず縛ゆるかせよ爲ば天下の大事よ引起さん疾々刑罰を行ふべしと平左衛門頼綱是を承はり兵士凡三百人小具足に身を堅め名越をさして押寄る時に大士御齡五十歳此日いかなる日やや文永八年九月十二日夕日も曇る中の刻松葉が谷の御庵室よは法弟檀方を聚め高座よ在て說法真中根かよ蘇く人馬の物形外の方急度見渡し給へば平左衛門馬上よてあまたの兵卒ひき懸ひ砂を蹴立て寄來り頼綱怒りのこゑあら、げやをれ日蓮日頃の悪行その罪重く今日死罪を行ふべしと御館の殿命あるぞと喚はるよぞ當入滿たる群衆の參詣上を下へと立騒ぐ高祖大士は立像の釋尊よ法華經一部を手早く取て懷中におし入給ひ椽外ちかく立出給ひ大將頼綱に向て高聲よ宣ふやうあらあもしろや平左衛門心のいたらざるか理の通ぜざるか天下の奉行に在ながら事の邪正も問はず今よ見よよ白界和逆難とて此國よ回士討の軍始り他國侵逼難とて異國より此國を食らるべし不便よとありける時伊和瀬大輔少輔坊齋藤三郎磯の五郎ひたくと諸寄齋藤三郎大士の襟前捕へて高橋より引落す少輔坊立か、つて懷中の御經引出し此期よ及んで尙此經よ未練を燒すかと罵なが

ら第五の巻をもつて大士の御顔を散々に打擲す雜兵どもは御經をわざと緋ちらし踏躪り板敷廣庭家の二三間ひき散さぬ處もなし高祖は梵爾として笑を合ませ給ひ末法は此意を弘むるならば杖を以て打るべしと説れたる御經は五の巻今うたれし杖も其五の巻にてありけりと喚はり給へば物言すなど手を挽脚を挽捕へてあられなくも高祖大士を引立つ、瘦たる馬は驚を敷これよりうち乗せ奉り前後左右には長刀拔連三百餘人いと嚴重に取かこみ武藏前司朝直の下知として其門前にしはし馬を繫ざられより魚町の四辻より出て小町通りを引渡すその鉢相謀反強盜の罪人とも過たり市中の男女日蓮の日來の荒言詞當りてあゝの姿もなりたるはと指さし附り大路せばして見物す若宮の小路よりうちいで、鶴が岡赤橋の前鳥居の邊りより馬より下給ひしかば警衛の武士ども驚きあはてたり日蓮大士高聲に呼で宣ひけるやう各々さはがせ給ふな子細はあらじ最後は隨んで八幡大菩薩にいふべき事ありとて本社をはつたと白眼給ひいか此八幡大菩薩は實の神かたゞしは邪神なるか昔和氣の清密が首刎られんとせし時は一丈ばかりの月を現れ給ひ又傳教大師宇佐の寶殿に法華經を讀給ひ一かば感應有て紫の御袈裟を布施に捧げ給ひ今日より日蓮第一の行者なり其上今生は三災七難を撥ひ未來には無間地獄を助けん爲に洵る法門あり二千餘年のそのむかし大聖世尊靈山よりいて此法華經の末法は弘まらん時その行者を守護すべしよし佛勅ありしかば天照八幡も其座より列なり法華經の行者あるそかあるまじきよし三度まで抱ひを立あがら今此處より出會給はぬこそ不測され日蓮今宵頭切れて死ぬるまじき靈山淨土の釋尊の御前へ参り日本國の八幡と

そ約束に違ひし邪神也とさし切て育上すべし若夫をつらく思召は早急々々現世の奇特を顯し給へとて又馬よりうちのり給ひけり見物の男女婦々又神へ對して無禮の荒言愈々正氣の妙法もあらすと手を打て笑ふもありまた鎌倉殿の氏神よか、る事を言かけたるは恐しき僧かなと舌を卷てあそるゝもありこれより夜も入て長谷の小路を渡り御靈の社の前よりいたる時各々一ばし待せ給へとて馬をどめ御伴もありける熊王四郎を召て四條金吾頼基の宅はこの祠の北なるを疾ゆきて我が最期の事を告知らせよと有ければ熊王走ゆきて告知らせけるに金吾頼基かくと問より兄弟四人徒歩跳みてはしり出此法問敷御姿もあり給ひしを見て驚てありけるよぞ大士御聲しづかに日蓮は今夜野と切られにまぬるなり此數年が間願ひし事これなり此娑婆世界よししては雉子となる時は鷹よ捕れ鼠となれば猫に噛はれ或は妻子の爲又は財寶の爲よ身を失ひしことば大地微塵の數よりも多し但し法華經の御爲よは一度も身を捨し事なし日蓮貧道身を生れて父母の孝行も心よ足らず國の恩と報する力ありし今度頭を法華經よ奉りこの功德を父母よ供養し其餘りをば我が弟子檀方よ分配んと思ふありとありければ四條頼基詞もあくされば御伴つかまつらんと今宵は死山の放衣經帷子を其身に纏ひ御馬の口に取廻り極樂寺の切通より七里が嶺にうち山たり此嶺は六町一里より四十二町の波打際南は海上漫々として夜は遠目よわかねども安房上總よさし向て北は利村山とて小き山々の打づ、き腹が前干稻村に似たり十二日の月高けれども秋の天とて村雲の時つか、りつ定めなき御身のうへを感じつ、手づから御袈裟を脱ておしいたゞさうかよ海世の世あればとて



高祖大士龍
 の口刑罪場
 不曳せ玉ふ
 信心の老婆
 途中に胡麻
 の餅を捧ぐ

七佛傳來の此袈裟を血も穢す事恐れありとて路のはどりよきし出たる松の下枝よりち掛給ひこれより馬の足播はやく願て津村よきしかるゝる此村落は獨り住居の老姥ありけり齡七十近くして掛る鳥をき捨小舟たのみなき身をかこちつゝ前の年鎌倉の寺詣にはからず大士の説法を聴聞し宿縁や厚かりけんそれより朝暮御題目は怠らねど老朽おれてそのうち鎌倉へも歩行かなはで有りけるが今日しも告る入相願路行人の語ると聞よ日蓮聖人は今宵固漱又強切らるゝとて鎌倉の大路小路と引渡すとありけるよぞ老姥はおどろき其はいかある御身の罪かはしらねども勿休なしいかよせんせめて老後の思ひでに何をがな供養し奉らんとうち案じ老の手近き養應は背戸に實入し赤小豆もあれば此伴ひと心づき牡丹の花の赤豆餅それこそよけれと心ようちづき飯焚あろして折添る柴桑の煙りよ泣老姥も小豆の鍋を掛るさへ老を扶くる自在健養ゆるを避しと待はざよ夜も稍深き往還よ人音たかく聞へつゝ松火提灯嚇々しくさしてらすよぞそれと見るより老姥は狼狽赤豆は煮へず爲かたなく菊の節句の赤飯に祝ひ残りし胡麻鹽の有ければ握り一飯も細めつゝ折敬尋る間もなく鍋蓋の裏うちかへし胡麻の餅を盛るらへ路ばたよよろばひ出涙あがらよ奉る大士はこれを見かへり給ひ供養於法師と回向ありてその志しを受給ひけり今よいたつて九月十二日御首繼備とて我が宗門に胡麻の餅を供する由來口斯く傳へけるされば腰越も程よくて見ゆる固頼の刑罪場名も畏ろしき龍の口道法近くありよけり抑々この地を龍の口といふ事はむかし此より北よ當て深澤と云周圍四十里の湖水ありこの淵は惡龍すんで人の子を取取ふ此處に長者ありて五人の子をそれが爲よ取取はれしといひ傳ふ其蹟今も残りて初瀬澤五ツ塚長者屋敷の名あり時に人皇十三代欽明天皇の十年夏四月此津村の海上に霧立雲覆ひ沖合しぱらく震動せしが頓て天晴海穩かよありて孤鵜波の上に涌出天より花降音響きてへ天女忽然としてこゝよ天降り給ふ今の江の嶋辨財天みれなり此時よ彼の深澤の惡龍辨財天の美麗なる容色よ迷ひ我が妻よ語らはんとありければ辨財天女示して宣ふやう同じ非類の畜身なれども我は天竺無熱池なる娑竭羅龍王第三の女にして八歳龍女の妹あり今年欽明帝十三年佛法はじめて此國よ渡る其を守護の爲此土に降りなしたるなり汝は無道の惡龍よして人を取ふ邪神也若その邪心をひるがへしともよ正法を守護ささば父の龍王に言て借老の契りを結ぶべしとありければ深澤の惡龍忽ち惡心を轉じ固頼の山上に迹をとよめ龍口大明神と顯れ江の島の本社と相向ひ子亥の方よ鎮坐なすゆえこれを子亥方明神とも稱するなり斯て江の島辨財天託宣有て龍口明神はむか一人を取ひ一餘習あり願くは王法に背不忠不孝の罪人をば此龍口の神前にて刑罰を行ふ給へさすれば其血を吸て精力を増し佛法を守護し邪正一如の夫婦の神力を合て國土を守るべしと夫より當國よは此龍口明神の社の前を死罪場と定められし事既に年久しされば龍の口江の島の両社は元來正法守護の爲よかねてこゝに鎮坐はしますを其神前よ正法弘通の行者を引居奉りしと不思議とぞ思はれける斯て見渡す前は平砂灘々として淵間邊に柳欄嚴しく結搦へ幕縦横よ張渡し炬火を焚て磐固の武士うちかこみて見ければ四條頼基さし俯き御覽へはや唯今なりと泣ければ大士はかはる御衆色もなくいかに殿原これほどの喜びをば笑へかしかくも

爲よ取取はれしといひ傳ふ其蹟今も残りて初瀬澤五ツ塚長者屋敷の名あり時に人皇十三代欽明天皇の十年夏四月此津村の海上に霧立雲覆ひ沖合しぱらく震動せしが頓て天晴海穩かよありて孤鵜波の上に涌出天より花降音響きてへ天女忽然としてこゝよ天降り給ふ今の江の嶋辨財天みれなり此時よ彼の深澤の惡龍辨財天の美麗なる容色よ迷ひ我が妻よ語らはんとありければ辨財天女示して宣ふやう同じ非類の畜身なれども我は天竺無熱池なる娑竭羅龍王第三の女にして八歳龍女の妹あり今年欽明帝十三年佛法はじめて此國よ渡る其を守護の爲此土に降りなしたるなり汝は無道の惡龍よして人を取ふ邪神也若その邪心をひるがへしともよ正法を守護ささば父の龍王に言て借老の契りを結ぶべしとありければ深澤の惡龍忽ち惡心を轉じ固頼の山上に迹をとよめ龍口大明神と顯れ江の島の本社と相向ひ子亥の方よ鎮坐なすゆえこれを子亥方明神とも稱するなり斯て江の島辨財天託宣有て龍口明神はむか一人を取ひ一餘習あり願くは王法に背不忠不孝の罪人をば此龍口の神前にて刑罰を行ふ給へさすれば其血を吸て精力を増し佛法を守護し邪正一如の夫婦の神力を合て國土を守るべしと夫より當國よは此龍口明神の社の前を死罪場と定められし事既に年久しされば龍の口江の島の両社は元來正法守護の爲よかねてこゝに鎮坐はしますを其神前よ正法弘通の行者を引居奉りしと不思議とぞ思はれける斯て見渡す前は平砂灘々として淵間邊に柳欄嚴しく結搦へ幕縦横よ張渡し炬火を焚て磐固の武士うちかこみて見ければ四條頼基さし俯き御覽へはや唯今なりと泣ければ大士はかはる御衆色もなくいかに殿原これほどの喜びをば笑へかしかくも



龍の口御赦免
 状袖ヶ浦行合
 川の壘蹟



高祖大蓮
 固頼龍
 御法難

よ日頃の約束をば違へ給ふかと思ひければ兵士ども立かへり御馬よりひきおろし敷皮のうへに居へ奉れば平左衛門遙へたて、馬をひかへ雑兵四方を取固め既へ絶なんたまの緒をつなぐよしなき槍柵の外日朝日進日向四條池上津原等隨身の法子師依の男女南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱ふる聲も沮なくもり身の置處なき愛別離苦今やと見る間に下知際の子依智の三郎重直は兼て聞ゆる三尺二寸の蛇頭丸を名づけたる悪魔降伏の名剣を抜放し玉撒刀尖に水うち濺ぎ御馬に立廻りてありけるが此時三郎重直何思ひけん小腰を屈め涙をす、りいかよ日蓮御坊よ聞召せ御身は大徳の出家なりとさき強盜夜討の罪もなく謀叛殺害の科あり唯新法の題目を弘めんと諸宗を勝り給ふにより唯今命をおよぶれ此直重も齡はや五十いかに天下の嚴命なればとて老前近き身を以て佛法弘通の御身を切も罪いと深く覺ゆるが今日より改心有て念佛無間法門を罷めその題目を樂給は、奉行よ音譯我が身も替ても命を救はん世上よ罪なき御身なるといかて御赦なからんやとありければ大士御後を見かへり給ひ法華經の御爲よ身を捨んこと日來月來思ひ儲けたる事あり今奥き首を捨て佛果を得るあらば利に金を換石よ玉を商へるよ似たるはと剛唐たりし大盆石ゆるぐ氣色は見へざりけり三郎重直是非もなしと立揚既に斯よと見へける折から最前より空一面よかき曇り須彌山をも吹倒すべき大風驟の如き雨を捲て將來り天地假は鳴動し大波激て山より高くと天に霹靂地に震動堅牢地神も身を怒らし給ひけん今や大地も砕くるばかり立列ねたる松火提灯箱火も一時に滅て眞の闇さしも嚴重よ構へたる柵の行馬も打倒れ幕は虚空よ吹とんで白龍天を駈る

よ似たりかゝる處よ江の嶋の方より満月の如光り物袖のごとく飛出て辰巳より妙夜のかたよ井波り颯風よ暗き烏梅の夜も天地かやき蓋のごとし三郎重直おくれじと太刀振揚て丁どうては蛇頭の名剣こはいかよ朽木の如く鋤根より三段よ折て飛散たり平の左衛門始として三百餘人の兵士どもうろたへ畏れて高遁し十段ばかり逃退よ高祖大士御聲たかくいかに人々かゝる大罪人を捨ていづくへか逃給ふが夜も明あば見苦しかるべし、いさぎ、打給へとさし招き給へども懼て近寄ものもな一斯て風和らぎ雨も疎らに夜はほのく、と明わたる平左衛門この不測よ畏れ日蓮が切切がたきよし馬を飛せて進進す又鎌倉御所よおいても殿中屏鳴動た、事ならねばこれ日蓮を害するゆゑならんと身の毛立ておそろしかりしかば日蓮が命助けよとの願合に依浪判官入道親正畏まつて筆取御下知の趣き守殿御館に大怪物これあり日蓮法師誅すべからざるよし南條七郎をもつて仰出さる、とさ書たりける南條七郎赦免の状をさしあげ一鞭あて、飛が如くよ馳たりしが七里が嶺の中央金洗深の川邊よて彼の固瀬よりの使者よ行合て日蓮上人死罪赦免の状を渡す夫より此川を今よ行合川と喚あせり

龍の口御法難の靈跡寂 光山龍口寺と號す妙典寺東漸寺勸行寺本が寺本龍寺法源寺常立寺本蓮寺の八箇寺これを輪番す毎年九月十二日は御大會と稱し江戸をはじめ遠村近郷より群衆の參詣稻麻のごとし夜半子丑の間御法會勸持品の朗讀又禮讚あり音楽を奏して胡麻の餅を獻贈すむかし風雨雷電の響今昔樂管絃の聲となる法華即寂光實よ廣宣流布の時節なりと參詣の男女五百年

前を思ひ合せ御報恩の御題目は濡ぬ袖こそなかりける龍口寺建立の時もかゝり此地にて刑罪
よありしもの又は乱世討死のもの、殘骨こゝかしこに散たるを取聚めて塚を築きしこれを誰かの
森とて今は輪番常立寺の境内よその跡を築せり

斯て山籠の巖石の間において大士は朝餉を進め奉りさて鎌倉殿の下知あればこれより當國愛山郡
依智の郷本間六郎左衛門重運が方へ渡り給へとありければ大士うき給ひ我は其路を知らずと
仰せしかば兵士五六人前にたちて案内す北をさして往としはしよして愛染堂眞藏院とて眞智の寺
ありこゝへ入て暫時休らひ給ひしに住持長藏法印法弟となつて名を日問と叫ぶ今の藤澤の藤長藤
山妙善寺これ也かくて追々御後を慕ひ來るもの多く平左衛門もこゝに泊り奉り路次の程も賑しく
警固の武士その外隨身隨依のものそれかれ前後百餘人此日の未時依智の郷本間の邸より着せ給ふ此
本間六郎重運といふへ代々鎌倉の藩臣たり佐渡國加茂郡を領し同郡新種といふ地は役所を構へ總
じて佐渡一國の政事を進退す此頃も既して佐渡に在て家よは居らず平左衛門頼綱は重運の一族本間
三郎左衛門大士を預け渡し追て鎌倉の沙汰を待べしと言さして立歸る又腹巻したる者ども十八
ばかり大士の前より手をつき頭を低聖人はいかなる人よ渡らせ給ふや眼のあたり不測を拜み奉りぬ
我々が昨夜よりの罪はゆるし給へ年頃せし念佛は捨はべるとて火打袋より珠數を取出して切て捨
るもあり又一生命佛へ首じと誓言を立るもありて口々も題目を唱へつゝ皆大將頼綱の後を追て鎌
倉へ歸りけり秋の日影の黄昏て今宵は九月十三日後の明月とて雲霧す夜也けるが番の兵卒數十人

縁の廻り大庭に並居たり月中天よきし登り千草の露も影しめて虫の聲々もきこえしいと面白き風情
なるよ高祖大士庭よありたち念珠を御堂よかけながら月に向ひ自我悔すことし讀給ひさて宜ふやう
今此月天子は法華經の會座に在したる明月天子に在さずや寶塔品よしては佛勅と讀ふり末法よは
法華經の弘まらせたまふときは影の形よ從ふが如く守護すべしと誓ひを立そのうへ四王天といふ
は人間の五十年を一日一夜と成し給ふときくされば釋尊入滅より人間世界よは二千二百年とおも
へども月天子の御身よ取てはわづか四十四日なりその間よはやくも靈山の約束を忘れ給ひしは不
測也よしや守護する事こそ協はずとも嬉し顔よ澄わたらせ給ふはいかゝ大集經よは日月明らかな
らずと説仁王經よは度を失ふと説れ最勝土經には三十三天障の色を現すところ見へたるやいか
月天子月天子と實給ひければ不測なるかな一團の黒雲月にかゝると見へしが明星の如き大黒降て
庭前の梅の梢にかゝり給ひ其光赫々として物を貫くが如し世の兵卒等を見てもおそろしと楳
より飛下大地よひれふし又は家の後よ逃たるものもあり落葉をさそふ木枯の颯と音して物凄く折
しも江の島の海の鳴こと繁々と地にひゞき又恐ろしく覺へけるかゝる處へ本間重運の代官本間右
馬尉鎌倉より立文を持って走りつき大士に見へ給へ彼の地の取沙汰よは日蓮聖人も御靈所の御恨好
よて一度は御免ありけれども死罪は還よ免れがたしと問つるにかゝる御喜びの御狀出たれば我も
嬉しく二時の間に参りつきたりとかたる御下知の趣は本間六郎左衛門が預とて佐渡よ渡すべし
必らず過失あるべからずとゞしるしける明れば十四日の卯の時頃本間十郎又鎌倉より歸り大士よ

向ひ奉り鎌倉よて聖人を御歸依なす権池四郎は我が妻の舎弟なれば此方より立寄り聖人斯ならせ給ひし後は御弟子方々いかゞあり給ひしやと尋たるは御弟子の長とて問へし日昭師名越の御安室に在してきのふ十三日の早天御弟子衆ふ何やらんいひ含め由北の濃土といふ處より退きかして各々身をひうめ給ふよしさるを日昭師は尙御安室を去りかねておはしけるに御下知とてあまたの雜人松葉が谷より來り其御安室とうち壞したるに日昭聖人此に在したるゆゑこれ日蓮が一期の道心ありとて繩を懸て引立たるを日蓮とてかといへる齡十二三ばかりの小法師かけ來り我をも縛て給れと手を後にして掛倚を日昭師もて押隔て御身はいまだ小兒あるは彼方へ往ねと目配しても聞入す我も日蓮が弟子なるはと雜兵の脛より黄り離れ給はず是非なく共々繩かけし名は知らねどもそのほか在家四人を樹の捕り宿屋左衛門の預りとして土の半より籠られたりしてこれを見聞く人かたり傳へ袖を絞らぬはなかりけり彼の地の様子かれこれの物語は哀れを催し給ひけり此本間十郎をはじめめとして本間三郎左衛門本間辨坊本間右馬之助等みな六郎重蓮の一族にして依智は住居な一けるゆゑ高祖大士の奇特と感伏し一門餘程他風までこゝより聚り教化を受十三日十四日の兩日に男女の改宗七十八人僧分の者二十五人法弟もぞなりける

依智星降の靈場上依智梅屋山妙傳寺中依智法塔山蓮性寺下依智明星山明純寺あり又中依智よむかし三光山梅光寺といふ寺在て梅の靈木ありしが中古洪水は流れて其跡を失ひしといふ斯數々の寺院いづれを其靈跡と仰がん思ふに本間の一門多く此地に住て重蓮とはじめ皆各大士の檀越

とあり後年その邸宅それごとく寺を建立ありしゆゑ今も寺院も多きあり九月十三日より十月十日まで此地に在したる御化導の靈跡なればそれこれと思ひあやむ事なかれ今現在の三箇處の靈場を巡拜し心念口唱をこたりなきこそ三諦即一能入の信者といふべし

慈闍茂らんとすれば秋風これを枯し賢人明かあらんとすれば佞人これを離す釋尊は提婆あり太子も守屋あり月も村雲花もあらし信心色ませば災難又色を増寸善尺魔の世なりけり此頃鎌倉の町もあいて火を放ること毎夜數十か所或ハ辻まで人を切るもの多くありてこれ日蓮が餘類の所爲ありとて歸依の檀越弟子の輩二百六十餘人を捕り所々逐べきか島は流さんか宿谷の牢に在弟子をば首を切べきかと評議取々なるは毎夜の惡業猶止ざりければひそかや密吏を置てこれを捕へたるに皆念佛等の流者ども日蓮も惡名負せんとの刑略なるよし粗きとへければ二百六十人も年ひし行敷たり此等のよしハ四條頼基より使を以て告來る此返事として龍の口法難の時厚き志を見せ給ひし事いつの世もか忘るべきと細々書贈り給ふ此秋もくれ冬の初めもありけれと今旅へ例よりも寒さはやくて水やいたく結びけん筒筒の水のをと瘦て身またへ難き夜半の霜衣かさねて寝身さへ夜明わびしく思すよつけ日昭は宿谷が土の半よりうちこめられいかゞ此世を明すらんと涙も氷る御祝ひきよせ給ひ紙とりのべての御文章日蓮明日はや佐渡が島へ參るなり今宵の寒さよつけても牢の中の舂相思やられていたはしくこそ尋るあれ世間法華經を讀は口ばかり詞ばかりは讀ども心よ讀す心よ讀ども身よよまらず貴邊は身と心と心とよ讀給へば父母あらびよ一切衆生を助け給ふべ

き御身あり法華經又は諸天晝夜法の爲に守護するを見へたればたとへ今御身を苦しめらるゝとも別わかの事はあらじ御救免有て半うらを出させ給は、疾々來り給へ目出度面會を遠べいとぞ遊ばしける又太田左衛門曾谷入道金原法橋へも法門したゝめこれを合せて鎌倉に廻り給ひ十月十日依智を御發はら足ありけるに磐固の武士前後とかこみまた御身送りよは日興日向富木殿よりの入道一人又日朝の御母妙一尼よりの御人その外熊王四郎など五六人傳添奉り此夜は武州入間郡榮川に宿り明る十一日新倉にさしかり給ひしに新曾の地頭櫻田次郎時光その妻難産つまたんげんよ苦みけるゆゑ此地の土牛神うぶがみよ祈念いのりを施ほたるに昨夜の靈夢の告に明日は日蓮といふ名僧この地ち來るべし其人あらでは助けがたしとありけるより次郎時光曉天より途中に立て待受奉り其祈願を請大士路の側わきよ小社のありける其前まへよ休息やすみてしばし御經有て木尊きみを給ひしよ忽ち安産してその小兒も亦壯健すこやかあり夫婦をはじめ一門の喜び大方あらすこれより深く大士を歸依し時光後年出家して日徳と號し新曾妙顯寺を建立す今より子安の曼陀羅を什寶とす十三日兒玉こたまに至る六右衛門時國名越を我が家うちに宿し奉り一家残りあく改宗かうしゆと十四日上野國甘羅郡栗津まで時國寮内として送りまわらせ長谷川長源が家うちに入奉る長源が子孫今尙在て其時の古蹟とて庭にわに薔ばらき大木あり長源寺といふも其人の建立といへり又これより近き藤岡も御小憩の蔭かげとして天龍寺といふ寺あり越路こしちのはやき御み禮らいとこともわかぬ山路をさきのふは砂りけふは下り伴ふ人々の物語りよ愛を忘れ日數かさねし旅たびの空廿一日の夕つかた新後三嶋郡寺泊てらどまりよ着給ひ石川宇右衛門吉廣といふもの兼て大士の事を聞傳へてありければ家うちに迎へて饗應けんおん

とこへは船出を待給ふ日數六日の間まは十一風奴ふうぬ婢めかけまで深く化粧けしやうを敷りける後年こへは寺を建立光山法福寺といふ御硯水の井も今も存せりかくて廿七日海上稱なづあたやかよ見ゆるとて船ふねのかしましきに高祖たかそは富木氏への書をしたゝめ各々これより歸り給へ人あまた具して彼の地へ渡ること鎌倉殿への憚りあつて以て日蓮が爲ためとありければ富木の使なる入道も力ちからなく主人胤繼おのつぐは聖人の在さん處をいつくまへも見とゞけこれと渡し奉れと首くび合あめられはべりぬとて錢ぜに一結むすをさし出す其餘の人々も火の中水の底までもとこもへさも世の懼おそりに是非もなく御袖みそでに細りて津つよ送り奉り凄離せきりるゝ御船をふし拜みつゝ各々名姓なせいをしくもかへりけるしかるよ此日海上假かは風かぜあれて御船を此方へ吹戻し浦原郡角田の岸しより着たりける大士は巖いわに題目だいぎと認めて龍神りゆうじんに法樂ほつがく一此邊こゝよ人家有りやと其處此地と歩行たよふ折からいと美麗うつくしき二人の童子どうし大師と拜はいしていふやう此山の洞ほらに毒蛇どくじゃありて人畜ひとちくと害す聖人の法力を以て降伏かうふくなり給れといふその童子の案内あんいよ任せて山やまに登り給ふに天子が嶽たけといふ處より其巖いわ窟くつを望見給ふよ惡蛇あくじゃ蟠わだかままつて口より毒炭どくたんを吹出し霧きりの如き毒氣どくき熾さか穴あなより立登るその惡き臭にお頭かぶも碎くだるやとおぼすばかりよ有ければ大師あたりの小石こいしを拾ひろひ逃にげに御經を替かてその穴あなに投入給ひければそれより毒蛇どくじゃかたちを隠し永くその害がいは廢やたりける此時角田の地ちよ石田五郎遠藤次郎の兩人ありて大師を家に請待し二人がいふやう昨日海上あられ出て御船をこへよ寄たるは彼の毒龍どくりゆうの降伏かうふくを願ねがふとての諸天の御引みひらひなるべしとて徹くわん喜ぎ大方おほならず後のちよ角田山妙光寺を建て日印聖人を開山とせりさて廿八日早天はやあま順風じゆんぷうよ角田かくたを山やまありしよ沖おき合道あひみちの大

波乃
 海上雅風
 佐渡乃
 題目



灘に逆風暴俄に吹起り大海逆巻荒波は山と重なりてうちかへす何かはしばしも懸ふべき船をゆり揚
 ゆり卸し楫柄折て帆綱も切水主棹取も色を失ひ既に危く見へける折から高祖大師は船の舳前より立
 揚り念珠お一揉御経終り水柱を取て海面に南無妙法蓮華經と書給へば其水柱の跡おのづから白波
 立て十丈ばかり光明照の御越目海上にありくをみかまされてしばし波間より泊やらす佐渡の浮越
 目と今の世までも昔傳へ天銀朝なる時角田山より遠く海上を見渡せばその御水柱の跡いまに顯然
 として沖の鷗とうき沈み波間かくれて見へ渡るありさま實に本地の風流ありと語り傳へりかくて
 船中の船子さも目のあたりこの奇特を見て一同に合掌し御題目を唱へ奉るよ龍神納受やまーまし
 けんそれより風も小罷して波いとしづかに夕つかた御船は恙なく佐渡國羽茂郡松が崎甲の瀬とい
 ふ岸より着船す大師喜び給ひ御墨斗の墨も水を添て磯邊の石も題目を書して此國も妙經流布せんと
 を表し給ふ附添ひ來りし官吏等は彼是嗚へてこゝも夕餉を奉りければ大師いと快くきこしめし給
 ひき此地松崎山本行寺よ今その時の木椀折敷など什寶に備へたりさて官吏のいふやうこれより其
 路をたざりて勅穂の邸へゆき給へ御身流罪の下知状は我等が襟にかけはべりぬ別の用事を取すま
 し明日は路にて追付ん疾往給へと言さして立別れつゝ去よける大師はひとり困じはて東西しらぬ
 此嶋よ其方とのみ教へたる夕箱冴る細道を思東あくも歩行給ふよ古き檜木のもとも立たるひとり
 の翁頭よ千代の雪をいたゝき頼よ老のなみならぬ容れ尊く見へたるが今宵はこれよ宿しまぬらせ
 んとて其家よ作ひて厚くもてなし奉りぬ大師木尊を背て與給ひ法門の物語りよ長き一夜も明めく
 こゝと立出て見給ふよ松前明神と頼うつたる嗣よてみれば去る文永六年本間山城守の御請よ
 して春日の神あるよしき給ひさては此一夜の宿は神の恵にありけるよと喜び給ひ廿九日の夜
 は雜太郎小倉なる神職の舎にやどりその明の日加茂郡新穂なる本間六郎重連が邸よたざりつゝ霜
 月の朔日重連が下知として大野の郷塚原といふ地に追放し奉りけり其住べき處は一問四面の辻堂
 の軒端傾き壁も疎らよ夜の間の風防ぐべうもあらす本尊と頼む佛も見へず下よ板敷庭もあー四邊
 は京都鳥部山の様よ死人を聚る三味原あれば見渡す方は枯尾花朽たる卒塔婆ぬしや誰問と答へぬ
 古墳ばかり今宵はことよ物淋しく北海の荒海雲を起しきりよ降くる大雪よ忽ち埋む三味堂耶は
 七尺雪は一丈うち拂はんとする袖も水りて水柱よとち骨身を削る御艱難其を浚げとて捨ねどもあ
 たりよ有し破鏡を御身よまとひ兼て旅路を持たりし一蓋の笠を叩いたゝき夜は明たれど食事を
 まぬらする人もあく雪よ御手を淨めつゝ懐中より隨身佛立像の釋尊を取いだし雪をつかねて燈を
 ちしこれを安置し奉り御經しづかよ讀給ひ昔唐土の蘇武といひし人は胡國にとらわれ幾日に在て
 雪を食として二十年を過したるにも劣らづ今日進末法よ生れて妙法蓮華經の五字を弘めてかゝる
 責にめへり佛の滅後二千餘年日蓮の外法華經の故よかくまで身を苦しめたる者有とも覺へず日本
 國の萬人は悲まばにくめ釋迦多寶十萬の諸佛よだま譽られまぬらせば其面目よろこび身に餘れり
 と一心不乱に御經唱題の外更よ他事なく見へさせ給ひけり茲よ遠勝武者盛遠より四世の孫遠藤左
 衛門為盛は罪有て此佐渡國へ流罪せられて愛世の中の惡業煩惱起も亦非なる理りを悟夫婦もろと

こゝと立出て見給ふよ松前明神と頼うつたる嗣よてみれば去る文永六年本間山城守の御請よ
 して春日の神あるよしき給ひさては此一夜の宿は神の恵にありけるよと喜び給ひ廿九日の夜
 は雜太郎小倉なる神職の舎にやどりその明の日加茂郡新穂なる本間六郎重連が邸よたざりつゝ霜
 月の朔日重連が下知として大野の郷塚原といふ地に追放し奉りけり其住べき處は一問四面の辻堂
 の軒端傾き壁も疎らよ夜の間の風防ぐべうもあらす本尊と頼む佛も見へず下よ板敷庭もあー四邊
 は京都鳥部山の様よ死人を聚る三味原あれば見渡す方は枯尾花朽たる卒塔婆ぬしや誰問と答へぬ
 古墳ばかり今宵はことよ物淋しく北海の荒海雲を起しきりよ降くる大雪よ忽ち埋む三味堂耶は
 七尺雪は一丈うち拂はんとする袖も水りて水柱よとち骨身を削る御艱難其を浚げとて捨ねどもあ
 たりよ有し破鏡を御身よまとひ兼て旅路を持たりし一蓋の笠を叩いたゝき夜は明たれど食事を
 まぬらする人もあく雪よ御手を淨めつゝ懐中より隨身佛立像の釋尊を取いだし雪をつかねて燈を
 ちしこれを安置し奉り御經しづかよ讀給ひ昔唐土の蘇武といひし人は胡國にとらわれ幾日に在て
 雪を食として二十年を過したるにも劣らづ今日進末法よ生れて妙法蓮華經の五字を弘めてかゝる
 責にめへり佛の滅後二千餘年日蓮の外法華經の故よかくまで身を苦しめたる者有とも覺へず日本
 國の萬人は悲まばにくめ釋迦多寶十萬の諸佛よだま譽られまぬらせば其面目よろこび身に餘れり
 と一心不乱に御經唱題の外更よ他事なく見へさせ給ひけり茲よ遠勝武者盛遠より四世の孫遠藤左
 衛門為盛は罪有て此佐渡國へ流罪せられて愛世の中の惡業煩惱起も亦非なる理りを悟夫婦もろと

も剃髪し念佛諸名も明し暮しけるが一日夫婦の密々話しかねて聞たる外道の日蓮鎌倉殿も、てあ
 まし此嶋は流罪せられ程遠からぬ塚原ありとき、阿彌陀如来の大怨敵諸萬人の悪知識ひそかよ
 彼を失ひなば千付供養の功德も増かたならんぞ、張臂と妻は案じて老の身の仕損じて怪我し給ひ
 そとあやぶめば昔握たる駿柄も覺へば腕もある物と一腰かいてみ庭より下立方足踏躰も馴一太
 野の塚原道夜もや、更て丑満頃ぬきあしあし覗へばかくとも知らぬ高祖大師捨果し身もきの
 ふけふ降附邊の雪風は御身を貫く劍太刀食事も絶てけふ五日雪を合んで咽喉をうるはし命の際
 の御経誦誦遠藤爲盛うかやひより唯一討とおもひしが果のしれたる瘦道心殺すに難きことやある
 一先その法門を問糺し返答詰る其とき又暇取らずも遅からずと堂又押入會釋もあく我は念佛の行
 者なり法華ばかりの成佛よて諸宗も得道なしといふその證據はいづくもありやと鹿忽の難問大師
 はほくと笑ひ給ひ雪も道絶この堂へ殊も真夜中氣色變來誦御身念佛者も在すなら得道ならぬ、經文
 は外を尋給ふに及ばず御身の頼む浄土の三部彌陀經の其中は舍利弗舍利弗又舍利弗と二尋たらず
 の御經は三十八ヶ所まで名を召れたる舍利弗尊者その經にては得道も法華經第二の會座よして
 妙法蓮華經をもつて華光如来となり給ひし其上觀經彌陀四十八願の其中にも正法を助るものは救
 はじとさしきつて彌陀如来も誓ひ給ひしぞされば念佛者の無得道證據へ御身の朝夕は讀む御經に
 あるものをはしたるき行者かきと説すくめ給へば爲盛坊は呆れはて我が太刀をもて我を切その法
 門も奉もたのみ膝行直して不審の條々問は答ふる符響のかざりしられぬ本化の法門や、魂に染渡

り涙ながらに身の慙愧徒弟よなして給はれと善も引き菩提心雪も頭を擗埋めその授戒を願ひけ
 り妻はかくとも知らずして歸りの近きを案じわび泣き後を尋ね来て外問よしはした、つみて大師
 の教化夫の得道あらしくこれを聞果てとも大師に相見あげ夫婦もろとも法弟となり人目を忍び
 世を懼り飯價を古葛籠にかくし入夫婦はこれを脊負つ、毎夜かはるく、大師を塚原も供養奉る
 こと百日餘りその功德千日の修行も増るとて妻を千日尼とよび夫と阿彌陀日得とよ召れける
 塚原三味堂の靈巖は今の根本寺の門前の地ありとぞ京都妙覺寺日蓮聖人の徒弟第泉坊日成聖人
 此靈巖を尋給ひし時茫々たる荒山のうちにいさゝかの堂有て人さへ住す傳へいふ此地は高祖大
 師極難の地ゆゑその威烈今も残りて尋常の僧は居がたゝとて人も住すとき、給ひこれ高祖開運
 の道場大慈悲の靈巖なるを何ぞこれを疎かにせんと天文廿一年壬子はじめて一字を造立し塚原
 山根本寺と名づくこれ御法難より二百八十二年の後なり天正年中上杉の家臣直江山城守お綱田
 園々寄附し大ひも靈跡を輝しけり
 斯て此國は北海の嶋根にして人の心も頑も諸宗の僧もあらしく就中生論坊慈道坊印生唯阿彌
 等を始として大師の化導をふかく惡み憤りこ、かこより相聚るもの數十人各々相談していふや
 うむかこより此嶋は流されたるもの生て歸りし例はなし鎌倉殿の捨殺し給ふ日遊なれば佛恩報謝
 のために彼をうち殺したりとも咎めはあらじと其殺すべき手術をぞ成たりけるに本間重連これを
 聞て大ひに驚き念佛真首等の發願人あまた邸に召侍て日遊は此守護所の預りよして若過失あら

ば我が越度あるを殊に汝等出家の身として人を害せんとの密謀甚はた如法ならずさはかり悪き日
 蓮あらば法門にて責よかしといひ渡すよそ夫よか法師原種々を評議あし京鎌倉の名僧さへ敵對が
 たき日蓮なれば正路の問答あばつかなし妙法よひとつの計略あり千人廿人づ、幾許か立か、り有無
 の答へよか、はらず四方八面より質問はかれ此頃は食も飢へ寒氣も閉られ今は大半死人も似たり
 そこそ厳しく責立れば彼金銀もあらぬ身の息の根をめて其上に動作静作人知らず振殺さば自滅の
 往生誰か咎めんこれに増たる妙術あしと俄に人を近國に馳廻し腕脛つよき惡道心溢れ法師を聚め
 けりさても孝行第一と問へ二十年來かた時も御側さらぬ日朝聖人いぬる九月十三日より宿谷光則
 が土の半よ身を苦じめて在しけるが大師佐渡へ懸き給ふとき依智より一通の書を贈り今宵の寒さ
 よつけても半の中の有様思ひやられて痛はしきよし仙遣はされしかば日朝聖人はその御書を顔よ
 かじあて泣泣み給ひしが此御書を師匠とあはしめし明瞭これを讀上給ふにぞ獄舎の官吏もその師
 匠といひ弟子といひ其眞實の誠を感じこれを聞くとよ共よ袖をう絞りけるが衆生もとより佛性あ
 りこ、に立入る官吏の自然と日朝聖人の徳實を尊び折々その教化は預りて潜に御題目を誦依し袖
 のうちよ珠數を爪線者すくなからず奉行左衛門光則もその法弟の容子を聞てその師日蓮聖人も凡
 人あらぬと解へ知りふかく日朝聖人といははりける或時半舎の官吏主人より賜ひよとて盧樹の實
 を六七箇日朝聖人に奉りければ我が御師の好ませ給ふものなり我れ半舎の身よあらすば深山千里
 を隔つともこれを捧げて御悦の尊顔を拜し奉らんものをと涙よかきくれ給ふにぞ彼の官吏ひそか

よ主人光則よ歡喜願ひてさて日朝聖人に向ひ我々よきに計らひはるべし久々にて御師に備て安
 否を訪給へとて路個を布施するもあり乾飯を奉るもあり杖よ不借あよくれとしのひやかに土の半
 を立出翅も欲き心地して半よすくみし足跡を厭ふ空なき北海の佐渡をさしていとぎつ、塚原の雪
 の中よ大師と訪奉るよ夢かどばかり驚き給へば獄舎を護る官吏の情も些のいとまを得て渡りはべ
 るよし品々をさ、げて御心を慰め奉りける大師此嶋よ在すこと四年といへども月を數ふれば三年
 に過すその間に日朝聖人此に御師と訪給ひしこと八かどよふよふその辛苦艱難を思へば今泰平の
 御代に安座し斯心易く御題目を唱ふること皆是先師の大神我等が俸福を思はれける高祖大師も
 此十二月十三日の朝日輪ふたつならび出たること安國論も符合するよしなど種々の御物語有て廿
 三日富木殿への書又澄清ある淨顯義淨へも書を認め二通合せて御師へ渡し鎌倉より能き便宜もあ
 らばこれを贈りくれよとて名残をしくも日朝聖人へ御暇をう賜りける明れば文永壬申春かへれど
 も北國の雪よ曇れる空寒くけふしも正月十六日鳥獸さへ跡たへ一塚原よいとかしまじり人言はい
 かなるとぞ心得ねとうち見やり給へば兼て期したる念佛諸宗僧冬よりかり催したる越後越中出羽
 奥州信濃常陸六ヶ國の法師原印生坊邊道坊を先に立念佛宗よは浄土の三部或は止觀真言等弘法慈
 覺の尊類まで或は手に持又は離僧の首よかけさせ數百人さよも又塚原へ舞々を取つめたが今
 日こそ惡僧日蓮が問答にさしつまつり衆を合すと見物せんと在家の男女尼道心賺の甘きを慕ふが如
 く蠅の臭きよ聚るよ似たり六郎左衛門重連あれをき、もし過失とともあらんかと兵卒よ答櫻橋を



もたせつ、みづから小高き岡に在て見分せり斯て諸宗の侍等口々も悪口し我一番に服か、らんと先に争ふ在家の族は聲々阿彌陀如來の敵と疾ひき出して打殺せしむる高祖大師けしはさばがせて後御聲しづかみ各々一づまらせ給へ今日は法門の爲にこそ物渡りありつらん悪口難言はよしなき事ありと宣へば本間重運それと下知し悪口をすもの三三人首筋つかんで引出すに多漸く事改まつて見へよける真言師問ていはく真言亡國の證據はいかよ大師答て天よ二の日あく國よ二人の王なし汝が元祖の弘法は大日を崇めて本佛として教主釋尊を侮奉るその邪法なることは龍樹菩薩の大論九の卷を見よとありければ又立替る淨土宗南無といふ字は我が宗の彌陀如來に備りたるを御身は盗んで妙法蓮華經の頭につけられたるは其高言も似合ぬ不手際とわらひ詰るを大師は答め唐の南岳大師の識法にも天台大師の行法記にも南無妙法蓮華經と見へたるは一文不通の盲念佛問答無用と誡められ後より出るはおおむく淨土後手も書物をうちひらき物難言も題さし出だし和漢も念佛往生したる事書籍も載ていと多かり何を空氣で地獄といふや高祖こたへて念佛一門をひらきたる汝が宗祖の善導は毎日彌陀經三十卷念佛十萬遍を修行し眠らずして三十年又一生涯眠る女人を見ずか、る行者の身の果は柳も登り首を絞その細きれて大地に落非業の死を遂たる故その頃の人あだ名して楊柳の自害坊といはれ一は極樂往生の人といふべきか華嚴經よは非業の死を爲ものは多く地獄も生る、とあり淺間しくと有懲されし詞のはし宗旨はしらす老僧が諸宗の御經みな佛の方便いつはりと宣まへと佛も妄語はあきものをといはせも果す高祖大師妄語を説てこれを

眞實の道よ入るを佛の大慈悲方便といふ此事涅槃經十五の卷梵行品に見へたるぞ老僧その餘まで未だ辨へ給はずやと詰かへされ口は餅んで鼻爛り風愁たるはとうち咳き人の後背も後込す利劍をもつて瓜を割それより易き鈍佛法二言三言も過すして老分の智識色めければ其餘のものは我と斗る李道心の法門三昧經を忘れて論といひ論を引て釋といふ大師過々とし示し教導なし給ふよぞ書も熱湯をそ、ぐが如く皆滅落々々と消失て閉じし増る才學の聖人かなと恐をなして歸るもありあな尊一とて落降り人目も愧ず改宗するもまたすくあからず猶怒りまたへかねて地頭本間も妨げられ本意も遂中腹立しおのれ忍付而て愛目を見せんと口よつぶやき踊るもあり本間六郎重運もその博學辨智も感伏し聲振立やよ者等法門よ詰寄たる者は懺悔して聖人の法弟となれ左もなきものは今は用なし疾退すやと喚はりてその身も既にかへらんとせしを高祖一ばしと呼とよめ御身はあて鎌倉に往給はぬぞ北條殿我が詞を川ひ給はねば今は彼の地も台暇の始まりつらんと宣へば重運き、あへず聖人何をのたまふぞいま天下は無事よしてらは袋よ太刀は鞘何を當處よ箭をはげんといひ捨て立歸りけり廿三日中の刻ごろ日輪ふたつ非出たりとて岬中立騒て見物しいかなる事の前表ならんと語るうち二月十八日早船来て京都も戰あり又鎌倉にも軍ありとの注進あり本間重運あはて愕き塚原よまわり大士の前に胡跪き先月十六日の御伺いかにやと疑ひ奉りしよ今三十日よ一て符合せりされば大蒙古の寄來ると宣ふも相違はあらじ念佛無間も一定あるべし今日よりは聖人の檀縁と成て給はれと合掌す大士宣ふやう我へかひなき凡僧なれども法華經を弘むれば釋尊の御

使也梵天帝釋も我が左右に事へ日天月天も我が前後を守り天照八幡も頭を垂て我を敬ふべししか
 るを上下萬人これを悪んで失はんとするは唯事もおもはれずたとへば病ひも正氣を失ひその親
 とも罵りうつが如し矣しくは立正安國論よしるして鎌倉殿の御節よさし上置たり合戦の間や虜ん
 疾ゆき給へとありければ重運懇又暇を告一族郎等引具して太刀よ鎧とひしめきつ其夜船を飛して
 鎌倉へ走去けりさて高祖大士は去年十一月より此北海の雪の中より凍て死るならば一の不測を言
 残さんと水りし筆を阿にあた、め書綴り給ふやう日運は日本國の柱なり魂なり柱倒るれば家傾き
 魂去ば人斃る日運こ、に在て此經を持てばこそとばしも此國安穩なるも似たり日運去時は七難鏡
 起て日本國必定毀ぶべし此書は釋迦多寶十方の諸佛當世日本國をうつし給ふ明鏡なればかたみと
 も見るべしと一切生業の旨目をひらく大慈大悲をもつて開目抄と名づけ鎌倉の弟子檀越へ贈り給
 ひける此頃最運坊といへる天台の學匠罪有て此嶋又流されありしが國らず大士よ見天台の法華は
 正像二千年の用よして末法本因妙の法華經と經は同じけれども義も相違あるとを學び大ひも感じ
 て徒弟となり名を日運と賜はりける此日も茲よ來て法門を論議し當月五日の晚天明星ふたつ並
 び出たるも大運奇異の變なりとかたり居給ふ處へ鎌倉より日興上人熊王四郎兩人來て大聖人の慈
 まきを喜びたがひよ手を取泣給けり大士鎌倉の様子いかよと尋給ふよされば近年北條長時の子男
 治部大輔義宗京都よ登りて六波羅の北よ居又式部大輔時輔は南よ居これを用六波羅とて畿内西國
 の政事と取行ひ京鎌倉の間飛脚日夜よ往來し四國九州二嶋此沙汰居ながらよして鎌倉よ聞へ關の

東西よく治り諸民心易くありけるしかるも南六波羅式部時輔は最明寺殿の嫡子よて執權時宗の兄
 なりければ我もと鎌倉に在て執權と成べき身を舍弟の時宗よ其職を奪れかへすくも口惜しとて
 ひそかに謀叛と企てけるに其陰謀はやくも露顯よ及び鎌倉より早馬を以て北六波羅北條義宗よ下
 知を傳へ時一も二月十一日義宗軍兵を卒し不意よ放て南の館に資か、る京洛中上を下への大亂と
 まり式部時輔あへなく討れ家門一族戮を盡して討死せり公家よも中御門左中將時隆卿はこれよ興
 したりとて押籠られたりときく又十五日鎌倉よも北條左近大夫公時同中務大輔時時は時輔よ一味
 して執權を討んと討りし事も水の泡とて消るん身の果と討手を引受散々よ暇て討つうたれつ修
 羅圖鎌倉中の男女泣感ひ目も當られぬ騷亂に謀叛の類數百人討れはしたれ彼も一味かあらぬ
 かと人の心の疑はれいかよ成るべき世の機と安き心もあきよつけ大聖人の御教化に預りし人々は
 兼て仰の自界叛逆北條一門の同士打又信力彌々増進せり日興聖人の物語り耳新らしく聞給ふ折
 から念佛宗の印生坊と云もの塚原よ來て三ヶ條の難問と擧たり大士これとき、終り舌舌はかたち
 なし後の證據よ立がたしと筆を採其返答をしるしてこれをわたし給ふ印生坊無念ながらもまた返
 べき詞も無牙を咬て立去けり斯て鎌倉よりの沙汰として日運聖人を雜太郡一之谷よ移すべきよし
 守護所より下知をつたへ近藤次郎清久の承まはりとして新と家を造作四月七日こ、に迎入奉り日
 々の食事を贈るこれは信心の供養にあらず守護所よりの扶持方なり此一の谷の地は巖石嶮時海水
 蕨を洵へて風景又神妙なり大士時々此山上に登り給ひこ、に古木の松ありりと深く愛させ給ひ此

萬年の縁り我が妙法の榮へよ做ふべしとて毎日此松が根に御讀經ありしかばその松の邊りより清
 淨なる泉の湧出たり後年此地に寺と建て御松山實相寺といひこれを袈裟掛松と稱す總じて諸國御
 靈場に袈裟掛松とよぶもの多し先師の説は袈裟は十種供養のその一種なれば大士供養の心もて掛
 給ひしとあれども其理當らず袈裟は僧へ供養すべき品あり御經よまんとて先我が袈裟を脱て僧の
 行儀を失ふことその所謂無しこれは僧の立倚たるを掛錫と稱する義もて聖人の御袈裟を觸られし
 松といふ意あり惑ふことなかれさても本化の日輪誦法の水と碎き宗門や、此嶋は流布し信心の
 輩日々よいやましければ生輪道觀等會合して評議なすやう日蓮斯てこの嶋に在るらば國中は念
 佛の聲絶へ僧も尼も渴命も及ぶべし此上は鎌倉へ訴て彼れを奪めん事肝要なりと然合既一決し
 念佛者兩三人鎌倉へ出府なし日蓮毎日高き山に登て天下に變災を降したまへと祈るは道俗男女こ
 れを歸依し其祈りの聲一國に轟くとす訴へけるこれに依て鎌倉より近藤清久も仰せて流人日蓮も
 親しみ交るものは重罪たるべきよし國中は觸渡すされば鎌倉より替るゝ訪來て御朝もある弟子
 衆の食料さへ高祖御一人の御扶持なる粟飯を或は手分折敷取分弟ども油く露命を繋給ふよ
 程なく本間六郎重連鎌倉より歸り來り大士を尊敬すること厚く日ととも布施の供物を奉りければ
 念佛諸宗の惡徒等も今は爲すべなくぞ見へよける一之谷の邑主近藤次郎も此程は一宗殞らず歸依
 の心を起し其子十郎信重檀越と成て入道し同郡中興といふ地に住居して世々中興殿と稱す今の河
 原田妙經寺との古蹟なり信重の舍弟一位阿闍梨といへるも真首宗を捨て法弟となり學乘坊日靜と

呼けり時又日興聖人鎌倉へ歸り日持聖人かはり來て大士よかしずき奉る高木池上を始めとて
 檀越の人々折々の衣服をもたらし布施を捧げてその安否を尋ねむるものひきも切らずこの地と
 阿佛坊日得も聖人一之谷よ御移ありて路の程もいと遠くありければこの近きわたりよ家を構へて
 朝夕に往來せりろの地を人喚て阿佛村といひけるとす今北濱妙宣寺その古蹟なりけり茲にいと感
 すべきは鎌倉辻山の邊りに朱砂丹を製して世を渡らものありしが夫婦とも大士と歸依すること
 厚かりしにいぬる年夫婿死して二歳の女子ひとりありけり頼む方なきうき世の難儀夫婿がいまは
 の際までも日蓮聖人は佛の再來なるが我が亡き跡にも厚く供養し菩提を引ひくれよかしとわりし
 詞を身にしめて夫婿の紀念の女子を抱き海山萬里の辛勞も法の爲にはいと遠く佐渡が島よ
 わたり大士と供養し奉りければ大士も驚き感し給ひ一通の御文章かいたし、め玄奘三藏の天竺に
 渡り傳教大師の唐に往りは男子也賢人あり女の身として遠く此島よ法華經を供養し給ふとたと
 へ須彌山を懷て大海を渡る人はありとも未代よ此女人は見るべからず餘りよ感じて日妙聖人と名
 をまぬらすべしとぞ書給ひ日持聖人にもたしめて其旅宿も贈り給ふ日妙は涙ながらよ歸りけり同
 七月の下旬藤四郎といへる人も鎌倉より夫婦ともよ渡海して供養をさ、ぐ其彼の信者を多く聚め
 て説法ありし折柄よ齡二十にや超ぬらん容貌美麗のひとりの婦女紅白の衣服衣紋止しく此島よ見
 もなれず在とも思はぬ立振舞法席も列あり聴聞して在けるが説法終て高座よ居倚聖人願くば我よ
 本尊を賜はれと請大士諾ひ給ひければも其書べきの料の紙あしいか、は爲と思す處にこれへ御認

め給はれど紅の袖を押作てありければ大士御筆を取給ひ法施し奉る南無妙法蓮華經を遊ばし側
 和歌を 紅ひの袖よさ、げし法の華ひらく心のいつくしま姫とかきて安藝の國巖島女を書終らせ
 給ふと待待すして我が神祇の人間よしられんことを恐れてや一散よ袖振拂ひ西天はるか飛さり
 けり今安藝國宮島巖島明神の社よ此片袖を秘傳へて其女といふ字の横の一書の筆尾あかく引は
 ねてありといひ傳ふ又此宮島の周圍を守護す神を七浦明神といふ浦と裏とへ和訓連ひ給ふ七浦
 あり身延よ七面の明神あり誠よ一昧不二の威應秘密自在の神力とは知られけり今年文永 癸酉卯
 月の空の雲間より初不如歸ほのめきつ寝覺うれしき時と得ていでや本地秘妙の本尊をあらはし奉
 らんと四月廿五日より宵葉の甲を御祝ふ淋へ觀心本尊抄の一書をした、め七月八日初て大毘陀羅
 を書あらはし給ふこれを十界總歸命の御本尊とて久遠の釋尊五百塵點劫具する處の十界よして實
 相の妙境ありこれ我等衆生即身成佛の本尊よして佛滅後二千二百二十餘年一閻浮提の内にはまで
 決して顯れ給はぬ曼陀羅あり高祖日蓮大士一世の本懐た、此本尊よ附ること彼の觀心本尊抄よつ
 まびらかよしてこれ一宗門の根元とて知られたれけふしも日興日向阿聖人左右よ在して大士法
 筵をひらき御說法はじまりけり時に一人の比丘尼高座へ難問を問かけ理非も尋らず翻々よ無禮の
 雜言といひふらすよ大士しばらく黙へてきて宣ふやうむかし天竺の摩揭陀國よ摩訶婆といひし
 外道あり國王の御前にあいて徳慧菩薩と法輪に及び摩訶婆は實つめられて家へ歸り血を吐て死せ
 り其妻才學達辨あるものにて夫婿の死したるを深く隠し紅白粉よ泣顔を粧ひ鮮紅ある衣服を着飾
 り夫婿に代て問答せんと左あらぬ鉢よて其席よ入來るを徳慧菩薩はその面色よ愁を知り其音聲よ
 歎きを察し給ひ御聲たかく汝が夫婿は輪よつまりてはや死たり疾去すやと叱り給ひし例もあり今
 我思ひ合するよ汝は先頃塚原よて問答に詰りたる印生坊といへる僧の妻よして人の群たる法席に
 邪魔し理も非もわかす惡口して我よ愧をかややかし夫婿の敵討あさんとの結構と見受たり印生坊
 は念佛の利益よて頼もしき梵嫂を持れたりと仰けるよ一一座の春詣こらへかね威々一同に笑ひけ
 れば彼の比丘尼は顔鮮紅にして歸りけり
 釋尊在世の時王舍城の廓の内人家その數九億ありその内三億の家の人には佛の化導を受また三億の
 家よは唯その障を聞しのみ次の三億の人は一生佛を見ず聞ず同じ時節よ生をうけ同じ地よ住なが
 ら宿世の縁の爲業とて是非もなし如來の說法三百餘會機とて、のへ時を渡て四十餘年の後法華經
 を演給ひしよさへ五千の僧尼坐を立て退きたる在世すらす斯の如し此は末法五濁の勝勝るは例の惡
 業よて信する者は不測といふべ一茲に北條家の一門よ北條掃部輔時盛といふ人あり斯は時房の子
 時政の爲よは孫よして世に並ならぬ人なりけるが此頃また大蒙古の使趙良弼筑紫太宰府よ來り
 我が國の郡郷山川の事より男女の風俗等よ委しく見聞てこれを記し歸りけるよし鎌倉よ聞ゆ北
 條時盛ふかくこれと歎き當時の有様た、事よあらざ日蓮聖人こそ實に名付あり我が一門皆これと
 惡むとこれ天下の大事北條家の滅亡を招くなりといひひとり發明ありて使を立て佐渡が島へ翻々の施
 物と贈り師檀の契りを結び給ひけりこれ後年北條彌源太とて病身なりと世よ披露して政事よあづ

め給はれど紅の袖を押作てありければ大士御筆を取給ひ法施し奉る南無妙法蓮華經を遊ばし側
 和歌を 紅ひの袖よさ、げし法の華ひらく心のいつくしま姫とかきて安藝の國巖島女を書終らせ
 給ふと待待すして我が神祇の人間よしられんことを恐れてや一散よ袖振拂ひ西天はるか飛さり
 けり今安藝國宮島巖島明神の社よ此片袖を秘傳へて其女といふ字の横の一書の筆尾あかく引は
 ねてありといひ傳ふ又此宮島の周圍を守護す神を七浦明神といふ浦と裏とへ和訓連ひ給ふ七浦
 あり身延よ七面の明神あり誠よ一昧不二の威應秘密自在の神力とは知られけり今年文永 癸酉卯
 月の空の雲間より初不如歸ほのめきつ寝覺うれしき時と得ていでや本地秘妙の本尊をあらはし奉
 らんと四月廿五日より宵葉の甲を御祝ふ淋へ觀心本尊抄の一書をした、め七月八日初て大毘陀羅
 を書あらはし給ふこれを十界總歸命の御本尊とて久遠の釋尊五百塵點劫具する處の十界よして實
 相の妙境ありこれ我等衆生即身成佛の本尊よして佛滅後二千二百二十餘年一閻浮提の内にはまで
 決して顯れ給はぬ曼陀羅あり高祖日蓮大士一世の本懐た、此本尊よ附ること彼の觀心本尊抄よつ
 まびらかよしてこれ一宗門の根元とて知られたれけふしも日興日向阿聖人左右よ在して大士法
 筵をひらき御說法はじまりけり時に一人の比丘尼高座へ難問を問かけ理非も尋らず翻々よ無禮の
 雜言といひふらすよ大士しばらく黙へてきて宣ふやうむかし天竺の摩揭陀國よ摩訶婆といひし
 外道あり國王の御前にあいて徳慧菩薩と法輪に及び摩訶婆は實つめられて家へ歸り血を吐て死せ
 り其妻才學達辨あるものにて夫婿の死したるを深く隠し紅白粉よ泣顔を粧ひ鮮紅ある衣服を着飾
 り夫婿に代て問答せんと左あらぬ鉢よて其席よ入來るを徳慧菩薩はその面色よ愁を知り其音聲よ
 歎きを察し給ひ御聲たかく汝が夫婿は輪よつまりてはや死たり疾去すやと叱り給ひし例もあり今
 我思ひ合するよ汝は先頃塚原よて問答に詰りたる印生坊といへる僧の妻よして人の群たる法席に
 邪魔し理も非もわかす惡口して我よ愧をかややかし夫婿の敵討あさんとの結構と見受たり印生坊
 は念佛の利益よて頼もしき梵嫂を持れたりと仰けるよ一一座の春詣こらへかね威々一同に笑ひけ
 れば彼の比丘尼は顔鮮紅にして歸りけり
 釋尊在世の時王舍城の廓の内人家その數九億ありその内三億の家の人には佛の化導を受また三億の
 家よは唯その障を聞しのみ次の三億の人は一生佛を見ず聞ず同じ時節よ生をうけ同じ地よ住なが
 ら宿世の縁の爲業とて是非もなし如來の說法三百餘會機とて、のへ時を渡て四十餘年の後法華經
 を演給ひしよさへ五千の僧尼坐を立て退きたる在世すらす斯の如し此は末法五濁の勝勝るは例の惡
 業よて信する者は不測といふべ一茲に北條家の一門よ北條掃部輔時盛といふ人あり斯は時房の子
 時政の爲よは孫よして世に並ならぬ人なりけるが此頃また大蒙古の使趙良弼筑紫太宰府よ來り
 我が國の郡郷山川の事より男女の風俗等よ委しく見聞てこれを記し歸りけるよし鎌倉よ聞ゆ北
 條時盛ふかくこれと歎き當時の有様た、事よあらざ日蓮聖人こそ實に名付あり我が一門皆これと
 惡むとこれ天下の大事北條家の滅亡を招くなりといひひとり發明ありて使を立て佐渡が島へ翻々の施
 物と贈り師檀の契りを結び給ひけりこれ後年北條彌源太とて病身なりと世よ披露して政事よあづ

からず入道して蓮盛と號し富士山の風景よ老の心を養んと駿州に際通し専ら大師に心を傾け御經
いとまなかりけるかくて其年もくれ明れば文永十一年甲戌二月八日の事ありけるが故權北條時宗
の夢よ緑色の官服着たる童子來て日蓮聖人を救さづば一門の滅亡近きよやあらんと告たりける驚
きさめて胸怛怖夜もはや明たりければ御腰所を立出忙然として在ける折平左衛門頼綱出仕せり
と聞へけるよ御所へ召され刻限の例より早き今朝の出勤ゆえもやあらんと仰ありけるよ頼綱體
しんでこの曉方不測の夢を見はべりきと言せも果てず執權宗時その日蓮救免の事はあらぬかと
主従たがひよ顔見合せ毫頭たがはぬ夢がたり辰の太鼓の聲々とうちひ々き評定兼奉行人追々館よ
出仕ありみあゝ彼の夢語りを傳へき、夢は跡なき思想あるを中才覺をいふも多かりけれど執
權時宗頭を掉夢は心の影よして精神の感する處なれば周の世も夢を占ふ官人ありて聖人もこれ
をもちひ給ひきといよ、日蓮聖人救免ときはまりその下知状をか、せ宿屋左衛門これを受とり
私の計として其救免状をひそかに日朝聖人に渡しけるこれは日朝聖人久しく宿屋の半内よ在
ける時光則はじめ其家人までも深く日朝師の教化よあづかり此大法を信じけるもよ半舍御免の後
も多くは宿屋光則が邸宅よあはせしをもつて今日彼の御救免の状うけおさめ天へも登る心地して
その御状を頸にかけ夜を日に纏ていきせきと佐渡をさしてぞ急ぎける高祖大師は配所も今はあか
くよ信心歸依の輩多くうきを忘れてけふもまた人々御庵室よ集りて種々の法門遊ばしける折庭
の梢よ響び啼する鳥を御覽ありけるよ其眼ばかり白きからすあり皆々不審けるを大師は確と膝を

うち給ひ我が流罪の救免も近きよあらんか其故は唐土燕の太子丹といへる人ひさしく秦の國よ囚
れとなりておはしけるが始皇帝の宜ふやう願の白き鴉出たらば救て國へかへすべしと問ゆるにぞ
太子天よ祈り給ひ一に頭の白き鳥出たるとあり又我が初に垣基法師紀州熊野よて其鴉を見て
山がらすかーらも白くありにけり我かへるべき時や來ぬらんと詠れしともありこれをもて我が
救免あるべき瑞相よやと覺ゆるありとかたり給ひき春の日影もたそがれて夜もや、子の時ちかく
ありよけりときよ日朝聖人は漸く三月七日の夜小木濱よ着船し性善坊の家に一夜を明し翌八日こ
をうち立給ふよ御身の疲脚の憫いとをばつかなくみゆるよ予性善坊は遠く新町といふ地まで見
送りまわらせて別れけり日朝聖人心は箭長とはやれども海山遠き長の旅漸々こ、よ近づきて氣も
稍弛みて疲をまし急ぐとすれど路はかゆかすさすがよ永きはるの日も途中よ暮て夕月も木立よ暗
き爪揚り後山といふ坂道に踏迷ひ雪尙うづむ白妙に方角さへもとり失ひ草鞋ちぎれ杖も折れ身体
つかれてす、みえず御りの石よ腰うちかけ御師はいづくに在ますぞ日朝よはべるはと聲振り立て
や、と喚ぶ音は御につたへ來て路猶へたつ十町あまり彼方の麓よ松火とふりてらし日與聖人今宵
大士の仰にて最速坊が病身をいたはりつゝ室よ送りし戻り道賊心諸天の擁護よや其聲はやく耳に
入それを知るべよ山坂とやうくこゝに尋ね來て御救免の事をき、喜び泪せきあへず互よ詞もな
かりけり
此地名を後山といひ坂を今の日朝坂といふ腰懸給ひ一石をば救免石また開運石といふ日朝師の徒

弟日行聖人その後を慕ひ千歳越え御涙の散をどゞめ日朝山本光寺を建立し生涯門を著て紙と續
 此靈石を撫て朝夕先師の艱難を思ひ涙とそゞぎ給ひけり
 日興師は朝師の手をとり肩に扶け御座室に立戻り絆の始終を物語りけるにぞ大士はとゞ歡喜給ひ
 夜の明るを待て日興を將て新羅の守護所にまわり本間重連に其狀を渡し給ふ重連取て封かきり
 日蓮法師御勘氣の事免許せらるゝ處あり文永十一年二月十四日行兼前長行平光綱承はる左内門
 入道殿と讀上げるよぞ大士睡んで承領しこれより諸方へ暇と告發足の要意取々よぞありける國中
 歸依の人々うち聚り名残を惜み奉る中よも一の谷入道清久はわが宿世の障りよや今に家と改宗す
 ると協はず何ぞぞ鎌倉へ歸り給はゞ御筆の法華經を渡し給はれと願ふ又其弟日靜はあまりの悲し
 さに佛工伊勢小太郎よ大士の像を彫刻せしめて開眼を請今につたへて鏡の尊像といふ最速坊は我
 近き頃病まいたく身を苦しめられたれば餘命もはかりがたし再會もひ絶たりといひさして泣大士も
 袖をぬらし給ひ我たまゞ護言に逢ふてこゝに流罪せられはからず法を此島に弘めたりとのく
 いよゞ信心をばびまし大法を護りたまへ人の命は水の泡消るははやき世のならひ未來めでたく
 靈山の面會を期するのみとてうち立給ふ三月十三日の夜羽茂郡遊手十四日よは細浦にやせり十五
 日赤泊なる錨屋彦右衛門といへるもの御船と供養し奉り棹を降て浪風穩まはやくも越後國柏崎よ
 着船ありける茲に上陸なし給ひ路の傍に番神の祠あるを御覽つてあたりの清水に御手をそゞぎ
 しばし法樂の御經を誦給ひこれより新羅郡府中へ宿り給ふこゝよ河わり水難度々よ及ぶ山間召

磯よ經を齎て陀羅尼を讀み給ふ今よ此地を陀羅尼町といふ時よ一人の山伏山迎へて精侍其案内
 よ任せて待給ふよ彼の山伏日朝日興兩師の持たる袂包を取て村ようちかけ先よ進み真育の朝日寺
 といふよ入奉りて山伏は影もどゞめすなりにけり茲に常院の木尊毘沙門天は行基菩薩の靈作あり
 けるが此木尊の前に彼の袂包はありける住持吉祥大慈法印その不測を拜し忽大士の徒弟となり名
 と日朝と賜ひ寺を吉祥山日朝寺と喚改めたりそれより信濃路にさゝかり吉田といふ山里にやど
 りたまふ家の主翁芝田右近衛縁や深かりけん受戒して一家殘らず歸依の心を發すそのうへ一人の
 男子を法弟よ奉る大士尊んで隨身を救し給ふこれ後よ和泉阿闍梨日法聖人とて中老の其一人と
 て佛像の彫刻に妙を得給ひし人なりさてしも當國よは念佛者こゝかしこよ多く翠りて佐渡の國の
 者どもは育甲斐あし阿彌陀佛の大敵日蓮を活てかへす事やあるとて幽路よ森陰よと評斷して海中
 ようち殺さんと謀りける當國の領主村田大隅守かねて大士を信じてありければこれを傳へき、家
 臣をあまたつかはして路次の非常をいましめ見送り給ひけるゆゑ事故なく武藏國兒玉よ着きたま
 ふ兒玉六右衛門時國その意なきを歎び御赦免を祝し盃をすゝめてこゝに一夜を供養し明の日は
 久米川まで送りまわらするにぞ大士悦んで姓氏を久米と賜ひ本尊を授けたまふ久米川岸陀羅が淵
 とて今よ其名を傳へけるかくて又久米川の邊りよ關善左衛門といふ者あり其妻難産よ苦て救ひと
 請ふ大士其家に入て新しき飯匙のありけるを取てこれよ本尊を齎て産婦よいたゞかせ給へばたち
 どころよ安産して母も子も恙なし一家一門その感應を拜みて一時よ改宗せり其飯匙よ大士の尊像

を彫んで腹籠りとし武州谷中善性寺を建立して此尊像を安置し安産救護の利益盛ありしが後
 威應寺よりつし又故ありて谷中瑞林寺にありがめ利益むかしよかはらずかくて鎌倉の徒弟檀越大士
 の御救免を悦び小町夷堂橋の北詰御菴室を構へて三月廿六日今日こそは御着ありとて我もく
 と出むかへて大士を茲に入奉り宗運のかざりなきと祝して一同に掌をうつて流布萬年と喜びける
 四月八日高祖大士を御館に召寄られ上段は執權時宗その外一門列國の大小名左右に居流れたり
 平左衛門頼綱前より、み前年よりは似ぬ恩惠の挨拶は時候寒暖の賜答と聖人もつ、なく一段のよ
 し禮節終りさて言やう聖人前々よりの詞逸々符合なしたり此うへは彼の大業古はいつ頃か此國を
 うつべきや大士答へて經文又いつと月日は見へぬども天の御怒り烈しく返て身へはべれば多分
 今年の内なるべし頼綱言やふそは何故ぞや大士かさねて天下の上下邪宗を信じ正法をうとみ給ふ
 により守護の善神此國を棄てまもらず三災七難たれかこれを防がんあはれ此後天下御大事あら
 んとき御祈りは努々真言宗等に仰付あるべからずも我がとばよ背き給はしよく急いで此國
 滅ぶべし兼て前年より言上たるは此一大事なりと席を脱んで宣ひしありさまは實に國家の柱動き
 なく殿中しづまりかへつて見へよける列座の中より法門尊ねられしをそれかれと説諭して歸り給
 ふ今年彌生の初めより雨霽すくなく早魃にありければ加賀法印定政御祈願の任さればとて雨霽あ
 りしに雨は降出けれども大風吹流人家をふき潰し堤崩れて洪水陸を押開東の田畑とくく荒蕪人
 畜死することおびたし鎌倉殿驚いて又大士を召て雨請の事を尋ね給ふ大士仰あるやう邪なれど
 も法なれば雨は降るべし一かしながら世を害する毒雨あり此事和漢の例ありとて古き例を引て暫
 上ありけるよ鎌倉殿かさねての命は聖人の念佛無間等の法門は道理はさる事ながら世間是を聞て
 喜ばず今よりそれを罷め給ひ御所の西門外に新たよ愛染堂を建良田一千町を寄附して天下安全の
 祈願所と仰かんとこの台命なりけるに高祖愼んで諸宗無得道の法門は大慈大悲の根元なり天下の
 存亡は唯此一事あり日蓮此國は生れたれば身をば從任奉るやうあれ心は随ひまひらすべからず
 とて坐を立て退出なし給ふ執權時宗悉々これを察したまふに日蓮聖人は實に末代ありがたき名僧
 なりこと此其心魂のゆるがぬ事武門よこれをいは、大丈夫とも英雄とも稱するは此人の事也佛の
 御使ありと名乗も荒涼の言もあらずと頼りよ感激なし給へども天下の人の謗りをあもひ一門の嘲
 りと恥て一心決定をし給はず去とて棄置も心易からずと宗門弘通の定牒と書て五月二日使者を以
 てこれを渡し給ふよ其狀は曰く頃年あまた真法の威力御威最も深し三國此類なき妙宗後代ありが
 たき尊僧いづれの宗かこれよ此せん日本國中宗門を弘る事其妨あるべからず城左兵衛奉る日
 蓮上人とありて月日の下よ時宗の黒印ありて奥州仙臺孝勝寺に傳來すかくて高祖大士これを見そ
 きはして歎息なり給ひ我言を用ひずして徒に此狀を賜ふは筆と取らずして筆法と學び筆を服せず
 して秘師を頼とするが如し世を憚り人を懼るは眞實の事よあらず唯我が大法は願ふのみ古人の訓
 に諫むべきを諫めざるはこれを尸位といふ退くべきを退かざるこれを懷寵といふ尸位と懷寵とは
 國の佞人なりといへり三度いさめて用ひられず身を退くは先賢のならひありとこれより遊世の御

を彫んで腹籠りとし武州谷中善性寺を建立して此尊像を安置し安産救護の利益盛ありしが後
 威應寺よりつし又故ありて谷中瑞林寺にありがめ利益むかしよかはらずかくて鎌倉の徒弟檀越大士
 の御救免を悦び小町夷堂橋の北詰御菴室を構へて三月廿六日今日こそは御着ありとて我もく
 と出むかへて大士を茲に入奉り宗運のかざりなきと祝して一同に掌をうつて流布萬年と喜びける
 四月八日高祖大士を御館に召寄られ上段は執權時宗その外一門列國の大小名左右に居流れたり
 平左衛門頼綱前より、み前年よりは似ぬ恩惠の挨拶は時候寒暖の賜答と聖人もつ、なく一段のよ
 し禮節終りさて言やう聖人前々よりの詞逸々符合なしたり此うへは彼の大業古はいつ頃か此國を
 うつべきや大士答へて經文又いつと月日は見へぬども天の御怒り烈しく返て身へはべれば多分
 今年の内なるべし頼綱言やふそは何故ぞや大士かさねて天下の上下邪宗を信じ正法をうとみ給ふ
 により守護の善神此國を棄てまもらず三災七難たれかこれを防がんあはれ此後天下御大事あら
 んとき御祈りは努々真言宗等に仰付あるべからずも我がとばよ背き給はしよく急いで此國
 滅ぶべし兼て前年より言上たるは此一大事なりと席を脱んで宣ひしありさまは實に國家の柱動き
 なく殿中しづまりかへつて見へよける列座の中より法門尊ねられしをそれかれと説諭して歸り給
 ふ今年彌生の初めより雨霽すくなく早魃にありければ加賀法印定政御祈願の任さればとて雨霽あ
 りしに雨は降出けれども大風吹流人家をふき潰し堤崩れて洪水陸を押開東の田畑とくく荒蕪人
 畜死することおびたし鎌倉殿驚いて又大士を召て雨請の事を尋ね給ふ大士仰あるやう邪なれど
 も法なれば雨は降るべし一かしながら世を害する毒雨あり此事和漢の例ありとて古き例を引て暫
 上ありけるよ鎌倉殿かさねての命は聖人の念佛無間等の法門は道理はさる事ながら世間是を聞て
 喜ばず今よりそれを罷め給ひ御所の西門外に新たよ愛染堂を建良田一千町を寄附して天下安全の
 祈願所と仰かんとこの台命なりけるに高祖愼んで諸宗無得道の法門は大慈大悲の根元なり天下の
 存亡は唯此一事あり日蓮此國は生れたれば身をば從任奉るやうあれ心は随ひまひらすべからず
 とて坐を立て退出なし給ふ執權時宗悉々これを察したまふに日蓮聖人は實に末代ありがたき名僧
 なりこと此其心魂のゆるがぬ事武門よこれをいは、大丈夫とも英雄とも稱するは此人の事也佛の
 御使ありと名乗も荒涼の言もあらずと頼りよ感激なし給へども天下の人の謗りをあもひ一門の嘲
 りと恥て一心決定をし給はず去とて棄置も心易からずと宗門弘通の定牒と書て五月二日使者を以
 てこれを渡し給ふよ其狀は曰く頃年あまた真法の威力御威最も深し三國此類なき妙宗後代ありが
 たき尊僧いづれの宗かこれよ此せん日本國中宗門を弘る事其妨あるべからず城左兵衛奉る日
 蓮上人とありて月日の下よ時宗の黒印ありて奥州仙臺孝勝寺に傳來すかくて高祖大士これを見そ
 きはして歎息なり給ひ我言を用ひずして徒に此狀を賜ふは筆と取らずして筆法と學び筆を服せず
 して秘師を頼とするが如し世を憚り人を懼るは眞實の事よあらず唯我が大法は願ふのみ古人の訓
 に諫むべきを諫めざるはこれを尸位といふ退くべきを退かざるこれを懷寵といふ尸位と懷寵とは
 國の佞人なりといへり三度いさめて用ひられず身を退くは先賢のならひありとこれより遊世の御

志しよ決心な一給ひけり此夷堂橋の御庵宿後寺となりて妙熾山本覺寺と號し身延山十一代行
 覺院日朝聖人高祖御眞骨をこゝに分て東身延と稱す此東南川を隔て比企ヶ谷なり大學三郎能木宅
 を轉じて寺となし高祖大士開道供養ありて亡父判官能員の法號ある長興また今年八十歳母妙本此
 兩親の名をもつて長興山妙本寺と號し大學三郎制髮して木巧院日學と名づけ大士日昭聖人を召て
 御身比企が谷に住職して當地の弟子檀方を教導すべきよし御願ひありけるよ日昭而隨んで宜ふや
 う今法運既開けたりといへども諸宗の怨敵尙聞をうかひ宗論も事よせ權威をかりて當宗を伐
 んど討ること度々に及ぶもし上に偏頗の方人あらば正法も却て辱しめをうけ邪宗の爲す寺を潰し
 僧を追ふ事もやありなんされば身不肖あれども拙僧寺を離れて濱土に居り甲冑を枕として身を
 安んぜず宗門も不時の法戰あらん時へ横合より討て出共相手とし暇ふべしとすればよしや無法の
 難義を受るとも我身ひとりの事よて宗門と寺とを怪我はあらじ大聖人ふかくこれを察し給れと
 ありければ大士も昔の約束を忘れず他まで宗門の後殿する事を感じたまひ日朝を以て妙本寺を住
 職とさしめ給ひけること、に日朝聖人の法弟日灌師は小町に正覺院といへる真首の寺ありけるを唯
 一人ひそかに馳向ひ一問答も攻落して寺號を大巧寺と改て先第一に比企が谷の末寺とはおしたり
 ける時又宿屋左衛門光則は入道して西僧と號してありけるが大學三郎が其宅と寺となしたると見
 て我が邸のうちよ一寺を建立し父の名を山號とし我が名を寺號として行時山光則寺と呼び日朝聖
 人を請じて開山と仰ぐ昔の怨敵今の權越實に邪正一如の大法といひつべし高祖大士は數多の檀越

我が方へ御入あれと昔口々よ御勸めありけれども應へ給はず兼ての約束なればとて波木井六郎實
 長の方へ志し甲州身延山へ趣き給ふ五月十二日諸方へ暇を告げて既打立給ふよぞ老若男女御名
 残りをおしみ送り來るものひきもきらす三里五里の外に別れを悲しみ猶忘れがたくて儼と敢ち丘
 よ登りて御後影を拜奉るも多りける隨從よは日與日向日頂日持日進その余久木坊熊王四郎を附添
 奉りけるその夜は酒匂よ一宿を給ふ濟度山法船寺その跡なりといふ十二日駿州竹の下鈴木繁八
 が供養をうけ給ひ十四日車返し十五日富士の大宮なる遠藤左衛門の家よ宿り給ふ夫婦喜んで布施
 の鷲目一結をさぐ又柏餅を献じ酒を勸むこれより里の名と柏酒村といふ鷲目山本光寺といふ寺
 あり此日大宮の莊野中村ある由井五郎受戒して權越の契りを結ぶこの人は高士郡長河合を領す
 るゆゑ世に河合入道と稱す今その地よ河合山妙光寺あり十六日内房にやどり給ふ爰よ一人の老尼
 あり當郡大鹿村なる三澤小次郎の叔母なりけるが兼てより大士の高徳よ歸依してありければ一室
 を淨めて、に大士を請待し種々よもてなし來るその夜瀬々の水音しづかよ月かげをもしらく深川
 よ浮び山里の風浪みこ、るよや協ひけん
 全臥よふす夜のあまり寐れぬば月を身延よ起かへるかあ
 と一首の歌を口吟給ひし後年日遠聖人もこゝに月を見て
 谷川にうつる今宵の月影をうつぶさよ寐てあがめけるかな
 と詠たまひ又草山の元政聖人身延詣の時この地にやどりて

うつぶさよ寐られぬものか片敷の枕の山よ不盡のしら雪
と詠じ給ひしこれを内房三詠と世に稱すいま高祖の靈跡をよめて長遠山本成寺といふ一寺あり
さても高祖大士これより甲州の地入り南部の眞言寺に一宿なし給ふ住持大輪法印その徳も感じ
改宗して名を日蓮と賜ふ十七日相俣といふ處よりたり給ふ山水の美景もいはれざれば石も腰
うち掛てしばし休らひおはしけるに此近きあたりより正右衛門といふもの、妻ありとて山家の
ならひ頭のうへに飯櫃をいたゞき頓て大士の前におろし粟仙を奉る大士ことよ喜びたまひ各々居
非んで喰終りし又一條六郎信長と云人あり茲地に住居するゆゑ人呼んで相俣殿といふこれまた
波木井殿の一族よてありければこゝより子息太郎光家を案内よさしそへて送りける波木井六郎實
長はその一門師依の者を伴ひ遠く途中より出迎へその歡喜一かたならず先波木井の邸宅へ入奉りて
れより六郎實長は地割をあたし繪圖面を發し相應なる一寺を建立せんと企て給ひたるを高祖は堅く
辭退なし我が意も協ふ極は斯ありたしと御留ありければ波木井殿も力なくされば實長も任せ奉ら
んと番匠二三人木を伐茅をつかねいさゝかある御庵室をぞいとあみはじめけるかくて大士はしば
らく波木井の方よおはしけるが當地より程近き小室といへる處よ慧長法印進智といふ才學の修驗
者あるよし聞たまひ五月雨の雲吹されて青葉も薫る風いささよく在ければ日與日向の兩人を伴ひ
遊びがてらに彼處よおもむきあたりの石の上よ御腰うちかけ讀經ありしを善智法印問とがめて、
に來て法輪よ及ぶ善智たちまぢ辭破られ開口して徒弟とあらん事を願ひけるまたこの小室といふ

地の水田よは蛙あびたゞしくありて畔を塗野夫苗植る暇の女が手足よ嗽入血を流し見る目いぶせ
く思し召大士田の畔よ立てしばし御經あそばしける是より此地の蛙は人につく事なく頭よ一點の
星ありて世に小室蛙といひ傳ふさすがよ山里は夏も木陰の涼しくて思はず坐よ路と徒行石和とい
ふ地にいたり給ひし頃此程の空の癖とて俄よ雲立雨ふり出しかど宿るべき家さへあらずまばし機
際の雨やどり日は暮さして入相の鐘もかすけき山河の流れようつる灯火は人の住家と覺ゆるは一
夜の宿をたのまんと河原づたへよあゆみ給へば瘦枯たるひとりの老翁身よ襦袢をまきひつゝ出迎
へこなたへ入らせ給はれとありて庵の網戸もまばらして人すむべくもあらぬ家よ伴ひまかせ我
は鶴詞を業として物の命を取つゝも唯一筋の玉の緒をつぎ兼たる惡業人聖人何ぞぞ我を憐れみ
此宿業をたすけさせ給はれと合す漱さへもいと細く減なんとする燈火の火影よふして泣しづむ大
士はこれを不便におぼし御經一すかよよみすまじ給へば彼の老翁も苦痛なる懸細々と共よ御題目
唱へけるがーばしゝて大士を伏拜み御經方にて業障の閉もはれ菩提まさはる雲もあしこれみあ上
人の賜ありと悦ぶ聲も山川の水の音さへ小夜ふけてきゆると見へし燈火の岸のはたるの影落の明
方ちかくありよける四邊へひろき河原よて宿りし家の跡もあ一日與日向もともよ望然としてあり
けれバ大士はあやしみ給ふ氣色もなく斯は孤獨地獄とて殺生人の落る地獄ありとて茲に三日の間
御行をとゞめ給ひ礫よ御經を奪もて川に投沈め給ひし其幽靈渡の跡跡を鶴詞川遠妙寺とて今に
石和よ残りける夫より北原を過給ふよ胎藏寺といふ眞言の寺あり地蔵堂の側石にしばし休らひ